

鳥取市文化財報告書 16

# 西 桂 見 遺 跡 II

1 9 8 4

鳥取市教育委員会  
倉見古墳群発掘調査団

鳥取市文化財報告書 16

西桂見遺跡 II

一九八四

倉見古墳群発掘調査団  
鳥取市教育委員会

## 鳥取市文化財報告書16

## 『西桂見遺跡Ⅱ』正誤表

P	行	誤	正
2	第1図中	・ 大桶	大桝
3	20	・ 天神山城下の他	(20) 天神山城下の他
8	32	・ 写真撮彰を	写真撮影を
13	6	・ 墓塚掘り方を	墓塚掘り方を
14	15	・ 除々に	徐々に
21	20	・ 同壁は	周壁は
42	24	・ 孤状	弧状
46	11	・ 孤状	弧状
49	8	・ SK117と切って	SK117を切って
54	17	・ 瀬戸谷皓氏	瀬戸谷皓氏
58	表6見出し	・ 掘り方平面形態	掘り方平面形態
60	12	・ 板材5枚	板材6枚
67	25	・ 除々に	徐々に

★ お手数でも訂正をお願いします。

## 序 文

豊かな水と緑に恵まれた鳥取市は、人口13万人余の県都として、また山陰の中核都市として発展してまいりました。古来より、政治、文化、経済の中心地であった鳥取市には、多くの有形無形の文化遺産が今に伝えられており市民の誇りとなっています。

鳥取市教育委員会といたしましても、文化財の重要性を十分に認識し、その保護、保存に鋭意努力しているところであります。

今回の発掘調査は、民間開発企業による土砂採取事業に伴って実施されたものです。発掘調査の結果、古墳をはじめ弥生墓、中世古墓を検出するなど多大な成果を得ることができました。

この調査記録が、多くの市民各位に活用され、埋蔵文化財への理解を深め、認識を深める上で役立つとともに、わずかでも学問の進展に貢献できればと願うものであります。

調査事業に際しては、事業者である(有)宝和産業はじめ関係各位の温いご支援、ご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げる次第であります。

昭和59年12月

鳥取市教育委員会

教育長 田 村 一 三

## 例 言

1. 本書は、昭和55、56年の2年度にわたって発掘調査を実施した西桂見遺跡の調査記録である。発掘調査は、(有)宝和産業の委託を受け鳥取市教育委員会の組織した倉見古墳群発掘調査団が実施した。
2. 調査地は、鳥取市桂見字堤谷718、高住字鷲谷口841-1、845である。
3. 本書に掲載した実測図、図版写真は、調査に参加した全員の協力によって作製した。
4. 本書に用いた方位は第1～3図を除いて磁北を示し、レベルは海拔標高である。
5. 本書の編集は、調査参加者はじめ多方面の方々の指導、援助、協力を得て、前田均、杉谷美恵子、平川誠が行なった。
6. 発掘調査によって作製された図面及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。

# 目 次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 西桂見遺跡の歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の経過	6
第1節 調査の経過	6
第2節 発掘調査日誌(抄)	7
第Ⅲ章 調査の概要	10
第1節 B地区の調査	10
1. 倉見2号墳	11
2. 倉見3号墳	11
3. 倉見4号墳	14
4. 中世墓	19
5. その他の遺構	22
第2節 C地区の調査	23
1. 土 壙 墓	25
2. 中世墓	33
3. 土坑状遺構	40
4. 溝状遺構	40
第3節 D地区の調査	42
1. 倉見5号墳	42
2. 倉見6号墳	47
3. 土 壙 墓	48
4. 溝状遺構	52
第Ⅳ章 ま と め	53
第1節 倉見古墳群の調査について	53
第2節 土壙墓群について	56
第3節 中世墓群について	63

## 図 版 目 次

- 図版 1 1. 西桂見遺跡遠景（東から） 2. 西桂見遺跡遠景（西から）
- 図版 2 1. B地区遠景（東から） 2. B地区遠景（西から）
- 図版 3 1. 調査前の倉見2号墳（南西から） 2. 調査後の倉見2号墳（南西から）  
3. 調査前の倉見3号墳（南西から） 4. 倉見3号墳主体部（南から）
- 図版 4 1. 倉見3号墳主体部（西から） 2. （上段）遺物出土状況  
3. （下段）主体部横断面
- 図版 5 1. 調査前の倉見4号墳 2. 倉見4号墳主体部（北東から）
- 図版 6 1. 4号墳主体部遺物出土状況（南西から） 2. 4号墳墳頂部遺物出土状況  
（北西から） 3. 4号墳墳頂部遺物出土状況（南東から） 4. 4号墳墳頂部  
遺物出土状況細部
- 図版 7 1. 中世墓SK02 2. 中世墓SK04 3. 中世墓SK06 4. 中世墓SK07
- 図版 8 1. SK101（西から） 2. SK101遺物出土状況 3. 段状遺構（北東から）  
4. 段状遺構（南西から）
- 図版 9 1. 調査前のC地区（北東から） 2. 調査後のC地区南西部（南西から）
- 図版10 1. 調査後のC地区北西部（南西から） 2. 調査後のC地区北西部（北西から）
- 図版11 1. SK102木棺痕検出状況（南東から） 2. SK102（北西から） 3. SK  
102木棺痕検出状況細部（北西部） 4. SK102木棺痕検出状況細部（南東部）
- 図版12 1. SK104（南東から） 2. SK104遺物出土状況 3. SK105（南東から）  
4. SK106（南西から）
- 図版13 1. SK107（北東から） 2. SK108（北東から） 3. SK108木棺小口痕検  
出状況
- 図版14 1. SK109（北西から） 2. SK110（北西から） 3. SK112（北西から）  
4. SK110（南東から）
- 図版15 1. SK113（東から） 2. SK113（南西から） 3. SD02（北西から）  
4. SD02遺物出土状況
- 図版16 1. 中世墓SK08 2. 中世墓SK09 3. SK09遺物出土状況  
4. 中世墓SK10
- 図版17 1. 中世墓SK11（南西から） 2. SK11甕棺出土状況 3. SK11甕棺内遺  
物出土状況 4. SK11墓壇底部
- 図版18 1. 中世墓SK12（南西から） 2. SK12（北東から） 3. SK12墓壇

4. SK12墓境内遺物出土状況
- 図版19 1. 中世墓SK15 2. SK15土器床出土状況 3. SK15礫出土状況  
4. SK15土器床出土状況細部
- 図版20 1. 中世墓SK13 2. 中世墓SK14 3. 中世墓SK17 4. 中世墓SK16
- 図版21 1. D地区遠景（北東から） 2. D地区近景（南東から）
- 図版22 1. 調査前の倉見5号墳（南東から） 2. 調査後の倉見5号墳（南東から）
- 図版23 1. 倉見5号墳第1主体部（南東から） 2. 5号墳第1主体部遺物出土状況（壺）  
3. 5号墳第1主体部遺物出土状況（器台）
- 図版24 1. 倉見5号墳第1主体部横断面（南東から） 2. 5号墳墳丘盛土層検出状況  
（北西トレンチ） 3. 5号墳周溝（南から） 4. 5号墳周溝断面（南東から）
- 図版25 1. 倉見5号墳第2主体部（南東から） 2. 5号墳第2主体部石枕検出状況  
3. 倉見6号墳（東から）
- 図版26 1. 倉見6号墳主体部上面礫出土状況（北東から） 2. 6号墳主体部（北西から）  
3. 調査前のD地区土壙墓群 4. SK114（西から）
- 図版27 1. SK115（南東から） 2. SK115木棺小口痕検出状況（南東部）  
3. SK116（南東から） 4. SK116木棺小口痕検出状況（北西部）
- 図版28 1. SK119（南西から） 2. SK119遺物出土状況（南東から）  
3. SK119遺物出土状況細部 4. SK120（北東から）
- 図版29 1. SD03（北東から） 2. 調査後のD地区土壙墓群（南東から）
- 図版30 出土遺物（倉見3号墳、倉見4号墳）
- 図版31 出土遺物（倉見4号墳、倉見5号墳）
- 図版32 出土遺物（SK101、SK104、SK108、SK119、SD02、SK09、SK12、表採遺物）
- 図版33 出土遺物（SK01、SK02、SK06、SK11、SK12、出土銅銭）
- 図版34 出土遺物（SK11、SK12、出土陶器）

## 挿 図 目 次

第1図	鳥取市西北部遺跡分布図	2
第2図	西桂見遺跡周辺遺跡分布図	4
第3図	西桂見遺跡全体図	6
第4図	西桂見遺跡西地区（B・C・D地区）地形実測図	折り込み… 1
第5図	B地区遺構配置図	折り込み… 2

第6図	3号墳、4号墳断面図	11
第7図	3号墳主体部実測図	12
第8図	3号墳主体部遺物出土状態実測図	13
第9図	3号墳主体部出土鉄剣実測図	13
第10図	3号墳出土土器実測図	13
第11図	4号墳主体部実測図	14
第12図	4号墳主体部遺物出土状態実測図	15
第13図	4号墳墳頂土器群土器出土状態実測図	15
第14図	4号墳出土鉄器、石製品実測図	16
第15図	4号墳主体部出土土器実測図	17
第16図	4号墳墳頂土器群出土土器実測図	18
第17図	中世墓S K01実測図	19
第18図	中世墓S K02実測図	19
第19図	中世墓S K04実測図	21
第20図	中世墓S K06実測図	21
第21図	中世墓S K07実測図	21
第22図	B地区出土土師質土器実測図	21
第23図	S K101実測図	22
第24図	S K101出土須恵器実測図	22
第25図	段状遺構実測図	23
第26図	C地区遺構配置図	24
第27図	S K102実測図	26
第28図	S K103実測図	27
第29図	S K104実測図	27
第30図	S K104出土鉄器実測図	27
第31図	S K105実測図	28
第32図	S K106実測図	28
第33図	S K121実測図	29
第34図	S K107実測図	29
第35図	S K108出土鉄器実測図	30
第36図	S K108実測図	30
第37図	S K109実測図	31
第38図	S K110実測図	31

第39図	S K 111実測図	32
第40図	S K 112実測図	32
第41図	S K 113実測図	33
第42図	S K 08実測図	33
第43図	S K 09実測図	34
第44図	S K 09出土土器実測図	34
第45図	S K 10実測図	34
第46図	S K 10出土鉄釘実測図	34
第47図	S K 10出土土器実測図	34
第48図	S K 11実測図	35
第49図	S K 11甕棺出土状態実測図	36
第50図	S K 11出土陶器実測図	37
第51図	S K 12出土五輪塔（火輪）実測図	37
第52図	S K 12実測図	38
第53図	S K 12出土鉄釘実測図	38
第54図	S K 12周溝出土土器実測図	38
第55図	S K 13、14実測図	39
第56図	S K 15実測図	39
第57図	S K 15陶器出土状態実測図	39
第58図	S K 15出土陶器実測図	40
第59図	S K 16実測図	40
第60図	S K 17実測図	41
第61図	S D 02出土土器実測図	41
第62図	S D 02実測図	41
第63図	5号墳調査後墳丘実測図	42
第64図	D地区遺構配置図	折り込み 3
第65図	5号墳墳丘断面図	43
第66図	5号墳第1主体部実測図	44
第67図	5号墳第1主体部土器出土状態実測図	45
第68図	5号墳第1主体部出土土器実測図	45
第69図	5号墳第1主体部出土鉄器実測図	45
第70図	5号墳第2主体部実測図	46
第71図	6号墳調査後墳丘実測図	47

第72図	6号墳墳丘断面図	47
第73図	6号墳主体部実測図	48
第74図	S K 114実測図	49
第75図	S K 115実測図	49
第76図	S K 116実測図	50
第77図	S K 117実測図	50
第78図	S K 118実測図	50
第79図	S K 119実測図	50
第80図	S K 119遺物出土状態実測図	51
第81図	S K 119出土土器実測図	51
第82図	S K 120実測図	52
第83図	S D 03実測図	52
第84図	西桂見遺跡C・D地区土壙墓群配置図	57
第85図	木棺想定図	60
第86図	西桂見遺跡B・C地区中世墓配置図	64

## 表 目 次

表 1	鳥取市桂見地区の古墳一覧表	5
表 2	S K 01出土銅銭一覧表	19
表 3	S K 02出土銅銭一覧表	20
表 4	S K 06出土銅銭一覧表	20
表 5	S K 11出土銅銭一覧表	36
表 6	西桂見遺跡B・C・D地区土壙墓一覧表	58
表 7	西桂見遺跡B・C地区中世墓一覧表	65

## 第Ⅰ章 西桂見遺跡の歴史的環境

鳥取市は、千代川の沖積平野に拓けた面積 239 万 $m^2$ 、人口13万余人を擁する山陰の地方都市である。西桂見遺跡は、この鳥取市の西北部に広がる湖山池の東南岸に張り出した標高40m程の小丘陵上に立地する墳墓遺跡である。

遺跡の所在する鳥取市桂見は、明治10年に倉見、三谷両集落の合併によって桂見村として成立した地区で、現在でも当時の集落名や東西を冠して東桂見、西桂見と呼ばれることが多く、それぞれ独自の空間をもっている。両集落とも丘陵を背に東向きに展開し、冬の北西風を避けるように立地する。この地区は、水田のほか古くから二十世紀梨の栽培が行なわれている。

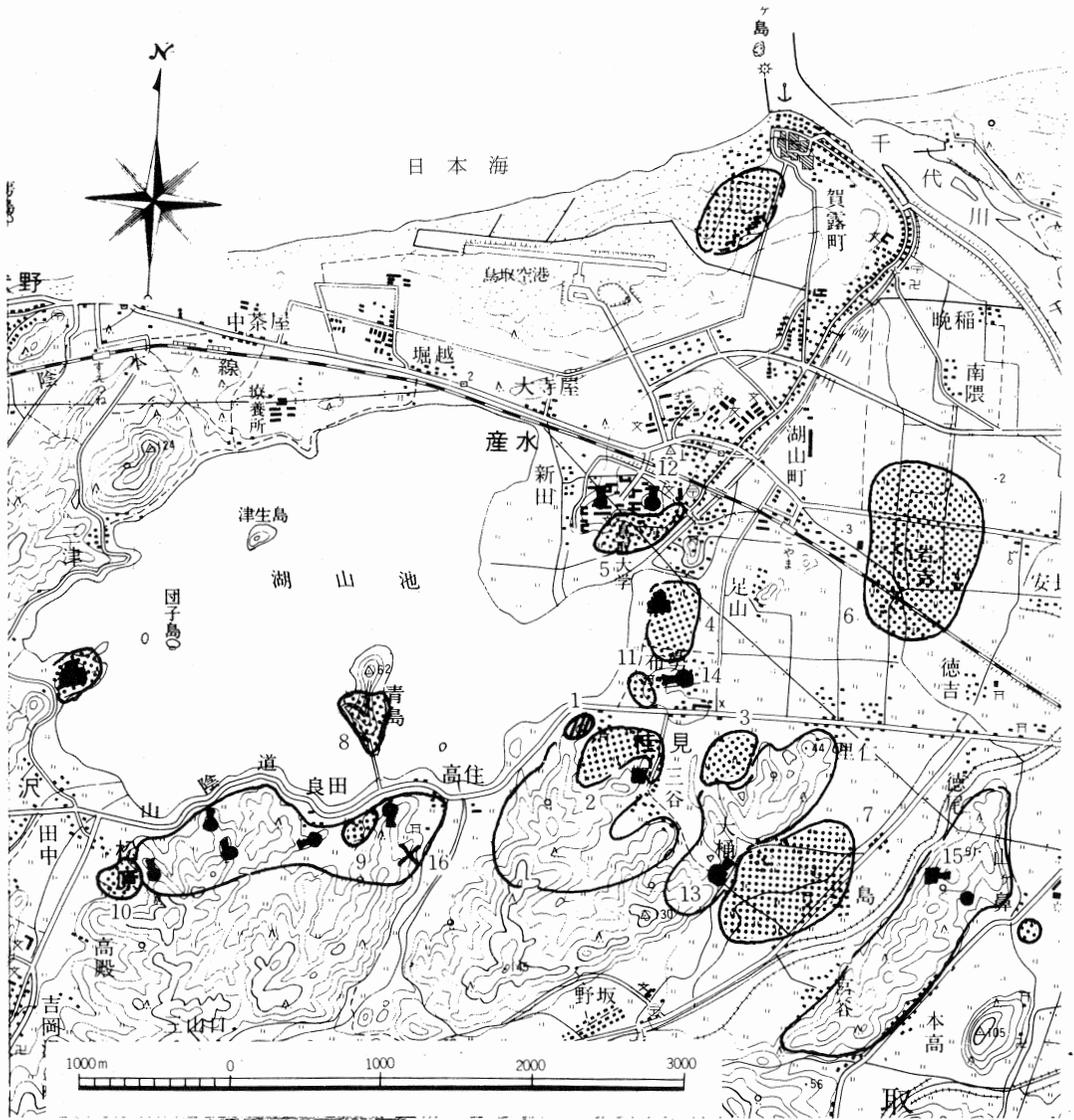
周囲約16Kmの瀉湖である湖山池は、伝説や全国でもめずらしい冬の石がま漁などで知られている。また、湖山池の周辺には原始・古代の遺跡の多いことでも有名である。とりわけ、近年の開発事業などによって全国的にも貴重な遺跡が発見、発掘され鳥取市域でも遺跡の密集度の高い地域となっている。

湖山池周辺の縄文時代の遺跡として、古くから知られている青島遺跡<sup>(1)</sup>の他、桂見遺跡<sup>(2)</sup>、布勢（グラウンド）遺跡<sup>(3)</sup>などの低湿地性遺跡が良く知られている。この他、少量の縄文式土器を出土する遺跡も少なくない<sup>(4)</sup>。桂見、布勢（グラウンド）の両遺跡からは、豊富な木製品や植物遺体が検出され鳥取県の縄文時代研究の画期となった。これらの遺跡の主体をなす時期は、いずれも後期であるがそれぞれ若干の時期差が認められる。桂見遺跡からは、一部前期に遡る土器も出土しており、遺跡の存続期間は比較的長期にわたるものと考えられる。

弥生時代前期の遺跡としては、縄文時代から引き続き営まれた青島遺跡の他、湖山池北岸の湖山第2遺跡<sup>(5)</sup>、東側の千代水平野内の岩吉遺跡<sup>(6)</sup>が知られている。中・後期に入ると遺跡数も増加してくるとともに、規模も大きくなっていくようである。湖山池周辺の集落遺跡として、南西岸の松原谷田遺跡<sup>(7)</sup>、つづらお遺跡<sup>(8)</sup>、南岸の青島遺跡、東岸では布勢（グラウンド）第2遺跡<sup>(20)</sup>、天神山遺跡<sup>(9)</sup>、帆城遺跡<sup>(9)</sup>、そして北岸では湖山第2遺跡、中ノ茶屋遺跡<sup>(10)</sup>が知られており、住居址などの遺構の検出もなされている。

以上の集落遺跡と密接な関係を持つ弥生時代遺跡として、湖山池南東岸の高住銅鐸出土地、塞ノ谷遺跡<sup>(11)</sup>、そして本報告にかかる西桂見遺跡<sup>(12)</sup>があげられる。高住銅鐸は、流水文を持つ偏平鈕式の銅鐸である。塞ノ谷遺跡は、泉を中心に展開された祭祀遺跡と考えられており、古墳時代まで続く。西桂見遺跡の四隅突出型方形墓は、地山の削り出しと盛土によって一辺64m、高さ5mの規模を作り出し、周囲に列石をめぐらし、墳丘に張石をほどこした後期終末の墳墓である。また、後述するとおり墳丘を持たない土壙墓も西桂見遺跡から検出している。

古墳時代に入ると湖山池周辺の丘陵上には大小様々な古墳が造られるようになる。そのうちの多



- |                           |                   |
|---------------------------|-------------------|
| 1 西桂見遺跡                   | 9 塞ノ谷遺跡 (弥生~古墳)   |
| 2 桂見遺跡 (縄文~古墳)            | 10 松原谷田遺跡 (弥生~平安) |
| 3 布勢(グラウンド)第1、第2遺跡(縄文~中世) | 11 帆城遺跡 (縄文~中世)   |
| 4 天神山遺跡 (縄文~中世)           | 12 大熊段1号墳         |
| 5 湖山第2 (三浦団地) 遺跡(弥生~中世)   | 13 桝間1号墳          |
| 6 岩古遺跡 (縄文~中世)            | 14 布勢古墳           |
| 7 大桝遺跡 (弥生~中世)            | 15 古海36号墳         |
| 8 青島遺跡 (縄文~古墳)            | 16 高住銅鐸出土地        |

凡 例

-  古墳密集地
-  集落遺跡、他
-  主要古墳
-  城跡

第1図 鳥取市西北部遺跡分布図

くは、本報告の倉見古墳群に代表されるような小古墳である。前方後円墳として、布勢1号墳<sup>(13)</sup>、大熊段1号墳<sup>(14)</sup>、三浦1号墳<sup>(15)</sup>などが知られるがいずれも全長50～60m前後の中期ないし後期前半に営まれた古墳と考えられている。前期の古墳としてつい最近調査された方形墳で構成する桂見古墳群がある。2号墳の組み合わせ木棺をおさめたと考えられる土壙から舶載の内行花文鏡、斜縁獣帯鏡が出土し注目を集めた。

湖山池周辺に限らず、鳥取平野西部には横穴式石室を持つ後期古墳があまり知られていない。湖山池近辺では、高住12号墳<sup>(16)</sup>、葦岡長者古墳(吉岡1号墳)<sup>(17)</sup>を数えるのみである。この中で南岸の吉岡温泉町に所在する葦岡長者古墳は6世紀後半代の両袖の横穴式石室を持つ古墳として貴重な存在となっている。最近、環境整備に伴う調査が行われて、多くの須恵器類や鉄刀とともに鈎針が出土して注目された。この他少し遠くなるが、古海にはくりぬきの石棺型石室を持つ山ヶ鼻古墳<sup>(18)</sup>がある。

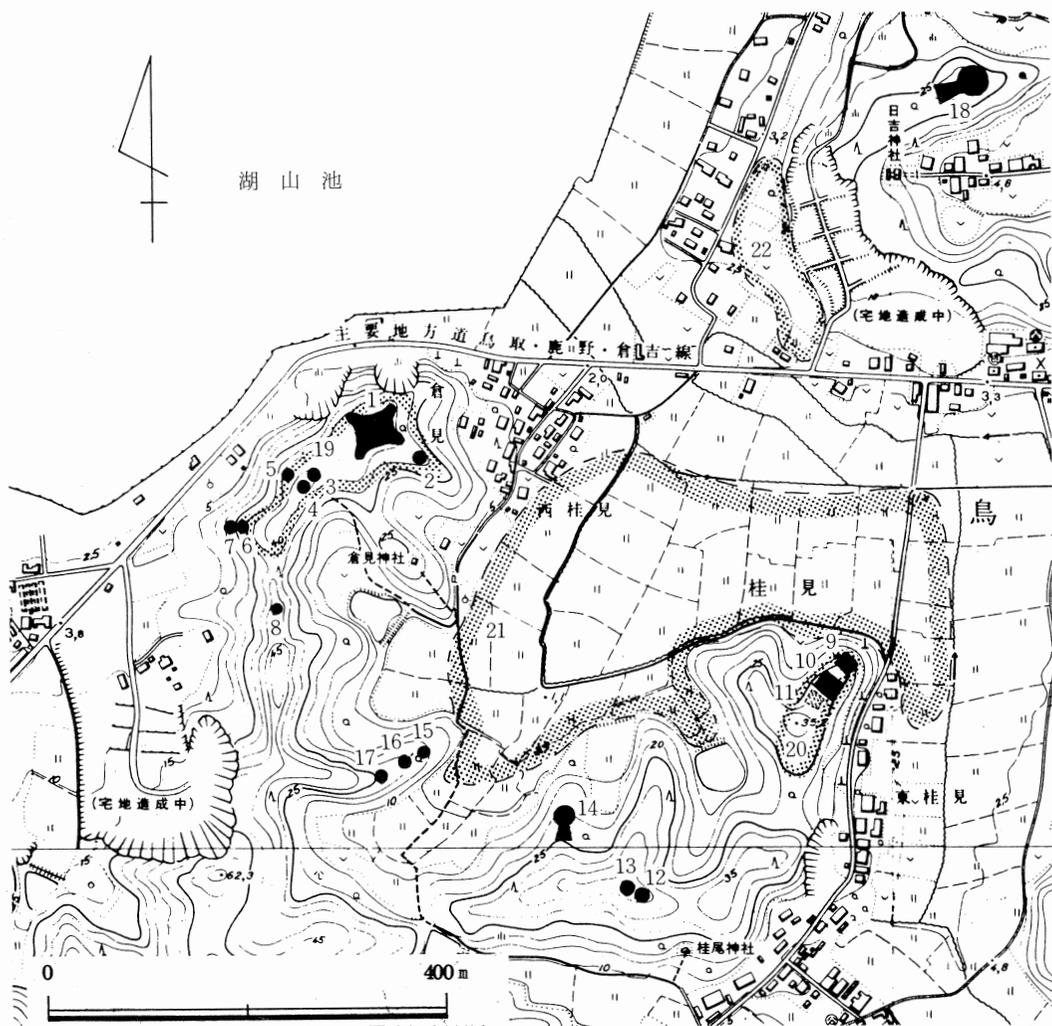
古墳時代の集落址の多くは、弥生時代から引き続き営まれたものと考えられ、前記の湖山第2遺跡、布勢(グラウンド)第2遺跡など多くの遺跡で複合して検出されている。

この地域は、律令体制下には高草郡に組み込まれ、湖山池東南岸の地域は東大寺領高庭荘として開発が進められたことが文献にも見られる。この地域の式内社として南西岸に天日名鳥命神社、天穂日命神社があり、とくに後者は、9世紀には因幡最高位の正三位の神階を与えられており、平安時代の始めにあっても湖山池を中心とした本地域が政治的にも文化的にも優位にたっていたことがわかる。古代因幡氏も高草郡を背景として成長した地方豪族であったと思われ、湖山池との関係も深かったものと考えられる。

15世紀に入り湖山池東岸に布勢天神山城が因幡守護山名氏によって築かれ、因幡支配の拠点となった。この時期の考古学的調査例として天神山城下の他、周辺丘陵上から土壙墓、火葬墓等が古墳などの調査に伴って発見されている。この時期の石造遺物として山王社境内に宝篋印塔<sup>(19)</sup>が残されている。但馬、丹後方面に分布の中心がある特徴のある格狭間を持ったこの宝篋印塔は、南北朝期に比定されている。いずれにせよ、縄文時代以降の歴史の蓄積と湖山池という自然環境のなかで政治、経済、文化そして軍事の要としての布勢天神山城の築城があったものと考えられる。

#### (註)

- (1) とっとり考古談話会 「青島の遺跡第2報」『鳥取郷土文化』1号 1967年 他
- (2) 鳥取市教育委員会 『桂見遺跡発掘調査報告書』 1978年
- (3) 鳥取県教育文化財団 『布勢遺跡発掘調査報告書』 1981年
- (4) 帆城遺跡、天神山遺跡、湖山第2遺跡など。
- (5) 鳥取県教育文化財団 『湖山第2遺跡発掘調査報告書』 1982年
- (6) 岩吉遺跡発掘調査団 『岩吉遺跡』 1976年、鳥取市教育委員会 「岩吉遺跡Ⅱ」『鳥取市文化財報告書13』 1983年
- (7) 鳥取市松原谷田遺跡発掘調査団 『鳥取市松原谷田遺跡発掘調査概報』 1975年、鳥取市教育委員会 「松原谷田遺跡Ⅱ」『鳥取市文化財報告書Ⅲ』 1976年
- (8) 鳥取県教育委員会 『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』 1973年



- |            |                    |
|------------|--------------------|
| 1 四隅突出型方形墓 | 12 桂見4号墳           |
| 2 倉見1号墳    | 13 桂見5号墳           |
| 3 倉見2号墳    | 14 桂見6号墳           |
| 4 倉見3号墳    | 15 桂見7号墳           |
| 5 倉見4号墳    | 16 桂見8号墳           |
| 6 倉見5号墳    | 17 桂見9号墳           |
| 7 倉見6号墳    | 18 布勢1号墳           |
| 8 倉見7号墳    | 19 西桂見遺跡 (弥生~中世墓群) |
| 9 桂見1号墳    | 20 桂見墳墓群 ( " )     |
| 10 桂見2号墳   | 21 桂見遺跡 (縄文~中世集落跡) |
| 11 桂見3号墳   | 22 帆城遺跡 ( " )      |

第2図 西桂見遺跡周辺遺跡分布図

- (9) 鳥取市教育委員会 『帆城・天神山遺跡調査報告』 1982年  
 (10) 梅原末治 『鳥取県史跡勝地調査報告第一冊』 1922年  
 (11) 中野知照氏教示  
 (12) 鳥取市教育委員会 『西桂見遺跡』 1981年  
 (13) 鳥取県教育委員会 『鳥取県文化財調査報告書第11集』 1979年  
 (14) 註(8)に同じ  
 (15) 鳥取県教育文化財団 『三浦遺跡』 1982年  
 (16) 註(8)に同じ  
 (17) 明日の湖南を考える会 『鞆岡長者古墳発掘調査報告書』 1984年  
 (18) 鳥取県教育委員会 『鳥取県装飾古墳分布調査概報』 1981年  
 (19) 小谷仲男 「鳥取市山王社宝篋印塔とそれを載せる絵図について」 『鳥取大学教育学部研究報告』 (人文社会科学) 第30巻第2号 鳥取大学教育学部 1979年  
 (20) 鳥取県教育委員会 『天神山遺跡発掘調査概報』 1973年

表1 鳥取市桂見地区の古墳一覧表

古墳名	墳形	規模(m) 直径(一辺) ×高さ	埋葬施設	出土遺物		備考	『改訂・鳥取県遺跡地図』(第1分冊)による古墳名
				主体部	墳丘		
倉見1号墳	円形	—	—	—	土師器高杯	1981年調査、周溝の一部を検出『西桂見遺跡』1981所載	—
2号墳	円形	10×1	—	—	—	調査時半壊、1980年調査、本報告、消滅	倉見1号墳
3号墳	円形	20×2.5	土壇墓(木棺)	土師器(器台) 鉄器(鉾、刀子)	墳丘上から土師器	墳丘削平、1980年調査、本報告消滅	倉見2号墳
4号墳	円形	12×1	土壇墓(木棺)	土師器(器台)	土師器、砥石	1980年調査、本報告、消滅	—
5号墳	円形	16×2.5	土壇墓(木棺)2	土師器(器台、壺) 鉄器(鉞)	—	1981年調査、本報告、消滅	倉見5号墳
6号墳	円形	10×—	土壇墓(木棺)	—	—	—	—
7号墳	円形	12×1	—	—	—	未調査	倉見6号墳
桂見1号墳	方形	22×2.5	土壇墓(木棺)5	鉄器(剣、鉞、刀子) 玉(ガラス管玉小玉)	土師器	1983年調査、報告書近刊、消滅	桂見1号墳
2号墳	方形	28×4.5	土壇墓(木棺) 配石土壇墓(木棺) 壺棺墓	銅鏡2、鉄器(直刀、刀子、鉞、針、他)	土師器	—	—
3号墳	—	—	土壇墓	—	土師器	1983年調査、調査時すでに削平を受ける。報告書近刊、消滅	—
4号墳	円形	5.6×0.5	—	—	—	未確認	桂見3号墳
5号墳	円形	9.5×1	—	—	—	未確認	桂見2号墳
6号墳	前方後円	全長約25 後円部17×2	—	—	—	未調査、後円頂部に盗掘坑	—
7号墳	—	—	—	—	墳丘から土師器細片	未調査、果樹園にて削平	—
8号墳	—	—	—	—	—	—	—
9号墳	円形	15×1	—	—	—	未調査	—

## 第Ⅱ章 調査の経過

### 第1節 調査の経過

湖山池周辺は、布勢総合運動公園の整備を中核として各交通網の整備が進み、教育施設の移転をはじめとして住宅、工場の進出など各種開発が盛んに行なわれ鳥取市域の中でも変貌の激しい地域となっている。これらの開発の増加にともなって、湖山池東南岸の丘陵部では古くから土砂採取が行なわれており、虫喰い的な景観を呈している。

昭和55年7月、鳥取県土木部河川課からの連絡によって鳥取市桂見地内での民間企業2社による土砂採取計画を知った鳥取市教育委員会では、遺跡地図等で埋蔵文化財の存否を確認するとともに現地踏査を行なった。その結果、本報告にかかる民間企業の計画する区域において、『鳥取県遺跡地図』に倉見古墳群として記載されている古墳5基の存在を確認した。他の民間企業の計画する東半の丘陵上からは、2基の古墳と考えられる高まりを確認したが、この高まりは、後の発掘調査で四隅突出型方形墓の残存部分と判明している。さっそく事業者ならびに関係機関と古墳の保護対策について協議を重ねたが、すでに事業者は、土地買収、ならびに工事機械の発注を行なっており現状での保護・保存が難しいと判断され、事前の発掘調査が避けられないものとなった。しかし、本市教育委員会では当時県道建設に伴う古海遺跡を調査中であり、調査員の確保が難行し、すぐさま発掘調査に入れるような状態ではなかった。そうこうするうち、連絡の手違いから丘陵上に重機が入り、3号墳の墳丘が削平される事態が引き起こされ、一刻の猶予も無い状況となった。このような状況の中で、鳥取市教育委員会では倉見古墳群発掘調査団を組織して調査を実施することとなった。



第3図 西桂見遺跡全体図

調査担当者には、当時市の文化財審議会委員をお願いしていた鳥取大学助教授（現富山大学教授）小谷仲男先生に無理をお願いして引き受けていただいた。また、河根裕二氏（現気高町教育委員会）にも調査員として参加していただいた。

このような状況の中で始まった調査であったが、当初5基の古墳の発掘調査と考えていた遺跡は予想より広範にわたり、あまつさえ弥生時代、中世と重複する多数の墓壙を検出することとなり、かなり長期の調査となってしまった。

むろんこれだけの理由ではなく、調査員の交替や緊急を要する調査が飛び入りで入ってきたことも調査の長期化の一因となっていることも否めない。

第1次の調査は、昭和55年10月7日より作業を開始し、12月22日まで現地調査を実施した。この第1次調査中の11月25日に4号墳頂に亀裂が入り土砂崩れを引き起こしかねない状況となった。これは、丘陵の土質と、土砂採取の法面が急すぎたためであるが、直下に民家もあり危険なため、関係機関に指導を受けるとともに、事業者との協議を行なった。その結果、今すぐに崩れるとは考えられないが、雨水等の浸透によって落下することが十分に考えられるということで安全な法面が必要であると判断された。そのため、4号墳は、簡単な略測と写真による調査で放棄することとなった。

第2次調査は、河根調査員が転出したため、鳥取市教委職員と鳥取大学歴史学研究会有志によって、まだ雪の残る昭和56年3月4日から始められた。この第2次調査では、5、6号墳の調査とC地区、D地区の一部の試掘調査をあわせて行ない4月11日に終了した。トレンチによる試掘調査によって、C、D地区の尾根上に、土壙墓、中世墓が存在していることが判明した。この後事業者との協議が行なわれ、試掘調査によって確認された遺跡の調査を引き続き実施することで合意した。

第3次調査は、事業者との合意に基づき前田均を調査員として昭和56年9月28日から12月11日まで発掘調査を行なった。

調査関係者は以下のとおりである。

#### 鳥取市教育委員会・倉見古墳群発掘調査団

田村一三（教育長・団長） 安治重美（次長、前任） 横尾倫夫（次長、後任） 田村章三（社会教育課長・事務局長） 谷本勝実（社会教育課長補佐） 大石清人（文化係長） 井上清司、楮原伸一、倉益紀子、片岡由美子、今田裕嗣（社会教育課） **調査員** 小谷仲男（鳥取大学助教授、現富山大学教授） 小杉宗雄、平川誠（社会教育課） 河根裕二、前田均、中野知照 **調査補助員** 杉谷美恵子、西浦日出夫、渡辺朱美、山脇義宣、牧野泰浩、田中一幸、熊埜御堂晋、坪倉顕示、山本修一

**作業協力** 福田秋子、福田宗子、川崎きみ子、北脇英子、北山智恵、他

**調査協力・指導助言** (株)宝和産業、鳥取県土木部、鳥取県教育委員会、鳥取市建設部土木課、北脇長弘、岡田照明、亀井照人、久保稷二郎、小原貴樹、清水真一、杉谷愛象、田中弘道、中野知行、野田久男、平勢隆郎、三谷巍、若林久雄、船井武彦

## 第2節 発掘調査日誌（抄）

昭和55年10月7日 本日より作業開始。雑木の刈り払い及び攪乱された土砂の整理。

14日 調査団会議開催。

- 昭和55年10月15日 調査用基準杭の設定とレベル移動。
- 17日 地形測量開始。
  - 21日 地形測量続行、攪乱された3号墳の精査。
  - 24日 地形測量終了。2、3号墳の表土除去作業。
  - 27日 2号西側、4号南側に周溝を確認。2号西裾部で中世遺構検出。
- 11月3日 3号西斜面で須恵器杯を持つ小型の木棺墓検出。
- 10日 3号墳中心主体部検出。
  - 17日 3号墳中心主体に中世墓が切り合うことを確認。
  - 18日 4号墳頂から供献の土器群を検出。
  - 25日 3号墳主体部より土師器鼓形器台を検出、土器枕のようである。4号墳土器群取りあげ。4号墳頂に亀裂が生じていることを確認、市教委、市土木課、事業者の三者で安全対策を協議。
  - 26日 崩壊寸前の4号墳について、早朝より緊急に略測、写真撮影を行ないながら主体部の検出作業を行なう。主体部より土師器々台、鉄銚などの鉄製品が出土。
  - 28日 3号墳主体部等写真撮影。本日にて2、3、4号墳の調査を終了。
  - 29日 西側の尾根上の調査を続行。
- 12月6日 北に向いてカット面を検出するとともに、2基の中世墓を確認。
- 17日 中世墓が2基増えて4基となる。
  - 18日 調査後の地形測量を開始。
  - 22日 第1次調査終了、3基の古墳と7基の中世墓を調査した。
- 昭和56年3月4日 本日より発掘調査を開始。今次の調査の対象は、5号墳、6号墳の2基とC地区の試掘調査である。
- 7日 地形測量を完了。
  - 9日 表土除去を開始する。
  - 12日 5号墳の周溝を検出し、掘り下げを始める。
  - 13日 C、D地区のトレンチによる試掘を始める。
  - 18日 5号墳主体部の検出（第1主体）。6号墳表土除去作業開始。
  - 24日 6号墳主体部の検出。
  - 26日 5号墳主体部から器台枕検出。
- 4月3日 C地区のトレンチ調査はほぼ終了。ほぼ全面に遺構が存在するようである。5号墳、6号墳の調査も大詰めを迎え、主体部の写真撮影を実施。

- 昭和56年4月4日 C、D地区のトレンチの埋め戻し。
- 9日 5、6号墳とも実測作業。5号墳は、墳丘のたち割りを始める。6号墳は、本日で調査終了。
- 10日 5号墳から第2主体部を検出。
- 11日 5号墳第2主体部の実測と写真撮影。終了後全景写真撮影を行ない、予定したすべての作業を終了。
- 9月28日 C、D地区の調査を本日より開始する。終日夏の間延びた草を刈る。
- 29日 地形測量は前回の調査時に済んでいるため、本日より表土除去を行なう。主稜上を2分し、東側をI区、西側をII区とし、北に延びる尾根上半をIII区（D地区）と仮称して調査を進める。
- 10月6日 I区より土壙墓検出。以後31日までI区の調査を続け、8基の土壙墓を検出する。
- 14日 I区西端で稜線に直交する溝状遺構を検出。埋土から弥生後期後半の土器が出土。
- 19日 工事の手順からIII区の調査を本日より開始。11月21日まで調査を行ない7基の土壙墓を検出する。
- 11月18日 II区の遺構検出作業を開始。
- 24日 方形の周溝を持つ中世墓検出。
- 12月11日 II区の調査を終了。



調 査 風 景

## 第三章 調査の概要

西桂見遺跡の立地する丘陵上には、1973年発行の『改訂鳥取県遺跡地図第1分冊』によると6基の古墳が倉見古墳群として掲載されている。一方、この丘陵は、1967～8年頃から真砂土の採取が行なわれており、この土砂採取場の崩壊土砂中から市内在住の研究者若林久雄氏によって大型の特殊壺形土器などが採集されて、本丘陵の特殊性は一部の研究者には知られていた。1980年以降の経緯については、先に刊行した『西桂見遺跡』と本書で述べるとおりである。ともあれ、4次にわたる発掘調査によって一辺約64mの四隅突出型方形墓が確認されるとともに、古墳、弥生時代～古墳時代の土壙墓、中世墓が検出され、これら墳墓によって構成される複合遺跡であることが明らかにされた。

西桂見遺跡周辺の遺跡分布は、第2図のとおりである。今回の調査や周辺部の踏査によって確認された古墳の規模や数量、位置がこれまで県遺跡地図によって知られていたものと若干相違することから、本書では古墳番号の整理を行なった。県遺跡地図による呼称は表1を参照していただきたい。しかし、この整理も現在の段階での便宜的なものでしかなく、今後より詳細な分布調査と古墳の考古学的な検討のなかで、群構成の把握がなされるべきであろう。

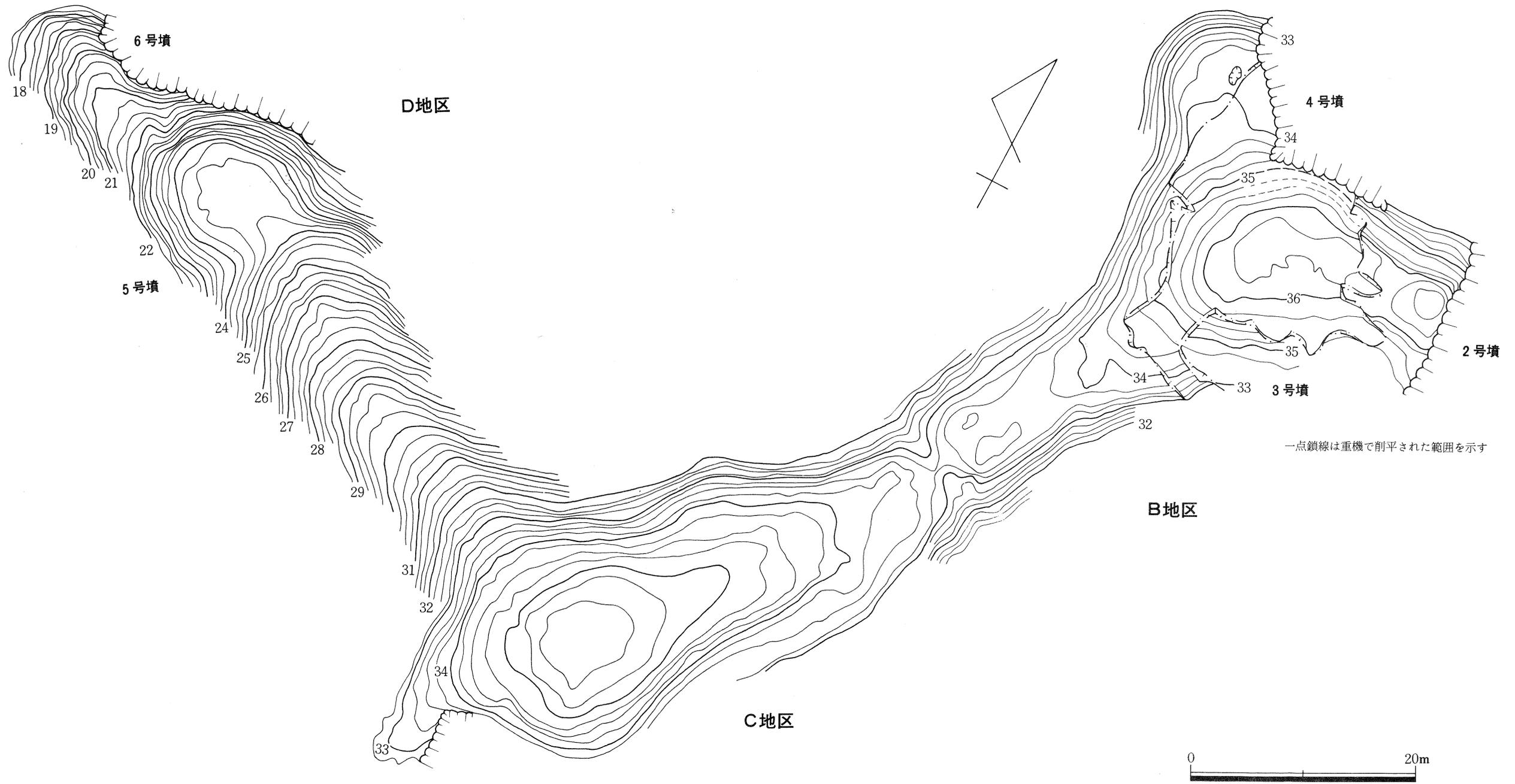
さて、本報告で述べる西桂見遺跡の西地区の調査では、5基の古墳と、21基の土壙墓、17基の中世墓が検出された。この地区の調査は、調査の経過の項で述べたとおり3次にわたった調査を実施している。ここでは、主稜線を東西両地区に分け、それぞれB、C地区とし、C地区から北西に延びる支稜線をD地区とし、順次遺構、遺物の概略について記していきたい。

なお、A地区は、1981年4月15日から7月4日まで調査を実施した四隅突出型方形墓を含む西桂見遺跡東半部をあてている。

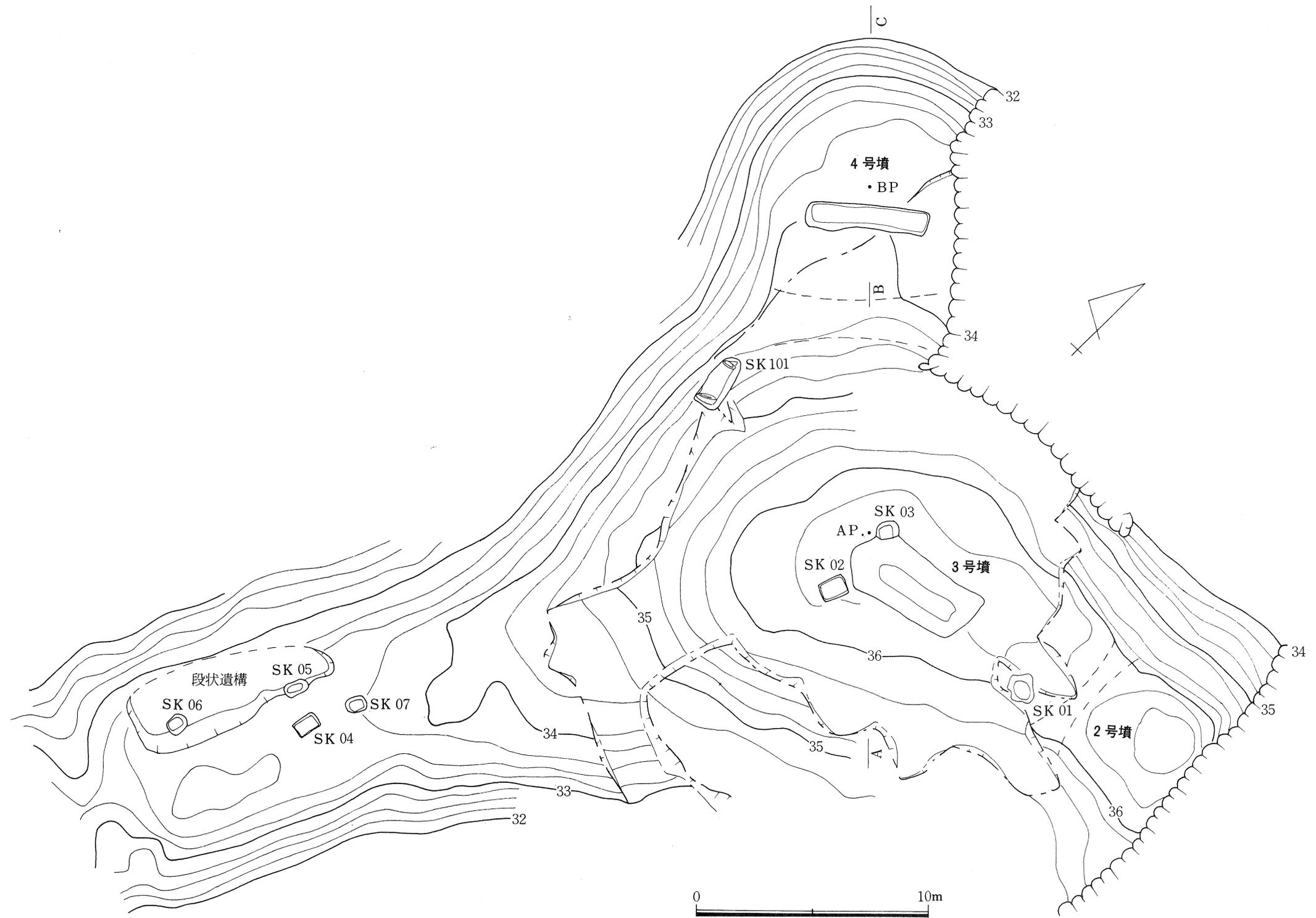
### 第1節 B地区の調査

B地区は、西桂見遺跡のほぼ中央部に位置する。北側及び東側を土砂採取によって削り取られているが、3号墳の立地する主稜上は比較的広がっている。北西向きには、わずかな膨らみをもって支稜が形成されており、この上部に4号墳が築造されている。西南の主稜は、馬ノ背上に狭くなりC地区へと続く。このB地区からは、古墳3基、古墳時代の木棺墓1基、中世墓7基、段状遺構1基を検出している。

なお、B地区は、調査前の重機による削平、調査地崩落の危険等によって十分な調査を実施することができなかった。とりわけ、古墳の墳丘調査は、発掘前の地形測量だけで終わってしまっていることを最初に記しておきたい。



第4図 西柱見遺跡西地区（B、C、D地区）地形実測図



第5图 B地区遺構配置图

## 1. 倉見 2 号墳

### 位置と墳丘（第5図）

調査地の東端に位置する円形墳である。墳丘の東半分を過去の土砂採取によって失なう。復元径は約10mを測り、高さは1mである。墳丘の築成は、盛土をほとんどたないことから地山の削り出しによるものと考えられる。3号墳との間に溝が検出されているが、周回するようなものではなく、直線的である。

### 埋葬施設

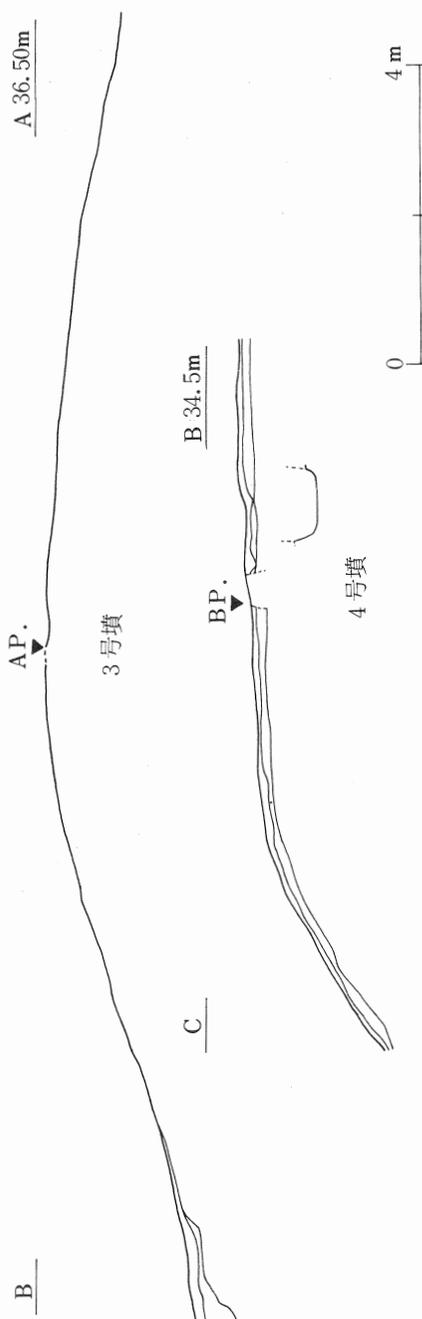
この古墳からは埋葬主体を検出することができなかった。また、この古墳に伴うと考えられる遺物の出土もなかった。

## 2. 倉見 3 号墳

### 位置と墳丘（第5、6図）

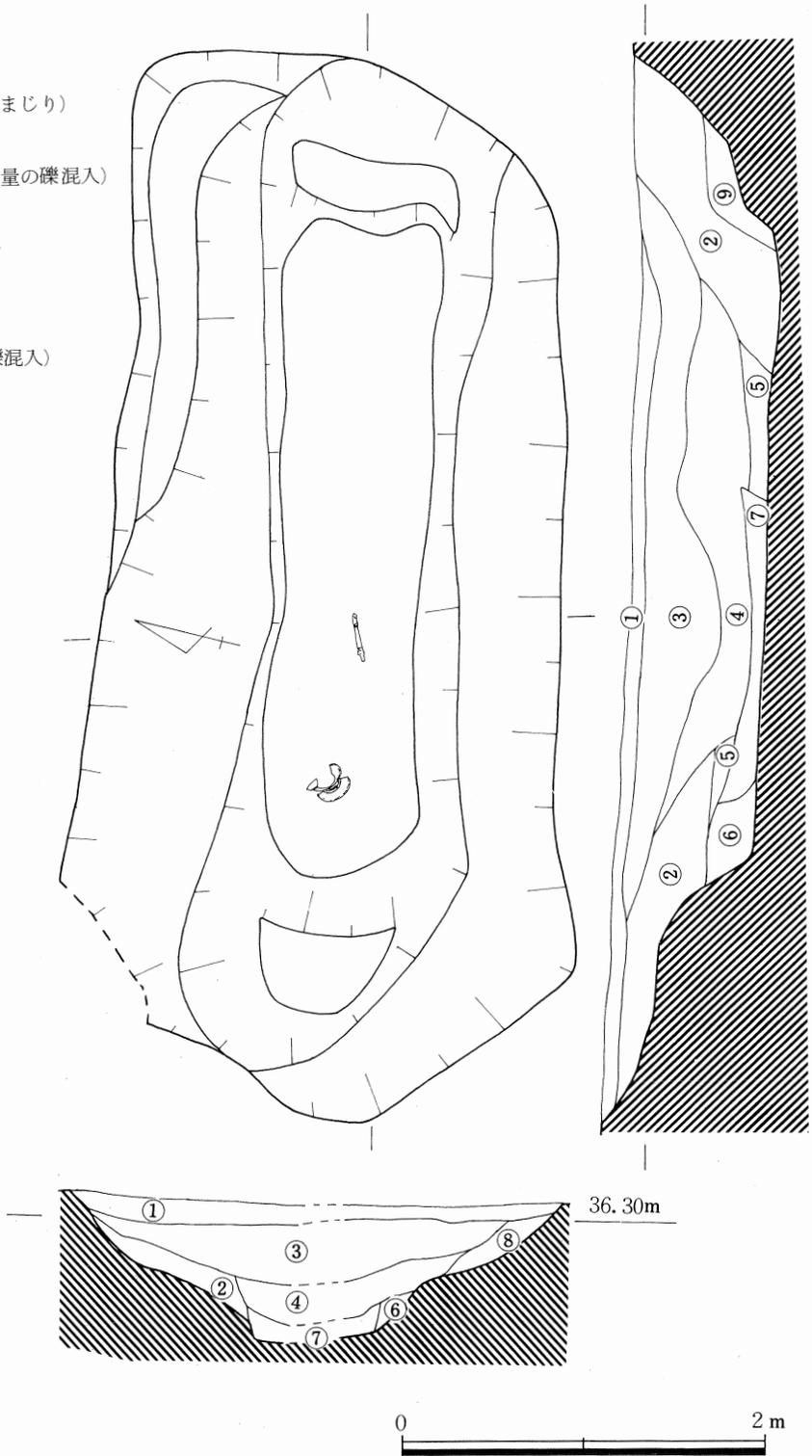
3号墳は、B地区の最高所に営まれた円形墳である。調査前に重機によって墳丘のほぼ全面を0.3～1mの厚さで削平されていたため正確な墳丘規模は不明である。墳丘の築成状況についても同様であるが、重機の削平した土量や土質、削平後の墳丘観察から、ほとんど盛土を使わず、丘陵頂部という自然地形を最大限利用した地山の削り出し整形によって築造されたものと考えられる。区画溝などから、およそ径20m、高さ2.5m程度の墳丘規模が想定される。

3号墳には2号墳と4号墳に接する部分に、両端が八の字形に開く直線的な溝を持つ。南西の主稜線側には、この溝は認められず、周溝というよりはむしろそれぞれの古墳との区画の溝としての性格が強いものと思われる。墳裾を画すようなテラス等の地山の加工も認められないため、この溝

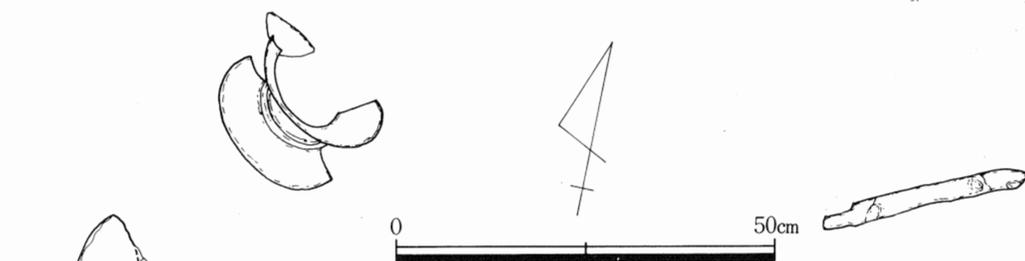


第6図 3号墳、4号墳断面図

- ① 暗茶褐色砂
- ② 黄褐色砂 (礫まじり)
- ③ 暗褐色砂
- ④ 茶褐色砂 (少量の礫混入)
- ⑤ 茶褐色砂
- ⑥ 淡黄褐色細砂
- ⑦ 黄褐色細砂
- ⑧ 淡茶褐色砂
- ⑨ 茶褐色砂 (礫混入)



第7図 3号墳主体部実測図



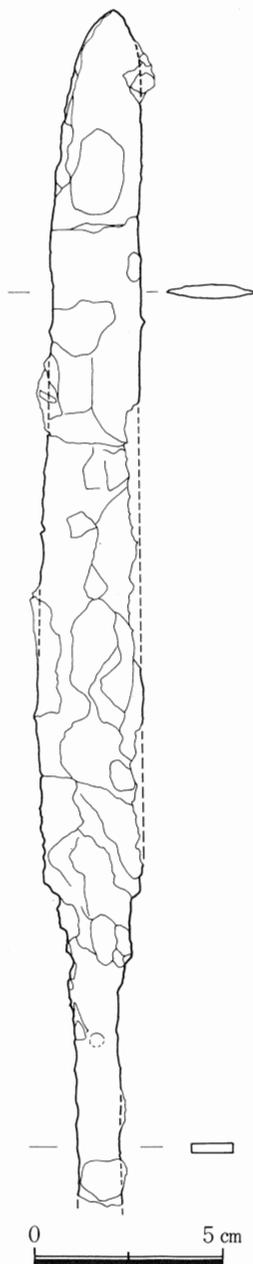
第8図 3号墳主体部遺物出土状態

を墳丘の基底部と考えたい。なお、葺石、張石などの外部施設は検出されなかった。

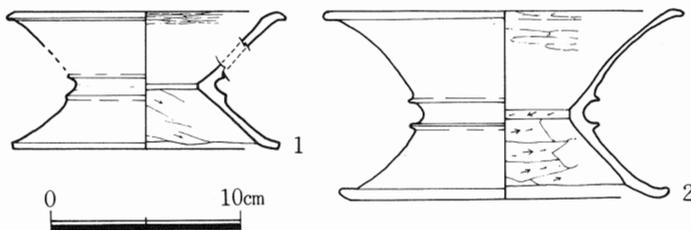
埋葬施設（第7、8図）

墳丘の中央部から木棺を納めたと考えられる主体部が1基検出された。重機の削平によって露出していた地山層を精査したところ、長楕円形を呈する墓壙掘り方を検出することができた。土壙は、ゆるやかに傾斜をもって掘り込まれ、中位で段を造り出し、更に木棺を納めたと考えられる墓壙が掘り込まれる。小口側の段ははっきりした平坦面を持つ。上面での規模は、最大長590cm、最大幅280cm、壙底までの深さ74cmを測る。底面はほぼ平坦で西から東に向かってわずかに傾斜し長さ360cm、幅80cmを測る。この底面に直接木棺がすえられたものと考えられるが、土層の観察から長さ200cm強、幅65cm前後の箱形の木棺であった可能性が高い。木棺埋納に際しての礫や砂の敷設、あるいは粘土での被覆といった痕跡は検出されていない。

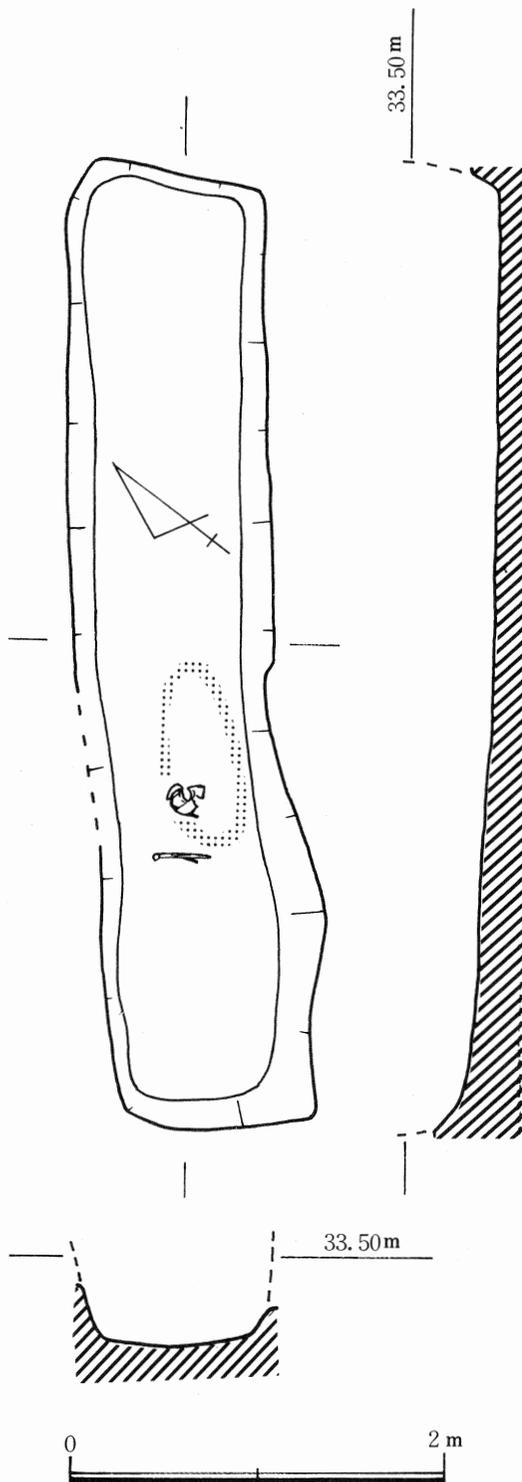
墓壙内の床面からは、土師器の器台1と鉄剣1が出土した。器台は西端に近い位置から受部を上にして検出しているが、いわゆる土師器転用枕と考えられる。鉄剣は、切っ先を東側すなわち足元に向けて出土している。



第9図 3号墳主体部出土鉄剣実測図



第10図 3号墳出土土器実測図（1. 墳丘、2. 主体部）



第11図 4号墳主体部実測図

### 出土遺物（第9、10図）

3号墳からの出土遺物には、主体部からの器台と鉄剣、墳丘からの器台がある。主体部から出土した鼓形器台（第10図2）は、薄手の受部が大きく外反して開き、くびれ部の稜は突出する。台脚部も外反して開き、端部で更に外反して丸くおさまる。台脚部内面をヘラ削り、受部内面を横ヘラ磨きする他は全体を横ナデで調整する。胎土は砂粒を含み、全体的に橙色を呈する。受部、台脚部とも一部欠損しており、打ち欠いたのち枕として使用されたものと考えられる。

鉄剣（第9図）は、全体に錆がひどく、保存状態は良くない。現存長31.9cm、刃部の長さ23.5cmを測る。刃部に欠損が見られ、はっきりしないが、関から切っ先に向けて徐々に狭くなるようである。関で2.7cmを測る。鑄は確認できず、断面はレンズ状を呈する。茎部は、先端を一部欠くが、長さ7.9cmを測り、断面は長方形を呈する。目釘穴を1個確認することができる。

器台（第10図1）は、主体部検出時に上面から出土したものである。重機によって押しつぶされて細片となっている。墓上での祭祀に使用された土器と考えられる。受部と台脚部が大きく外反するいわゆる鼓形器台である。淡橙色を呈し焼成は良好である。調整は、主体部出土器台と同様であるが、全体に小ぶりで、くびれ部の稜は突出しない。

### 3. 倉見4号墳

#### 位置と墳丘（第6図）

3号墳の北西に位置し、主稜線から延びる支稜の肩部に立地する。調査前は、舌状の平坦部が段状に認められただけであった。墳丘の東側は、土

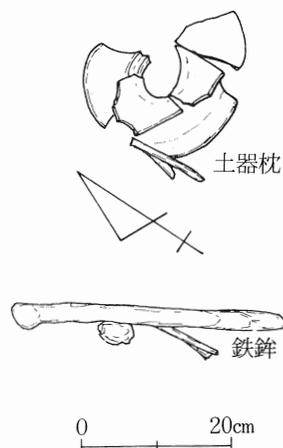
砂採取のため3分の1ほど失ない、墳頂部も東南部を重機によって削平され、遺存状態は良いとはいえない。

4号墳は、表土を剥いで墳丘上面の遺物を調査している時に墳丘中央部にクラックが発生し、崩落のおそれが出てきたため以後の調査を放棄し、緊急に主体部の検出のみ実施した。このことによって墳丘の詳細な調査を行なうことができなかったが、主体部調査時に、50cm程度の盛土を墳丘の北西側で確認している。

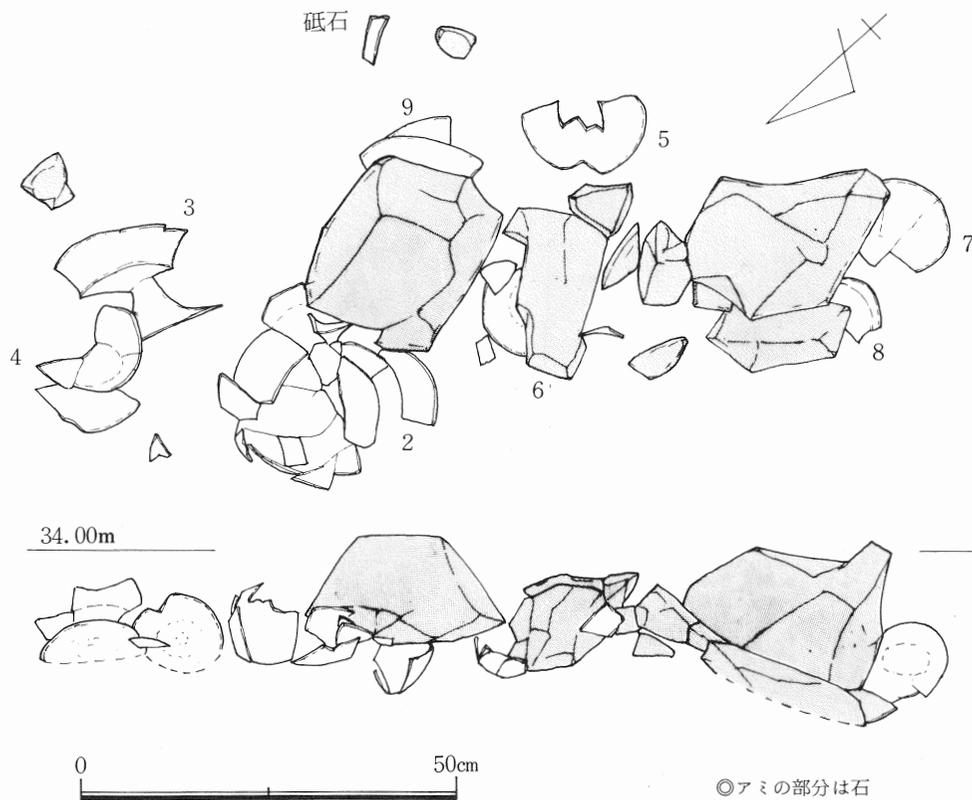
墳丘の区画は、3号墳側に共有する直線的な溝をもって行なうが、他の斜面は急傾斜をなし、墳裾を画するような施設は認められない。以上のことから4号墳の墳丘は、3号墳側を削平し、湖山池側に盛土を行なって平坦部を造り出した円形墳と考えられる。墳丘の規模は、径12m前後、高さ1m前後の数値が想定される。

#### 埋葬施設（第11、12図）

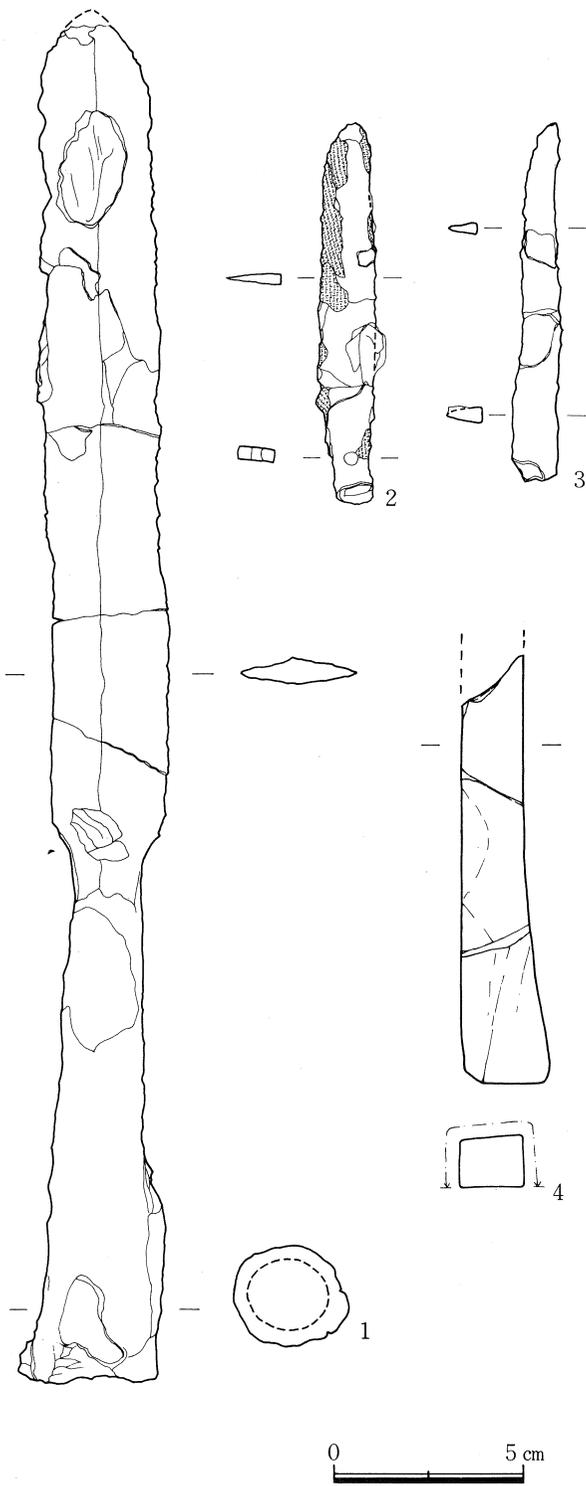
緊急の調査で墳頂部の中央から尾根に直交する主体部を検出した。主軸をN52°Eにとり、長さ520cm、幅110cm、検出面からの深さ30cmを測る墓墳である。この墓墳内からは、枕として利用され



第12図 4号墳主体部  
遺物出土状態



第13図 4号墳墳頂土器群土器出土状態（数字は第16図土器番号に対応）



第14図 4号墳出土鉄器、石製品実測図  
(1~3主体部、4墳丘)

たとえられる鼓形器台1、鉄鉾1、刀子2が出土した。器台は、西側3分の1程の床面から受部を上にして出土している。副葬品の鉾は、器台から20cmほど離れて墓壇の長軸に直交し、切っ先を南東に向けて出土した。セクション等に木棺の痕跡は認められなかったが、墳底が平坦なこと、規模などからして長さ200cm前後の箱形の木棺が直葬されていたものと考えられる。なお、鉄鉾は、位置からして棺外の遺物と思われる。また、出土状態からして長い柄は装着していなかったものと考えられ、石突も出土していない。

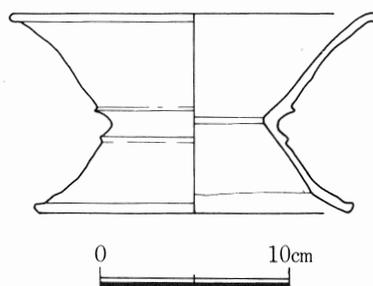
#### 墳頂土器群 (第13図)

墳丘中央の表土直下から角礫とともに列状の土師器群を検出した。土師器群は人頭大の角礫によって破砕されたともとれる状態を示しており、埋葬後の葬送儀礼に伴うものと考えられる。この土師器群は、第11図のアミで示したとおり主体部の直上の位置に長さ1.2m、幅0.6mの範囲にほぼ同じレベルで検出されている。北から高杯2、直口壺、器台、高杯2、器台、低脚杯と並び、人頭大の角礫4個をその上に置く。なお、長頸壺が出土しているが、どの部位から出土しているかは不明である。これらの土器や礫とともに割れた砥石が1個体出土していることも注意される。

#### 出土遺物 (第14~16図)

4号墳からの出土遺物は、主体部からの土器、鉄器と墳丘上面からの土器、石

製品がある。主体部から出土した鼓形器台（第15図）は、枕として転用されたものである。受部、脚台部とも大きく外反して開き、くびれ部の稜は突出する。全体に剥落部分が多く、細い調整は不明であるが、脚台部内面を横ヘラ削りするほか、おおむね横ナデによって仕上げているようである。3～4mmの砂粒を含む荒い胎土を使用し、淡橙色を呈する。枕として転用するにあたっての打ち欠き痕は器受部に見られる。



第15図 4号墳主体部出土土器実測図

鉄鉾（第14図1）は、先端部をわずかに欠くが、全長36.3cm、刃部長21.3cm、身幅3cm、厚さ0.7cmを測る。身の中央部に鑄を持ち断面は菱形を呈する。身の基部は袋状となり、最大径3.2cm、厚さ0.3cm前後を測る。

刀子は2点、それぞれ器台と鉾ともなって出土している。第14図2の刀子は、全長10.1cmを測り、ほぼ完存する。棟は平たく厚さ0.3cmを測り断面は楔形を呈する。茎には目釘穴が1個観察できる。3は、残存長9.5cmで茎を失っている。先端に向って身の幅を減じ、切っ先近くでやや外反する。断面は楔形を呈する。

墳丘上の土器群からは、第16図のとおり壺2、高杯4、器台2、低脚杯1が検出されている。他に若干高杯類の小片があり、本来はもう少し個体数が増えるものと思われる。

1は長頸壺で球形の胴部に直立ぎみの口縁部がつく。口縁は中位でやや外反し端部は丸くおさまる。調整は、胴部内面をヘラ削りののちナデ調整するなど全体的にいいである。口頸部内外面は横ナデ、体部外面には細かいハケ目が残る。頸部内面は横ヘラ削りするほか底部には指頭の圧痕を観察することができる。

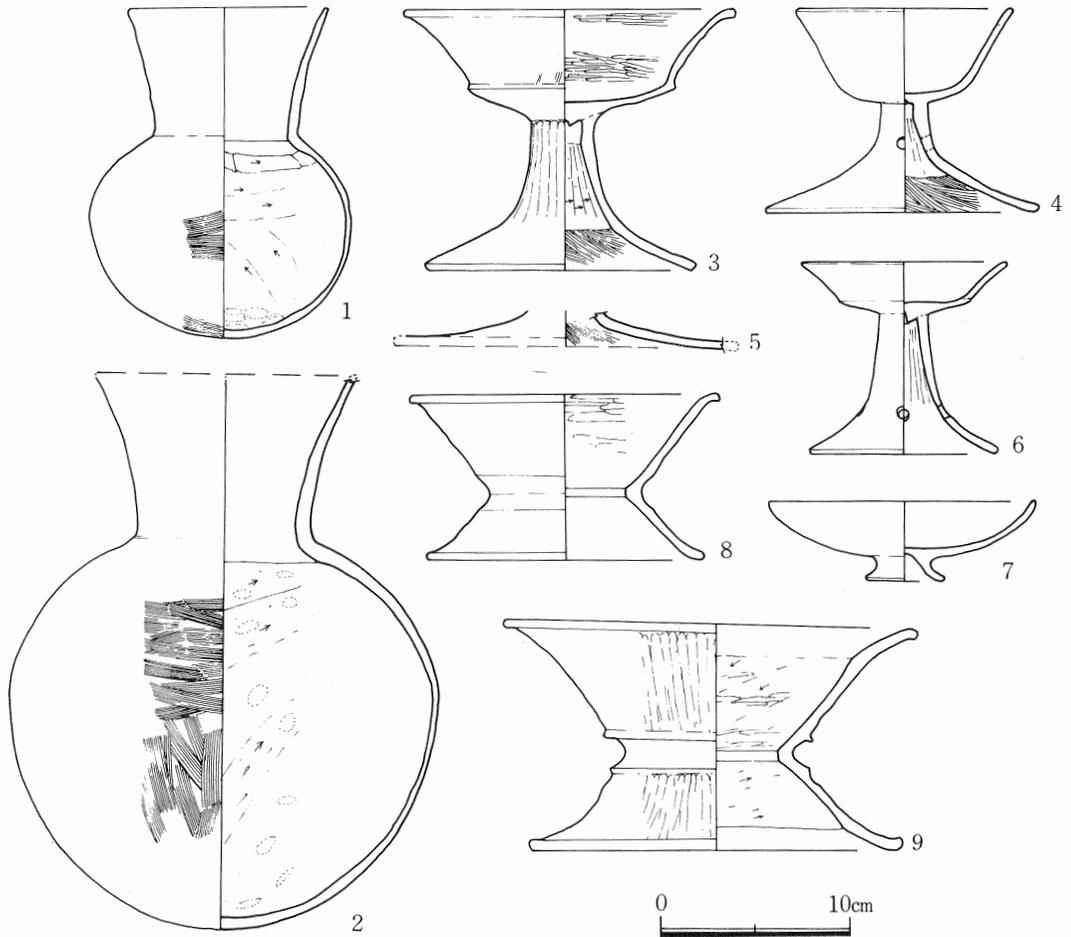
2は、比較的口縁部の長い直口壺である。体部は球形で外反ぎみの口縁部は中位でさらに外反する。1と同様にいい作りで、口縁部から肩部にかけて横ナデ、口縁の外面には一部タテヘラ磨きを施す。胴上部外面は横ハケ、下部はタテハケで調整する。内面は、ヘラ削りの後上半をナデ調整する。また内面には指頭の圧痕が多く残る。淡橙色を呈し焼成良好。

3は杯部に稜を持つ有段の高杯である。内面は横ヘラ磨きを施す。脚部は外面をタテヘラ磨きし、内面は、脚柱部を横ヘラ削り、裾部をハケ目で調整する。色調は杯部が橙色、脚部が淡橙色と異なるが焼成は良好で保存状態も良い。4は、やや深い杯部と大きく開く脚部を持つ高杯である。全体に剥落が激しく調整は脚内面しか観察できない。脚柱部にはしぼり目が残る。裾部はハケ目調整。5は、脚の裾部しか実測できなかった。非常に脆い。裾部が大きく広がる高杯で椀状の杯部が付くものと考えられる。ここでは6も高杯の範疇に含めて説明したい。杯部は浅く平坦な底部から外反する口縁が延びる。杯部に比べて長い脚部には4つの穿孔が見られる。外面の剥落が激しい。胎土は緻密で橙色を呈する。

土器群の南端から出土した低脚杯7も全体に剥落が激しく調整は不明である。浅い椀状の杯部にハの字形に開く小さな脚を付ける。

8、9はともに受部、脚台部が大きく外反する鼓形の器台である。8は、くびれ部に稜を持たない。受部内面に横ヘラ磨きを観察できるほか、剥落のため調整は不明である。9の器台は、保存状態が良い。受部内面はヘラ削りの後、ナデと横ヘラ磨きによって調整する。脚台部内面は、ヘラ削りののちナデ。外面は、横ナデののち受部、脚台部ともタテヘラ磨きを施す。胎土は、砂粒を多く含み、橙色を呈する。

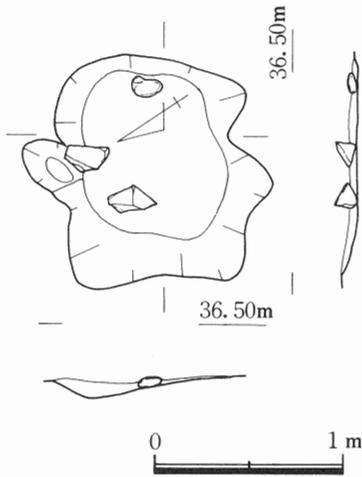
この遺構からは、他に砥石（第14図4）が1点出土している。3面使用されており、特に1面は湾曲する。断面は長辺2.4cm、短辺1.5cmを測り、ほぼ長方形である。石材は硅板石と思われる。



第16図 4号墳墳頂土器群出土土器実測図

#### 4. 中世墓 (第5図)

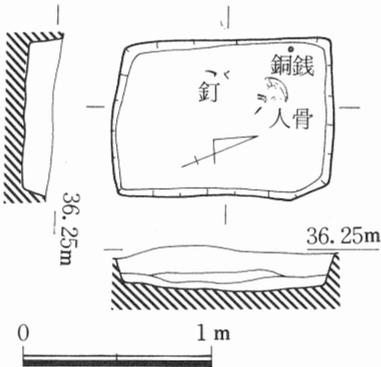
B地区からは7基の中世墓を検出している。いずれも主稜線上に位置し、2号墳の墳頂部周辺に3基、西側の段状遺構周辺に4基とそれぞれ小群を形成している。このうち遺物を出土している中世墓はSK01、02、06の3基ある。これらに共通する遺物は、中国の渡来銭であるが、SK02からは人骨とともに鉄釘も出土しており木棺の存在を想定することができる。これらの土壙墓は、出土遺物や、墓壙の構造から15～16世紀頃のものと思われる。



第17図 中世墓SK01実測図

##### SK01 (第17図、表2)

2号墳の東側墳裾から検出された不整形を呈する浅い土壙である。土壙内には、人頭大の角礫が3個置かれている。出土遺物には銅銭があり、「聖宋元宝」「至和元宝」「咸平元宝」「元祐通宝」「熙寧元宝」「開元通宝」各1枚ずつ合計6枚である。



第18図 中世墓SK02実測図

##### SK02 (第18図、表3)

2号墳主体部の南西部に近接して検出された長さ116cm、短辺82cm、深さ25cmを測る平面長方形の土壙である。四辺の壁は急角度で掘り込まれており、底面は平坦である。土壙の埋土は、上層から黒灰褐色土、黄褐色砂質土(地山ブロック混り)、黄褐色砂質土である。土壙内からは、北西隅に集中して人骨(頭蓋骨、歯)、銅銭12枚、

表2 SK01 出土銅銭一覧表

No.	銅銭名	法量 (cm)			書体	初铸年(西暦)	備考
		直径	厚さ	重量(g)			
1	聖宋元寶	2.38	0.1	2.75	篆書	北宋 1101	
2	至和元寶	2.4	0.1	2.40	真書	北宋 1054	
3	咸平元寶	2.45	0.1	3.10	真書	北宋 998	
4	元祐通寶	2.4	0.11	3.85	行書	北宋 1086	
5	熙寧元寶	2.45	0.1	2.95	真書	北宋 1068	
6	開元通寶	2.4	0.12	3.0	真書	南唐 937	

鉄釘6本が出土した。銅銭の内訳は表3のとおりであるが、9枚と3枚に分かれ、それぞれ重りあって出土している。鉄釘は、断面が正方形に近い角釘で全長4cm前後のものと思われるが、細片となっている。

### SK03

2号墳主体部と切り合って検出された。2号墳主体部の調査中に発見されたため、南東部の形状は残念ながら不明である。残存部の幅95cm、深さ13cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。この土壙からは遺物の出土がみられなかった。

### SK04 (第19図)

B地区の西側主稜線上から検出された平面長方形を呈する土壙墓である。四辺の壁は、ほぼ垂直

表3 SK02 出土銅銭一覧表

No.	銅銭名	法 量 (cm)			書 体	初鑄年(西暦)	備 考
		直 径	厚 さ	重 量(g)			
1	開元通寶	2.4	0.11	2.5	真 書	南唐 937	
2	景德元寶	2.4	0.13	3.1	真 書	北宋 1004	
3	天聖元寶	2.45	0.13	2.75	真 書	北宋 1023	
4	皇宋通寶	2.4	0.1	2.9	篆 書	北宋 1039	
5	皇宋通寶	2.45	0.14	3.0	篆 書	北宋 1039	
6	嘉祐通寶	2.4	0.12	3.3	真 書	北宋 1056	
7	熙寧元寶	2.41	0.12	3.5	真 書	北宋 1068	
8	熙寧元寶	2.35	0.1	2.55	篆 書	北宋 1068	
9	元豊通寶	2.4	0.13	3.3	行 書	北宋 1078	
10	熙寧元寶	2.4	0.16	3.6	真 書	北宋 1068	
11	皇宋通寶	2.5	0.12	2.9	行 書	北宋 1039	
12	元□通寶	2.5	0.14	3.0	篆 書	—	

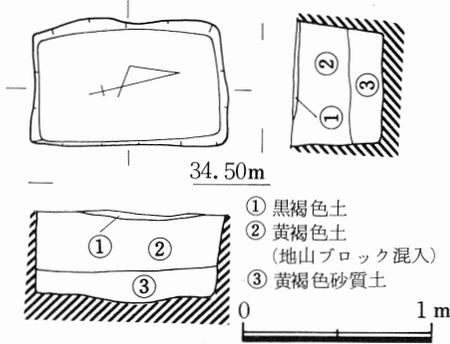
表4 SK06 出土銅銭一覧表

No.	銅銭名	法 量 (cm)			書 体	初鑄年(西暦)	備 考
		直 径	厚 さ	重 量(g)			
1	大観通寶	2.4	0.12	1.75	真 書	北宋 1107	
2	開元通寶	2.4	0.14	3.6	真 書	南唐 937	
3	皇宋通寶	2.4	0.09	3.0	篆 書	北宋 1039	
4	熙寧元寶	2.3	0.1	1.7	真 書	北宋 1068	
5	永樂通寶	2.5	0.13	3.2	真 書	明 1408	
6	永樂通寶	2.5	0.14	2.4	真 書	明 1408	

に掘り込まれ、底面は平坦である。規模は、上面で長辺102cm、短辺65cm、深さ50cmを測り、底面でそれぞれ95cm、58cmを測る。遺物は鉄釘が出土しており、釘頭部の数から17本が確認できた。

### SK05

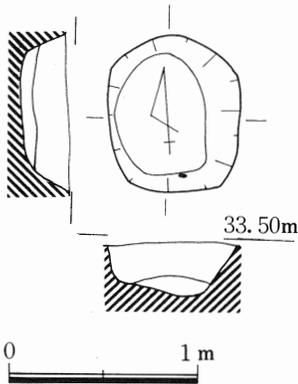
段状遺構の東肩から検出された楕円形を呈する土壙である。長径100cm、短径67cmを測る。底面は平坦ではなく、いくらか凹凸が認められる。地山の黄褐色粗砂（真砂土）に掘り込まれ、埋土は、地山及び黒褐色粘質土の混入する黄茶褐色砂質土である。この土壙からも遺物の出土は見られなかった。



第19図 中世墓SK04実測図

### SK06 (第20図、表4)

段状遺構の西隅に掘り込まれた楕円形の土壙である。周壁は比較的ゆるやかに落ち、底部は、東側に傾斜して平坦ではない。上面での長径85cm、短径71cm、深さ30cmを測る。この土壙からは、南側の壁にそって銅銭6枚が重なって出土している。銅銭はいずれも中国の渡来銭で「大観通宝」「開元通宝」「皇宋通宝」「熙寧元宝」各1枚と「永樂通宝」2枚からなる。



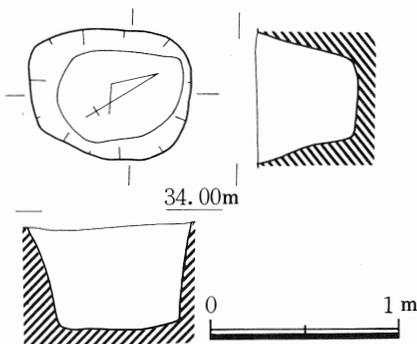
第20図 中世墓SK06実測図

### SK07 (第21図)

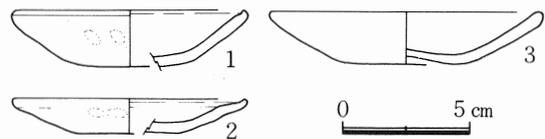
SK04の東側に位置する楕円形の土壙である。長径85cm、短径70cm、深さ55cmを測る。同壁は比較的急角度で落ち込み、平坦な底面に達する。遺物は出土していない。

### 表採土師質土器 (第22図)

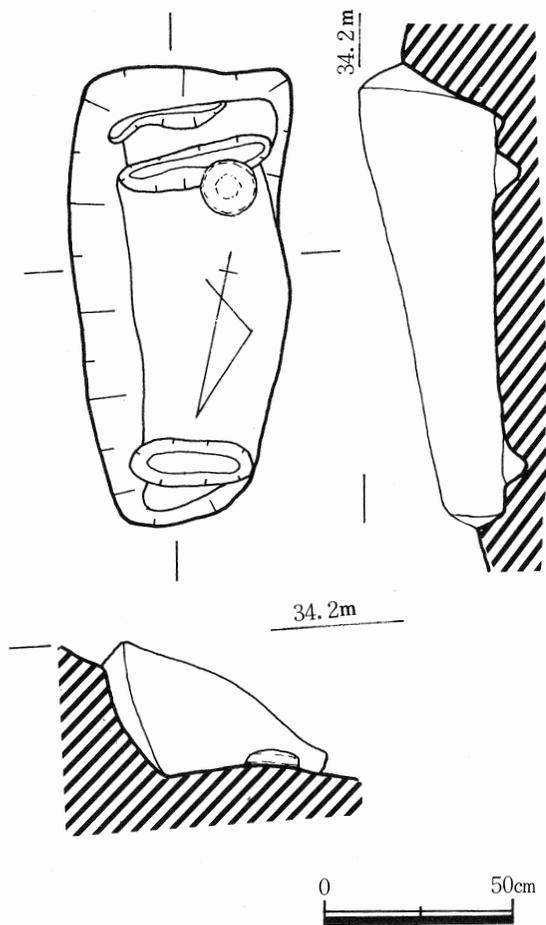
B地区の中世土壙墓からは土器類が検出されていないが、これらの土壙墓に伴うと考えられる土師質土器が表土中や、重機の動かした土砂の中から採集されている。多くは細片となっているが、全形を知ることのできるものも数点含まれている。第22図の皿1、2は、外面に指



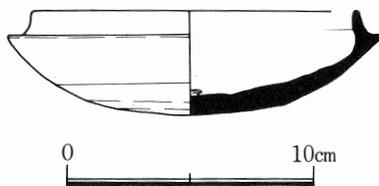
第21図 中世墓SK07実測図



第22図 B地区出土土師質土器実測図



第23図 SK101実測図



第24図 SK101出土須恵器

頭の圧痕があり、口縁端部が内傾する。ともに褐色を呈し、焼成も良好である。3は口縁端部を丸くおさめ、底部は上げ底ぎみにへこむ。淡褐色を呈する。胎土は緻密であるが焼成はあまり良くない。

## 5. その他の遺構

### 古墳時代木棺墓SK101 (第23図)

3号墳の西裾斜面から検出した小型の木棺墓である。西側は流失しているが全形を知ることができる。長さ125cm、幅60cm、底面までの深さ35cmを測る。底面はやや中央部がかまぼこ状にふくらみ、南北両端には小口板を固定したと考えられる掘り込みがみられる。この小口板痕は西に向って若干開きぎみになるが、長さ80cm、幅30cm前後の組み合せ式の箱式木棺が埋納されていたものと考えられる。出土位置、レベルから棺内に副葬したものと思われる須恵器杯身1点が南端からふせた状態で出土している。棺の規模から乳幼児を埋葬したものと考えられ、頭位は、棺の構造、遺物から南向きであったことが知られる。

出土した須恵器は蓋杯の身である(第24図)。たちあがりは、内傾し短く、端部は丸くおさめる。受部は、ほぼ水平に延び、端部は丸い。底部外面は2分の1ほど回転ヘラ削りするほかは回転ナデ調整を行なう。底部内面に同心円のタタキ痕が残る。口径13.2cm、器高4.3cm、受部径15.1cmを測り完形である。胎土は、砂粒を多く含み、焼成もやや不良で軟らかい感じを受ける。色調は灰色を呈する。6世紀後半の所産になるものである。

### 段状遺構（第25図）

B地区の端で検出した遺構である。主稜線肩部から北斜面にかけて地山をカットして平坦面を作り出している。平坦部の長さ8.2m、幅2.3mを測るが、この段状遺構に伴うと考えられる柱穴や溝、焼土などは検出することができなかった。遺物の出土もなく遺構の性格、時期は不明である。

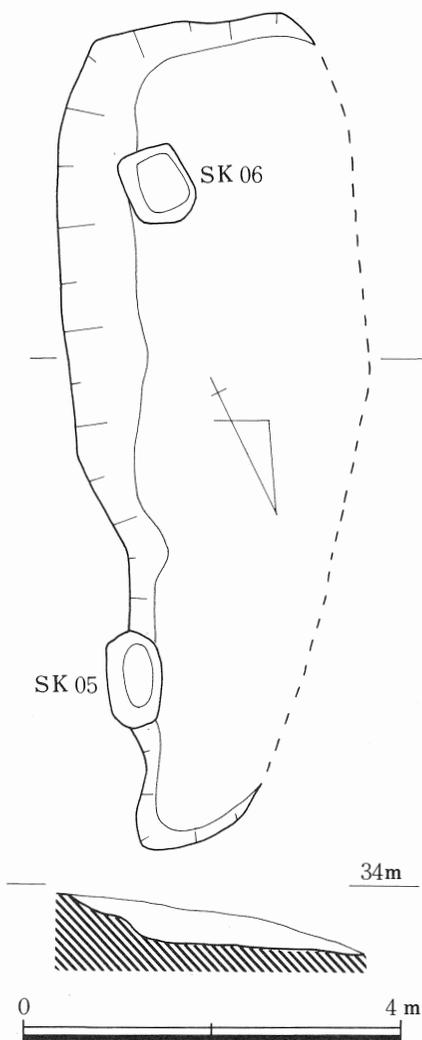
しかしながら、この段状遺構が埋った後に中世墓が作られたことが断面観察によって知られており、少なくとも中世以前に作られ廃棄された遺構であることが知られる。

## 第2節 C地区の調査

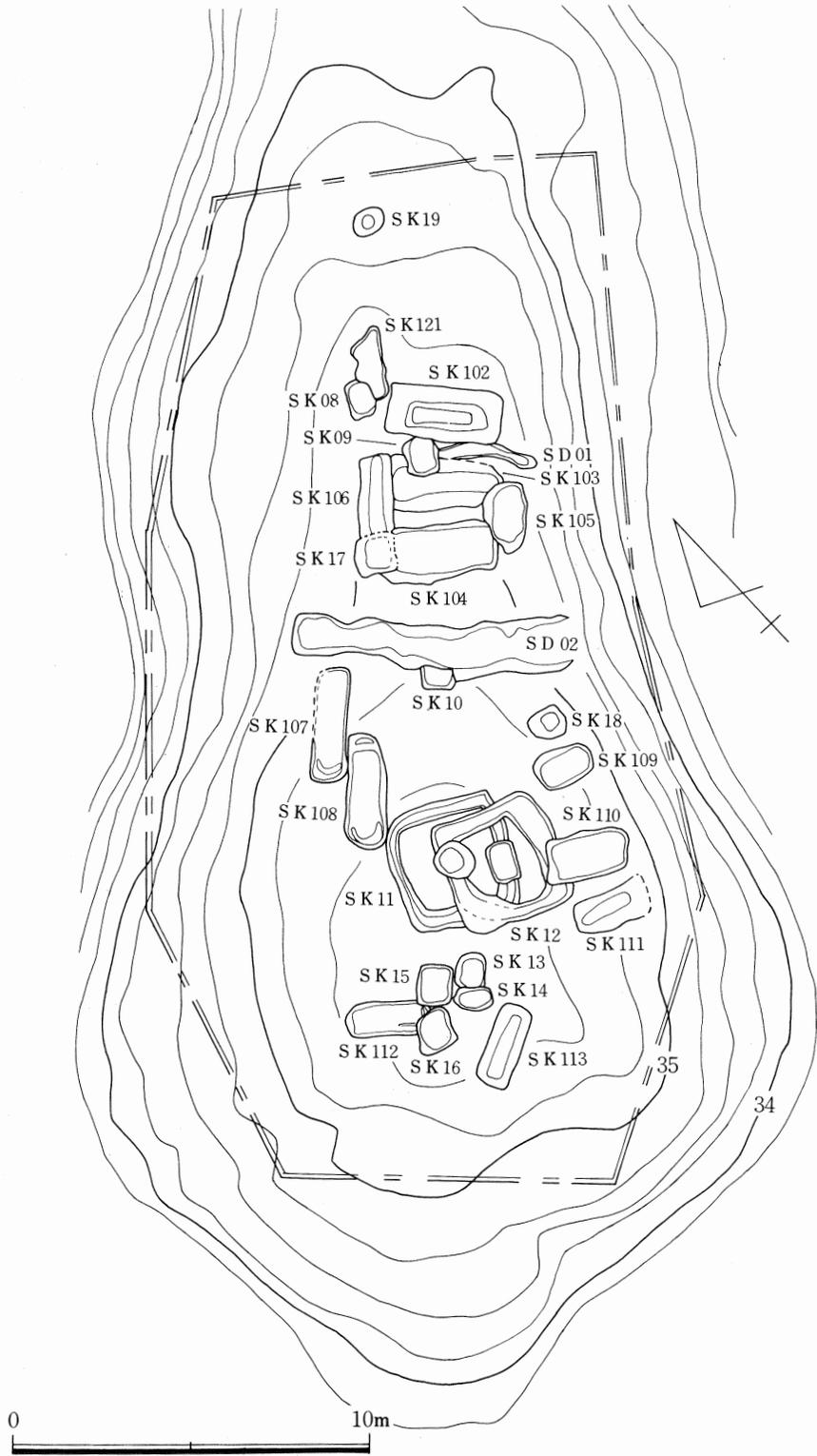
C地区は、西桂見遺跡の西南部にあたり、主稜線はここから鞍部を作り屈曲して南へ続く。この鞍部には最近まで桂見と高住を結ぶ峠道が通っていたが現在では使用されていない。また、最高所からは支脈が北西に向けて延び、先端部はD地区の倉見5、6号墳が位置する。

当初C地区は、古墳と考えられるはっきりした高まりもなく、発掘調査範囲から除外していた地区であったが、B地区の調査などから中世遺構の遺存が想定されたため第2次調査時にトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、表土を剥いだ段階で中世墓等が確認されたため、いったん埋め戻した後第3次調査として約500m<sup>2</sup>を発掘調査した。

C地区の調査は、主稜線上に基準線を設定し、これに直行するように5m毎にベルトを残しながら調査を進めた。この地区は、表土を剥ぐと軟岩質の地山が露出し、遺構は、この地山に掘り込まれて検出されている。調査によって検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて作られたと考えられる土墳墓13基、中世墓10基、溝状遺構2基、土坑2基である。



第25図 段状遺構実測図



第26图 C地区遺構配置図

## 1. 土 壙 墓 (第26図)

C地区から13基の土壙墓が検出された。中央の溝(SD02)によっておおまかに2群にわかれるが、南西の一群(SK107~SK113)はさらにグループ分けすることが土壙の構造などから可能である。北東の一群は6基からなり、主軸の方位を合せるか90°ずらせて密集するが、大きな切り合いは認められない。

土壙内外からの遺物の出土は極めて少なく、鉄器をそれぞれ1点ずつ出土した土壙墓が2基(SK104、SK108)検出されただけで土器の副葬、供献は調査した中では認められなかった。このため、これら土壙墓についての確かな所属時期を特定することはかなり難しい問題である。しかしながら、弥生時代後期後半の土器を出土したSD02を、これら土壙墓群を画する溝と考え、また、墓壙の構造などから、ここでは古墳時代初頭を含む弥生時代終末期前後の所産になるものと考えておきたい。

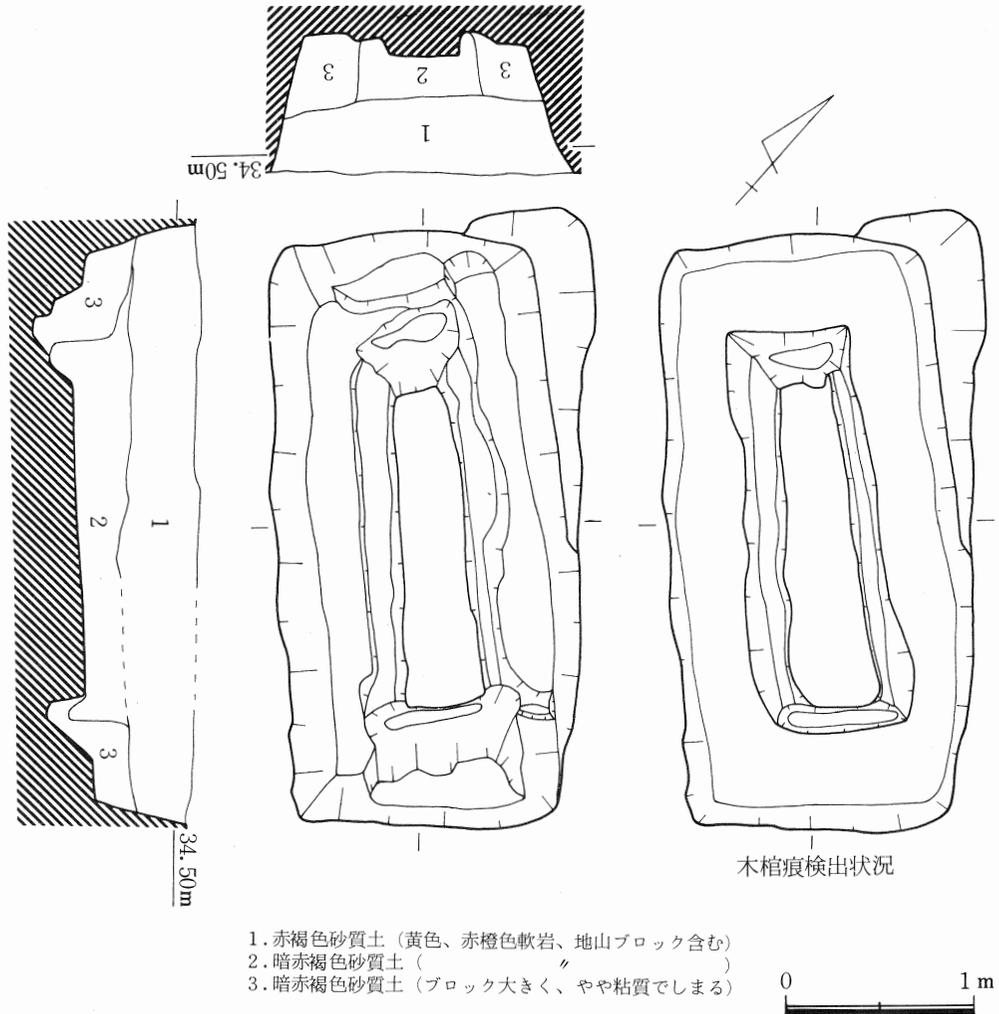
### SK102 (第27図)

溝SD02で区切られたC地区北東部の土壙群の北東寄りで検出された。規模、構造などから中心的な位置を占める土壙である。主軸を南東から北西におき、尾根稜線に直交して掘り込まれ、平面形態はほぼ長方形を呈する。規模は、長さ318cm、幅155cm、壙底までの深さ77cmを測る。40cm程埋土(黄色、赤橙色軟質岩の地山ブロックを含む赤褐色砂質土)を掘り下げた結果、中央部から上層より暗色を呈する木棺痕跡を検出することができた。長さ200cm程の組み合せ式の木棺と考えられ幅は南東部で60cm、北西部で45cmを測り、細長い台形状となる。底板は使用されなかったものと考えられ、13cm程の高さをもって地山を浮き彫り状に造り出し、表面を平滑に仕上げている。木棺はこの屍床とも呼ぶべき造り出しを囲むように組まれたものと思われる。

墓壙には、上記の造り出しとともに両小口板、側板を固定するための溝も掘り込まれているが、小口部はより深く作られている。断面観察によれば、小口板の痕跡は、小口溝の底には達していない。また、側板は、左右とも地山に直接すえられているが、南西部の側板溝は、当初広かったものを狭く掘り直した痕跡が認められる。これらのことから、まず、大まかに墓壙を掘り、木棺固定のための溝、屍床を造ったのち、棺材を運び上げ、現地で、地山の細い整形を行ないながら木棺を組んだものと考えられる。この他、木棺埋納に伴う、赤色顔料、粘土、砂礫の使用といった痕跡は認められなかった。また、遺物の出土も確認されていない。

### SK103 (第28図)

SK102の南西部に接して検出された。北西小口部をSK106に、南部隅をSK105によって切られる。また、北部を中世墓SK09によって切られる。規模は、復元長320cm、幅151cm、深さ38cmを測る。土砂の流失、中世墓壙造営時の削平があったものか、この一群の土壙墓はSK102を除いて総じて浅い。



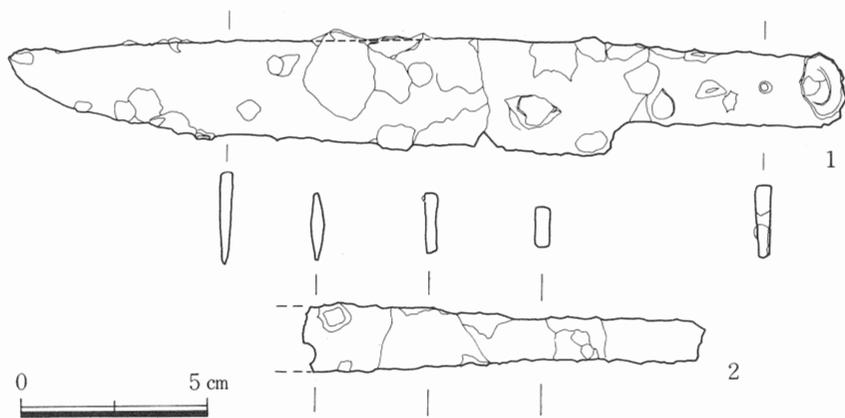
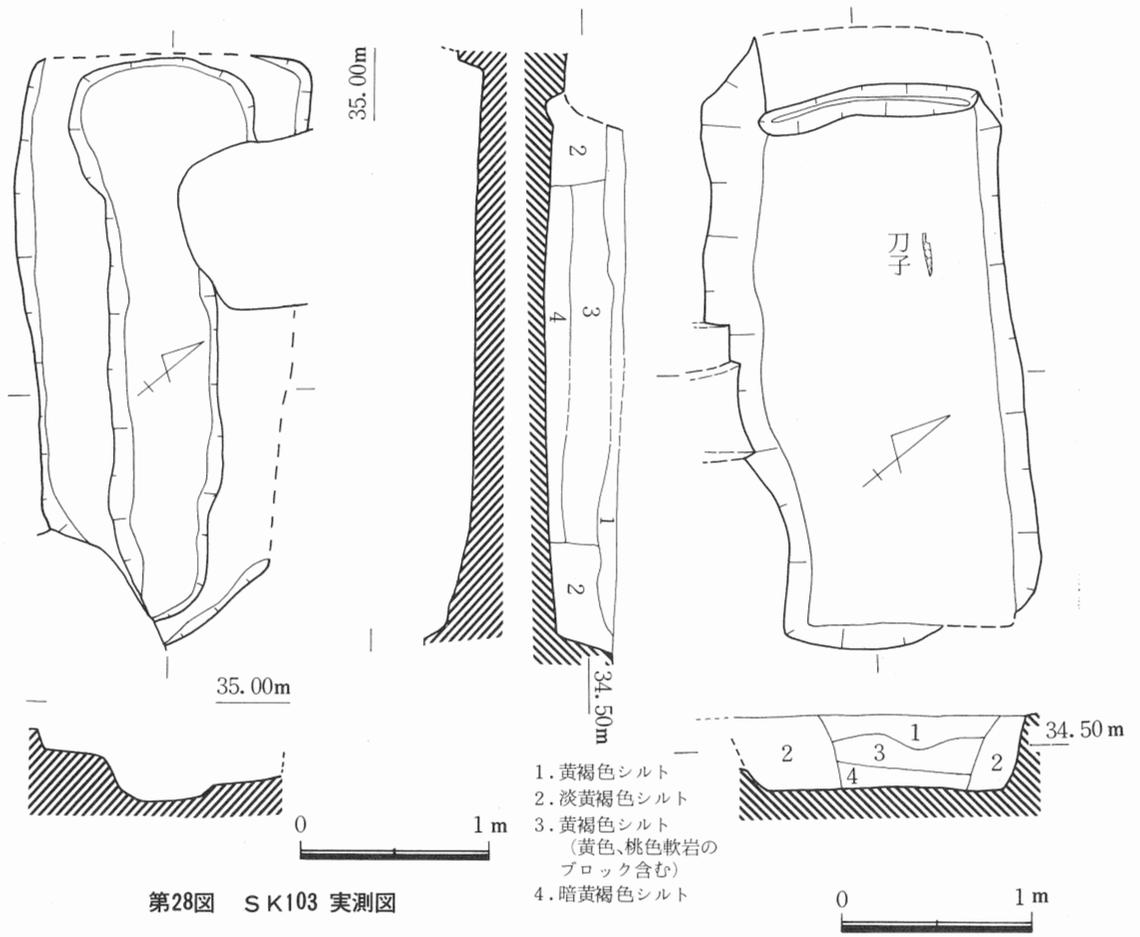
第27図 SK102実測図

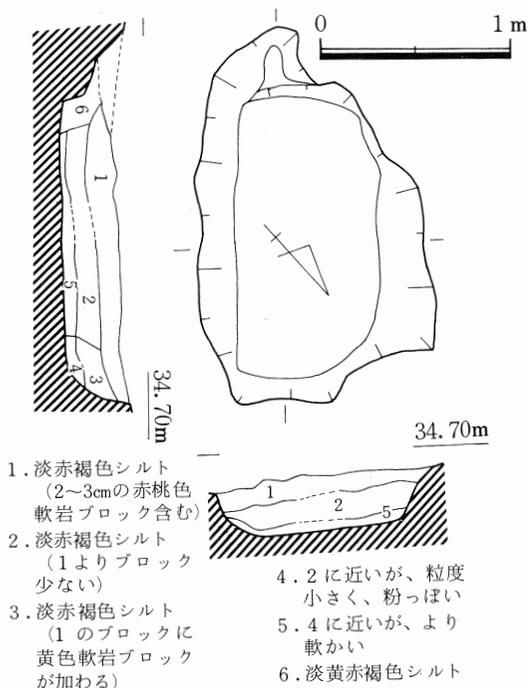
この土壌は、本来長方形を呈していたと考えられるが、東側は確認できない。墓壇は2段に掘り込まれ、下段は、北西部でややふくらみ、横断面もやや湾曲するがこの部分に木棺が据えられたものと思われる。

#### SK104 (第29図)

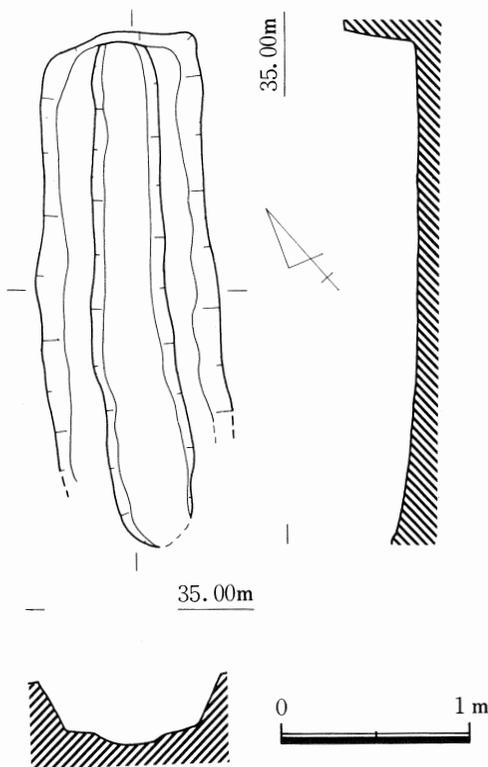
SK103の南西部に主軸を同じくして配置される。東隅でSK105と接し、北西小口部を中世墓SK17によって切られる。墓壇平面は長方形を呈するものと推定され、長さ330cm、幅153cm、深さ34cmを測る。墓壇底は、平坦で、北西隅には小口板固定溝(?)が掘り込まれるが、断面観察から推定した木棺小口とは40cm程の距離があり、今後の検討課題としておきたい。セクションから推定した木棺は、長さ190cm、幅65cm前後の箱形の木棺である。

この土壌の壇底からは、刀子(第30図1)が切っ先を南東に向け、土壇長辺に平行して出土した。





第31図 SK105実測図



第32図 SK106実測図

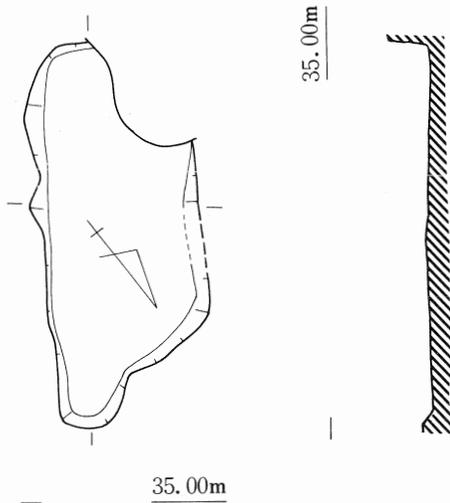
位置、レベルから棺内に副葬されたものと考えられる。全長22.2cm、刃部幅3cmで刀子としては比較的大型である。刃部は切っ先に向かって幅を減じる。刃関は、錆で判然としないが、角度を持って茎に至り、0.8cmを測る。茎部には径0.3cm程の目釘穴が1ヶ所尻近くに認められる。この刀子の他、原位置を動いてしまっているが、鉄剣の一部とも考えられる鉄器(第30図2)が出土している。保存状態が悪いが、茎部から刃部の一部が残る。関は、刃部からゆるやかに茎に漸移するものと思われる。刃部は、幅1.8cm、厚さ0.4cm、茎部は、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。

### SK105 (第31図)

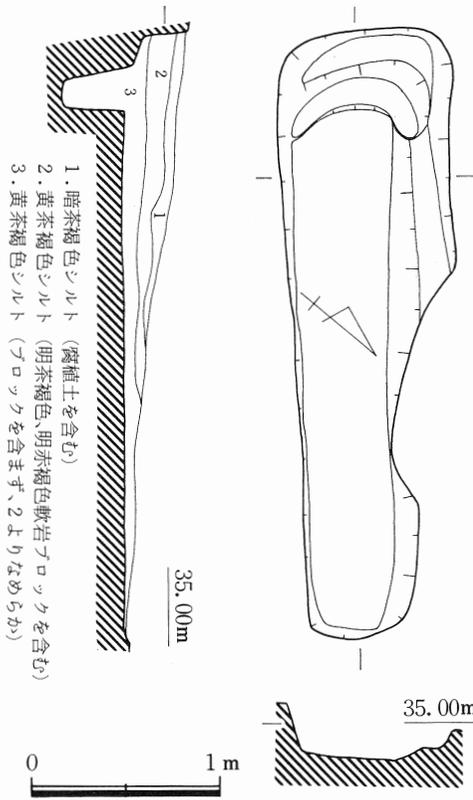
C地区北東部土壌群の南端に位置し、SK103、SK104に接する。尾根稜線と平行に主軸をとりSK102~104の主軸とは直行する。現状では、他の土壌との切り合いから不整形を呈するが、本来は、長楕円形を呈したものと想定される。墓壙底はおおむね平らであるが、北西長辺から南東にかけてやや傾斜する。墓壙底面の規模は、長さ178cm、幅76cmを測るが、この墓壙底に、箱形の木棺が置かれたであろうことが断面観察から推定される。幅については不明であるが長さは105cm前後の小型の木棺であったと思われる。

### SK106 (第32図)

SK103、SK104をはさんで、SK105に相対する土壌である。主軸を南西~北東にとり、尾根主稜線と平行する。SK106は、SK103、SK104の一部を切り込んで作られ、南西部では逆に中世墓SK17によって切られる。墓壙は、角度を持って掘り込まれ、テラスを作った後、2段目の墓壙が掘り込まれる。テラス部からの深さは、7cm程を測る。



第33図 SK121実測図



- 1. 暗茶褐色シルト (腐植土を含む)
- 2. 黄茶褐色シルト (明茶褐色、明赤褐色軟岩ブロックを含む)
- 3. 黄茶褐色シルト (ブロックを含まず、2よりなめらか)

第34図 SK107実測図

墳底は浅いU字形を呈するとともに南西部がやや屈曲する。木棺が埋納されていたと考えられるが、どのような木棺であったかは不明である。いずれにせよ割竹形木棺ないしは、底板の外面が丸みを持った棺材が使われたものと想定される。土墳の規模は、幅 96cm、推定長 280cm、検出面からの深さ 38cmを測る。木棺の規模は、長さ 265cm、幅 40cm前後と考えられる。

SK121 (第33図)

北東部土墳群の北端に位置する土墳である。一部中世墓SK08によって切られる。地山に直接掘り込まれており、平面形態は本来隅丸長方形を呈していたものと思われる。長さ 206cm、幅 89cmを測り、検出面からの深さは、南西部で22cmである。墳底は平坦である。この土墳も箱形の木棺を埋納していたものと考えられるが、積極的な根拠は確認されていない。

SK107 (第34図)

C地区の南西部土墳群の北端に稜線からややはずれて位置するが、主軸は稜線と平行し、南西から北東にとる。南にはSK108が接しており、土墳の構造からも対になるものと思われる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は、長さ324cm、幅89cm、検出面からの墓墳底までの深さ36cmを測る。

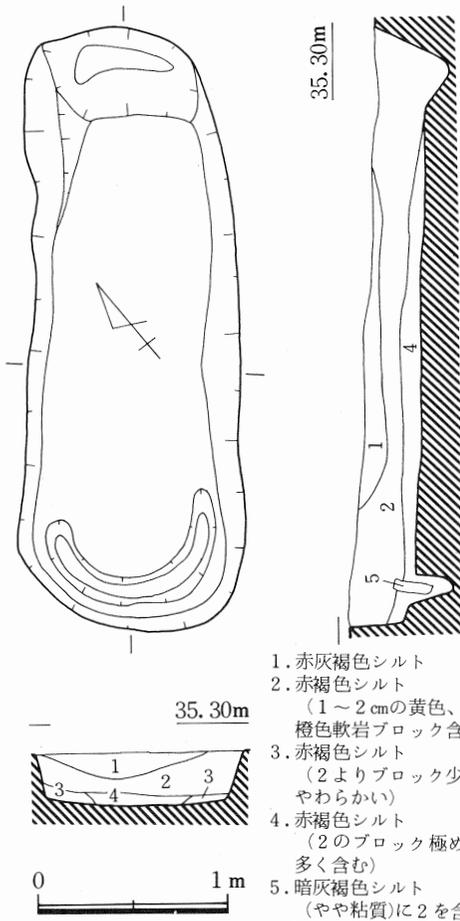
墓墳の北東部は、土砂の流失等によって不鮮明となるが、南西部は旧状をとどめており、この土墳の形態上の特徴を知ることができる。この土墳の南西部には、湾曲した深さ34cm程の掘り込みが認められた。同様に湾曲する小口部の掘り込みを有する土墳は、隣接するSK108とD地区のSK115があるが、位置などから木棺小口板固定の痕跡であると考えられる。この場合、複数の板材、丸木が使用されることとなる。

土壌の北西側壁は段を作りゆるやかな傾斜をもって墳底に至る他、他の側壁は角度を持って墳底に至る。墳底の規模は長さ319cm、幅75cmである。頭位は、南西部になるものと考えられる。

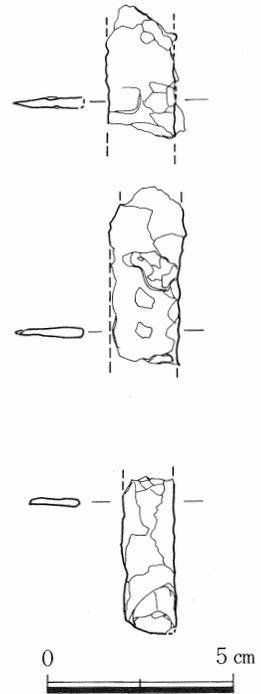
**SK108 (第36図)**

SK107 に接して検出された長楕円形を呈する土壌墓である。規模は長さ322cm、幅113cm、墳底までの深さ43cmを測る。墳底はほぼ平坦に作られており、両小口部には小口板固定のための掘り込みを持つ。南西部の掘り込みは、土壌底から5cm程ひかえて掘り方に添って平面U字形に掘削される。墳底から垂直に近い角度で掘り込まれ、深さは20cm程を測る。北東部の小口穴は墳底からゆるやかな傾斜で掘り込まれ、深さは13cmである。

この墓墳に納められた木棺もSK107同様に、複数の板材ないし丸



第36図 SK108実測図



第35図 SK108出土鉄器実測図

太材を使用し、弧をえがきながら側板と接続する小口部を持つ棺であろうと考えられる。棺の規模は、

断面観察の結果なども合せて考えるならば、長さ250cm、幅50cm程度の大きさが考えられる。このSK108からは、鉄器が3片出土している(第35図)。出土時すでに原位置を動いていたが、南西小口部から約1m、中心軸からやや南へずれた位置から出土したようである。この3片は接合できないが同一個体と思われる。保存状態も悪いため、全体を知ることが出きないが、刃部幅2cm、茎部幅1.4cmを測る刀子と考えられる。

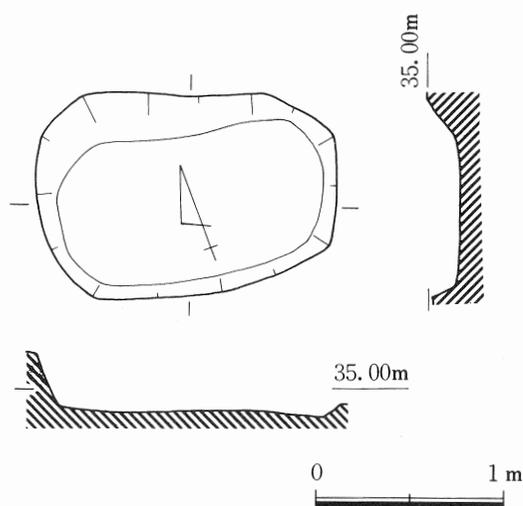
**SK109 (第37図)**

C地区南西部土壌群の東端の斜面への変換点に位置し、主軸は斜面に直交する。土壌上部は土砂の流失等により、削平され、浅くなる。規模は土壌上面で長さ158cm、幅106cmを測り、墳底で長さ139cm、幅97cmを測る小型の墓墳である。平面形は隅丸長方形を呈する。西小口部では30cm程下が

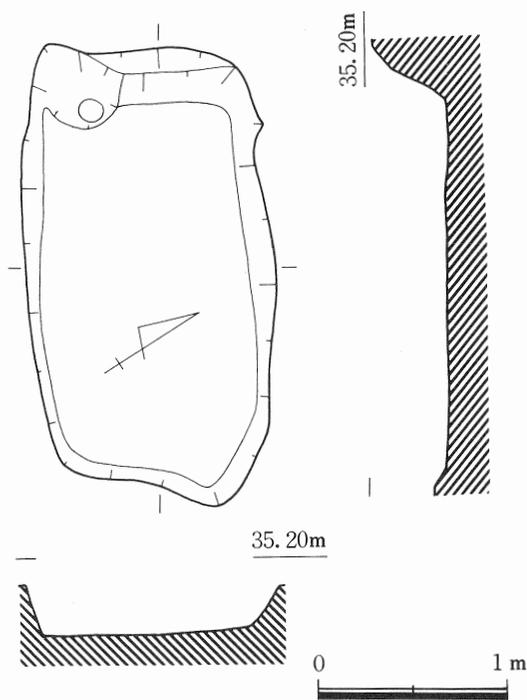
って壙底に至るが、壙底は平坦で長楕円形を呈する。

### SK110 (第38図)

南西部土壙群の南東部に位置し、SK111と平行に検出された。東西両隅でやや突出するが、本来は長方形を呈するものと考えられる。長さ234cm、幅133cm、深さ39cmを測る。壙底は平坦で長さ



第37図 SK109実測図



第38図 SK110実測図

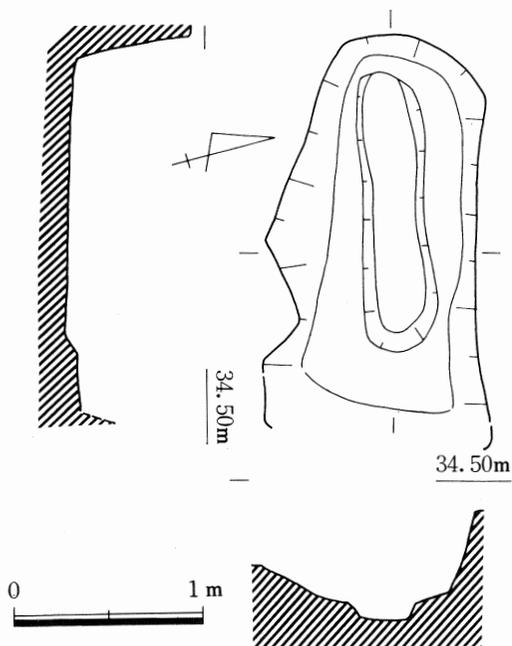
195cm、幅111cmの規模を測る。西隅にピットが検出されているが、掘り方肩部から掘り込まれているようであり、本土壙に伴うものではないものと考えられる。また、北西小口部は中世墓SK12の周溝によって切られる。

### SK111 (第39図)

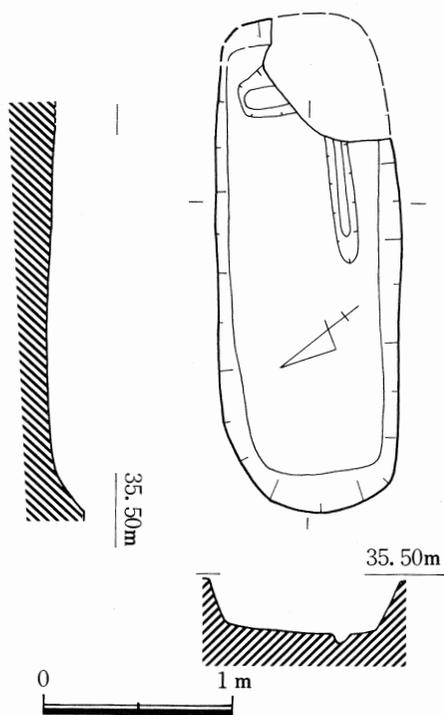
SK110に隣接して検出された2段に掘り込む土壙である。主軸をほぼ東西方向におき、丘陵斜面に直交する。長方形ないし隅丸長方形の平面プランが考えられるが、東小口部は、大きな松根によって攪乱を受け判然としない。長さ230cm、幅107cmの規模が推定される。2段目の墓壙は、掘り方主軸とややずれて検出された。西小口部では不明瞭となるが、長さ150cm、幅30cm、深さ9cmを測る。この下段底部幅は25cm程であり、通常の箱形木棺を納めていたとは考えられない。他の埋葬方法を考える必要がある。

### SK112 (第40図)

C調査区西端で検出した隅丸長方形を呈する土壙墓である。主軸を南東から北西に向け、主稜線に直交する。南東部を中世墓SK15、16によって切られ、保存状態はあまり良くないが、全形を知ることにはできる。平面形態は隅丸長方形を呈し、壙底面も同様の形態をとる。規模は上面で長さ270cm、幅97cm、壙底で長さ230cm、幅79cmと推定することができ、深さ27cmを測る。平らな壙底面には、小口板、側板を立てたと考えられる掘り込みが認められた。側板溝、



第39図 SK111実測図



第40図 SK112実測図

小口穴とも中世墓SK16によって攪乱され、全体の様子を知ることが出来ない。

南側長辺と平行して検出された側板溝は、幅12cm、深さ5cmを測り断面U字形を呈するが、土壙中央部で消える。小口穴の深さは、13cmを測り側板溝より深い。検出された木棺痕に対置する掘り込み等は認められなかったが、本土壙に納められた木棺は、長さ200cm、幅50cmの組み合わせ式の木棺と考えられる。

### SK113 (第41図)

C地区南西端で検出された土壙である。平面形態は長方形を呈し、主軸を南西から北東にとり、長さ241cm、幅92cmを測る。深さは検出面から墓壙底まで40cmである。一部木根によって攪乱されるが、比較的保存状態が良い。壙底には、軟岩質の地山を削り出し表面を平滑に仕上げた高さ5cm程の段が作られている。このベッドは、基部で長さ195cm、幅は両端で異なり南西部で43cm、北東部で31cmを測る。北東小口部には、18cmの深さをもって小口板固定のための掘り込みが検出された。

この土壙墓の木棺は、SK102と同様に、壙底中央部の造り出しを囲むように組み合わせられたものと考えられる。とすれば、木棺の規模も削り出された段状部と同程度の大きさになるものと考えられる。なお、段上面の仕上げから木棺の底板は使われていなかったと思われる。中央部に削り出された段の形態から南西部に頭位があったものと考えられる。

## 2. 中世墓 (第26図)

C地区からは10基の中世墓が検出された。いずれも主稜線上に位置する。C地区最高所には周溝をめぐらすSK11、12が立地するほか4基の中世墓が隣接して作られている。最高所から北東へB地区に向かう稜線上に4基やや離れて検出されたが、この4基の中世墓は主軸をほぼ同じ方向に向けている。10基の中世墓のうち木棺直葬と思われるものが4基認められたほか、火葬墓2基、土器床墓とも呼ぶべきもの1基、甕棺1基が検出されバラエティー豊かである。

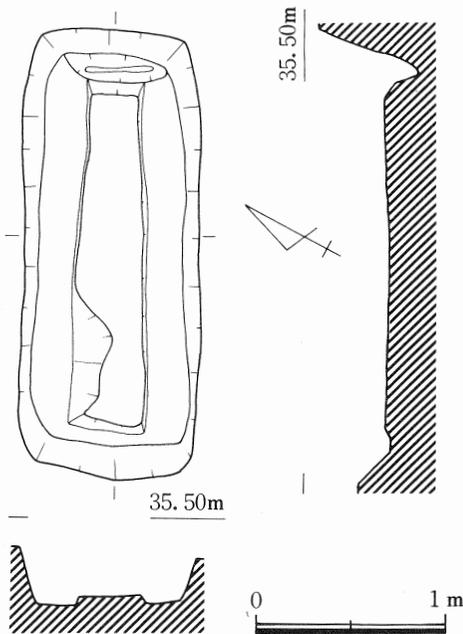
遺物もB地区の中世墓に比較して種類、量とも豊かであり、備前焼などの陶器、鉄釘、土師質土器、銅銭、五輪塔の一部などが出土した。またごく細片ではあるが人骨も出土している。これらの中世墓は、出土遺物から15世紀から16世紀頃にかけて営まれたものと考えられる。

### SK08 (第42図)

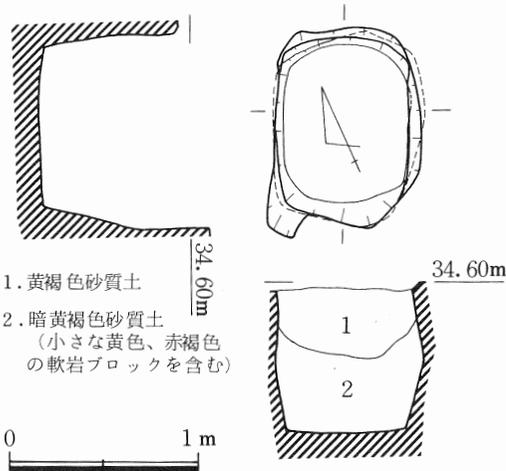
C調査区中世墓群の北端に位置する隅丸長方形の墓壙である。規模は上面で長さ107cm、幅77cmを測り、壙底で長さ84cm、幅66cmを測る。検出面からの深さは79cmである。この墓壙の長辺の壁上部は外側に掘り込まれる。

### SK09 (第43図)

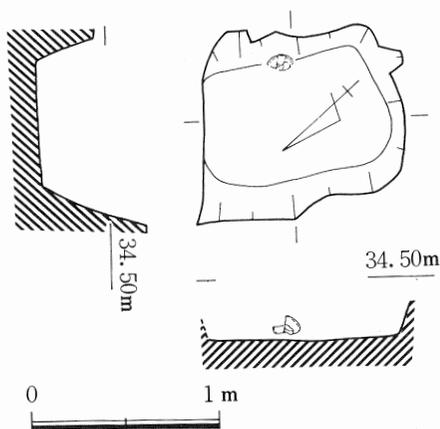
土壙墓SK102、103を切って掘り込まれる。SK102を先に検出したため北東部の一部を欠くが、隅丸長方形のプランを持つ中世墓である。規模は推定長120cm、幅100cm、深さ56cmを測る。壙底は平坦で推定長100cm、幅64cmを測る。鉄釘等が出土していないが木棺直葬墓と考えられる。遺物は土師質皿(第44図)が1点、北東壁中央部から口縁部を壁に向けて出土している。壙底からはやや



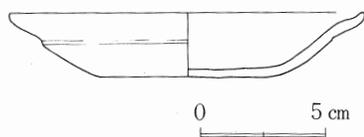
第41図 SK113実測図



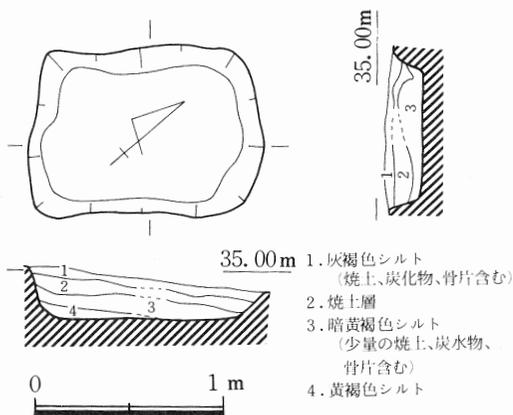
第42図 SK08実測図



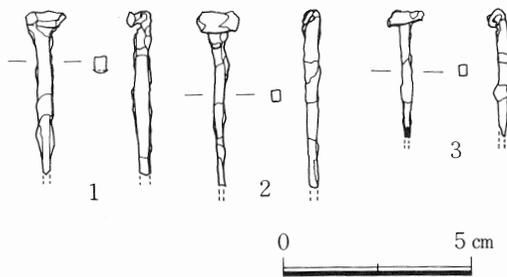
第43図 SK09実測図



第44図 SK09出土土器実測図



第45図 SK10実測図



第46図 SK10出土鉄釘実測図

浮いており、土壙壁と棺の間にはさまれていたような状態を示す。

口径14.1cmの土師質皿は、口縁部の一部を欠くが全形を知ることができる。底部は平らで、ゆるやかに立ち上がり口縁部に至るが、上部で横ナデによる段を作りさらに外反する。端部は、上方にややつまみ上げる。段上部外面と内面を横ナデする。

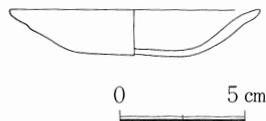
SK10 (第45図)

C地区中央部稜線上から検出された。隅丸長方形を呈し、上面で長さ125cm、幅89cm、壙底で長さ107cm、幅67cmを測る。深さは28cmと深い。埋土は、上層から灰褐色シルト(焼土、炭化物、骨片を含む)、焼土層、暗黄褐色シルト(少量の焼土、炭化物、骨片を含む)、黄褐色のシルトとなり、周壁及び墓壙底には焼土層が認められなかった。

遺物には、鉄釘(第46図)約11本(頭部の数による)のほか骨片が出土している。この土壙は、明からに火葬墓であるが、この土壙内で火葬に付されたものなのか断面観察からは若干の疑問も残る。しかしながらここでは、第2層を火葬時の床面焼土層と考えておきたい。出土した鉄釘は、錆のため保存状態が悪いが、いずれも長さ4~5cm程度の角釘で、たたいて作り出した扁平な頭を持つものである。また、上面から第47図に示した土師質皿が出土している。

SK11 (第48、49図)

C地区最高所に位置する方形の周溝を巡らせた

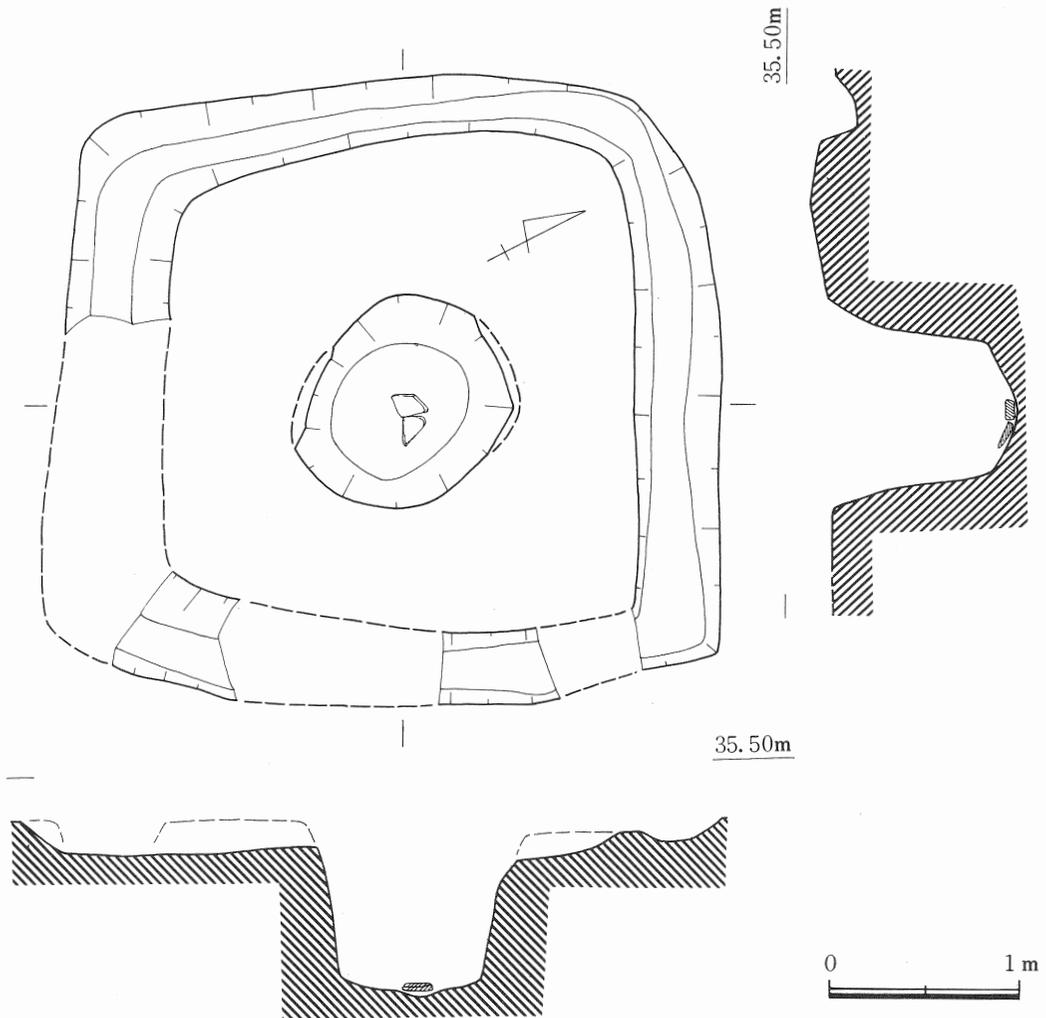


第47図 SK10出土土器実測図

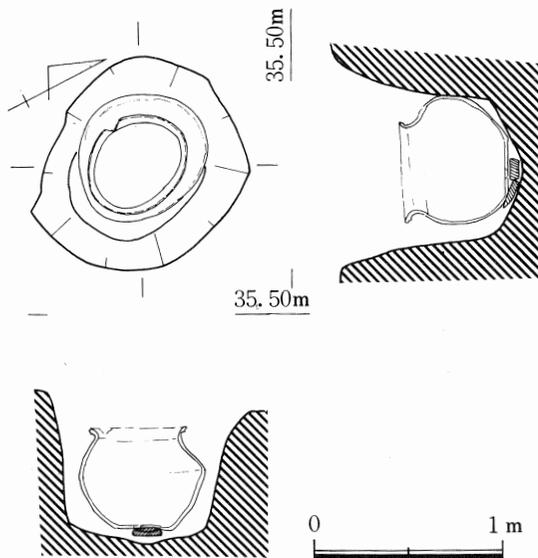
中世墓である。周溝の中央部には、甕棺を納めた円形の墓壙が検出されている。周溝、墓壙とも、中世墓S K12の周溝に切られている。周溝は一辺350~340cmのほぼ正方形に素掘りの溝をめぐる。溝の幅は30~50cmと一定せず、また、深さも10~20cmと高低があるがレベルはほぼ一定である。

墓壙は、上部をS K12の周溝によって削られるが、ほぼ円形に角度をもって掘り込まれる。底部は、やや掘りくぼめられ、甕棺固定のための板石が2枚検出された。墓壙の規模は、上面で長径118cm 短径100cmをはかり深さは108cmである。甕棺は、西側で墓壙壁に接し、他では7~8cmの隙間を作り検出された。蓋は検出されなかったが、埋納時には木板等でおおったものと考えられる。棺内からは、銅銭18枚が重なって出土した。

18枚の銅銭は、いずれも錆によって接着し、かつ脆く保存状態が悪い。このため、銭名の判明したものは8枚である(表5)。皇宋通宝が4枚と永楽通宝が2枚、紹聖元宝、元豊通宝がそれぞれ1



第48図 SK11実測図



第49図 SK11甕棺出土状態実測図

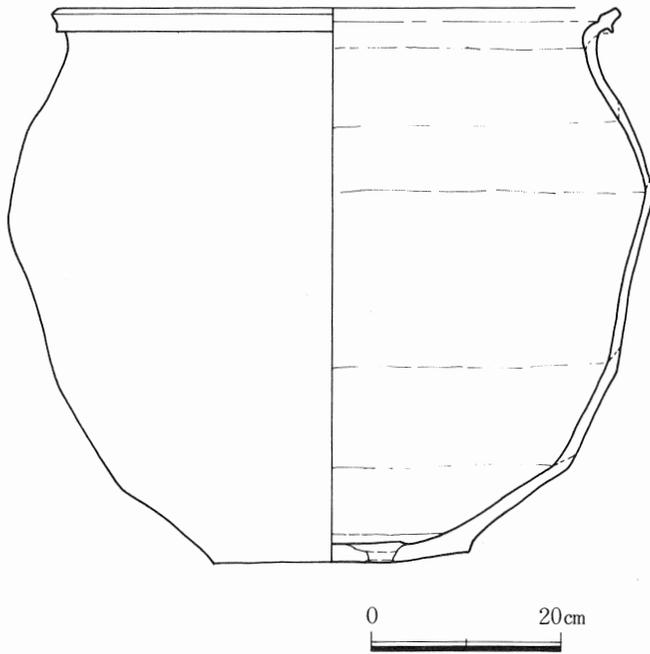
枚である。棺として使われた甕（第50図）は、越前焼の大甕である。底部のやや中心からずれた位置に径3 cmを測る外からの穿孔がなされている。口径60.6 cm、最大胴径68.4 cm、器高59.2 cmを測る。肩部に黄緑色の自然釉が見られるが、外面は淡くすんだ茶褐色を呈し、焼成は良好である。成形は、細砂を多く含む粘土紐の積上げによっておこなわれ、接合は指頭の押圧によるものと思われ内面には圧痕が残る。

SK12（第52図）

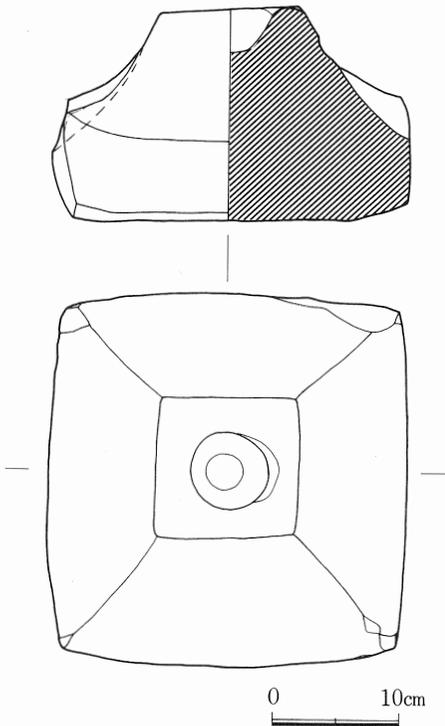
SK11の東側に位置する。SK11同様方形の周溝をめぐる。東西辺350 cm、南北辺330 cmを測り正方形に近い。周溝の内側の肩がやや不整

表5 SK11 出土銅銭一覧表

No.	銅銭名	法 量 (cm)			書 体	初 鑄 年 (西 曆)	備 考
		直 径	厚 さ	重 量 (g)			
1	皇 宋 通 寶	2.34	0.19	3.6	篆 書	北 宋 1039	一部欠
2	皇 宋 通 寶	2.31	0.16	1.7	篆 書	北 宋 1039	一部欠
3	皇 宋 通 寶	2.42	0.16	2.3	篆 書	北 宋 1039	一部欠
4	紹 聖 通 寶	2.40	0.16	1.7	行 書	北 宋 1094	一部欠
5	元 □ 元 寶	2.42	0.14	2.9	行 書	—	
6	元 □ 通 寶	2.25	0.14	2.3	篆 書	—	一部欠
7	皇 宋 通 寶	2.48	0.12	(3.1)	篆 書	北 宋 1039	一部欠、他の破片附着
8	元 豊 通 寶	2.47	0.14	(4.9)	行 書	北 宋 1078	一部欠、他に2枚分の破片附着
9	永 樂 通 寶	2.48	0.15	(5.9)	真 書	明 1408	他に1枚附着
10	永 樂 通 寶	—	0.15	(5.0)	真 書	明 1408	一部欠、他に2枚附着
11	元 □ 通 寶	—	0.12	(4.7)	篆 書	—	一部欠、他に2枚附着
12	不 明	—	—	(1.9)	—	—	約半分、他の破片附着
13	(8に附着の銅銭)	—	—	—	—	—	11に附着のものと同一個体
14	(9に附着の銅銭)	—	—	—	—	—	
15	(10に附着の銅銭)	—	—	—	—	—	
16	(11に附着の銅銭)	—	—	—	—	—	他の一枚は13と同一個体
17	(12に附着の銅銭)	—	—	—	—	—	約半分残存。寶の一字が読みとれる
18	(8に附着の銅銭)	—	—	—	—	—	他の1枚は16と同一個体



第50図 SK11出土陶器実測図



第51図 SK12出土五輪塔（火輪）実測図

形で、溝の幅は一定しない。溝の深さは約15cm前後であり、溝底は平らである。この周溝内のほぼ中央部に長さ110cm、幅73cm、深さ21cmを測る長方形の墓壙が置かれる。墓壙内で火葬が行なわれており、墓壙の周壁および底面は赤く焼けており底面の一部には、各辺に添って炭化木材が検出された。

遺物は、墓壙内から銅銭9枚、鉄釘2本、骨片、周溝内から土師質皿、五輪塔の火輪が出土している。周溝からの遺物は、いずれも上面からの出土のため、本中世墓に本来伴っていたものかは明らかではない。銅銭は、火熱のため融

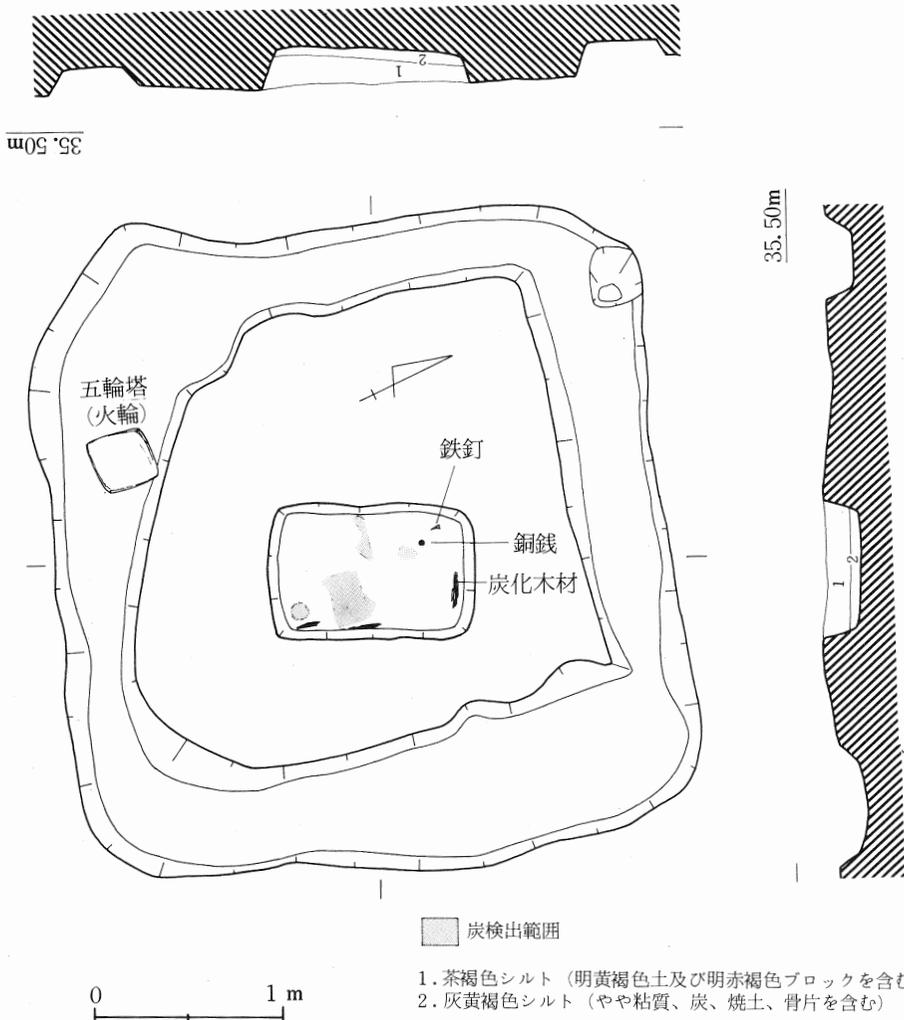
解し、接着するが、9枚を数えることができる。銭名はまったく不明である。鉄釘（第53図）はSK10出土のものと同類のものである。第54図の土師質皿は、北西隅部から出土し、口径9.5cmを測る。第51図の五輪塔の火輪（笠）は、凝灰岩系の石材で作られ、上面に径6cmの柄穴を持つ。

**SK13**（第55図）

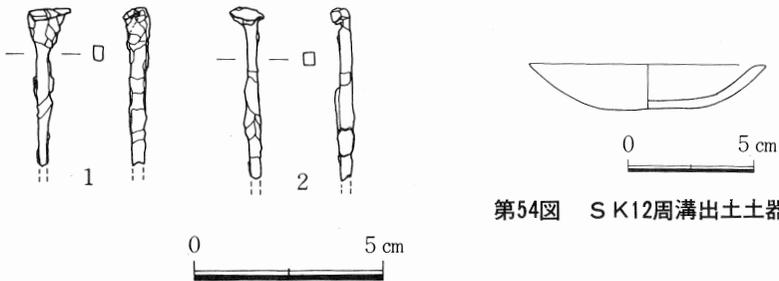
C地区南西部に位置し、楕円形を呈する浅い土壙である。南西部の一部をSK14によって切られるが、長径110cm、短径79cm前後の規模が想定される。壙底は平坦である。

**SK14**（第55図）

SK13同様不整の楕円形を呈し、長径107cm、短径66cmを測る。深さも13cmと浅い。壙底は南東から北西へ傾斜する。



第52図 SK12実測図



第54図 SK12周溝出土土器実測図

第53図 SK12出土鉄釘実測図

**SK15 (第56、57図)**

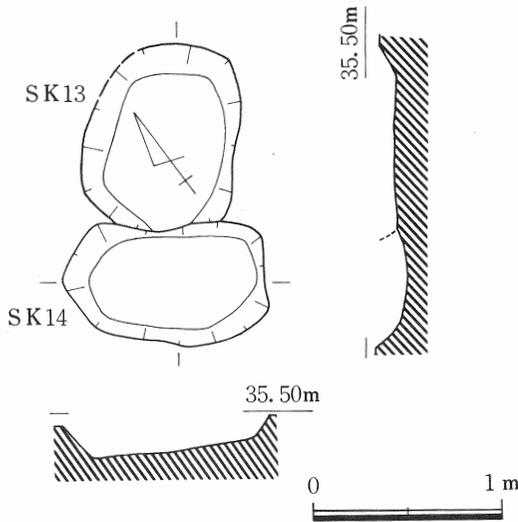
C地区南西部に位置する平面長方形の中世墓である。掘り方は長さ113cm、幅98cm、深さ37cmを測る。やや傾斜する長さ96cm、幅81cmの墳底には、人頭大の角礫、河原石が平らな面を上にして敷設され、さらに上面には備前焼の大甕が破碎されて敷きつめられる。細かく見ると破碎された甕片は裏面を上にして敷かれ、南コーナー部では壁面にそって立てられておりかなり意識的に敷きつめられたことがわかる。

土器床に使われた土器片を接合したところ、若干の欠損部があるものの1個体の大甕を復元することができた。口径40cm、器高69cm、最大胴径64.8cmを測る備前焼の大甕である。外面に一部茶褐色を呈する部分があるが全体として青灰色を呈し、肩部には淡黄色の自然釉が胡麻ふり状にかか

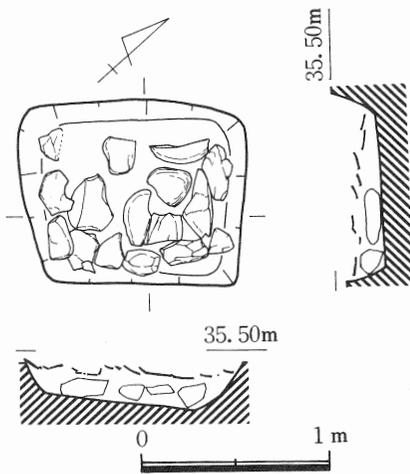
る。細砂を含む胎土で焼成も良好である。外面の調整は体部上半を横ヘラ削り、下半をタテヘラ削りする。内面は上半を荒い横ハケ、下半を細いヨコハケで調整する。やや外反して玉縁状をなす口縁部は横ナデによって仕上げる。底部は外面ヘラ削り、内面ナデ調整である。なお体部の最下位はナデ調整する(第58図)。

**SK16 (第59図)**

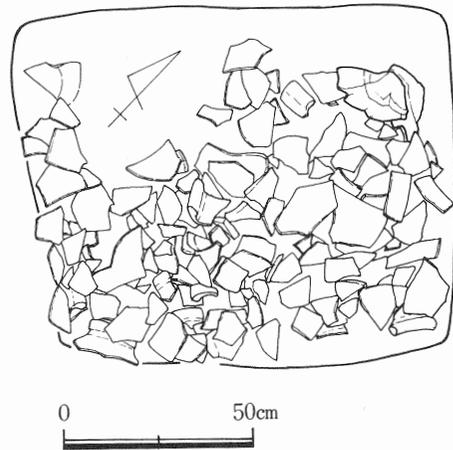
SK15の南西部に隣接する。土墳墓のSK112を切り込んで作られた長さ124cm、幅95cm、深さ



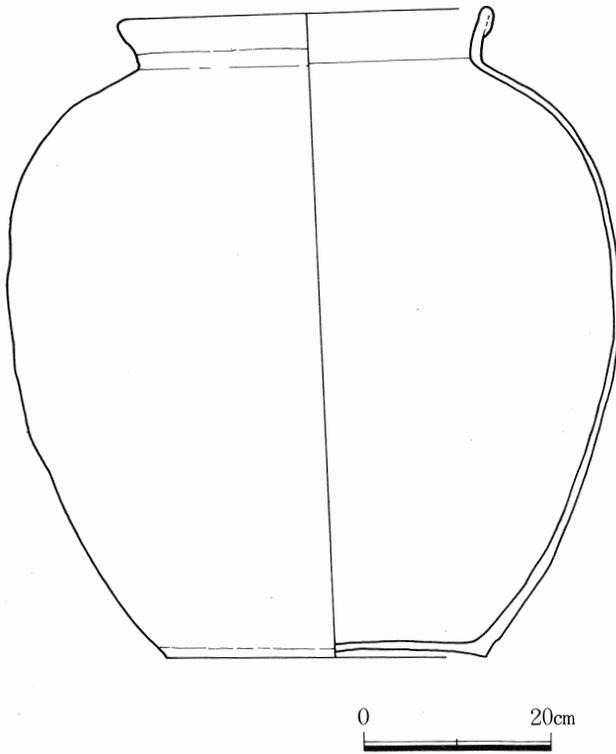
第55図 SK13、14実測図



第56図 SK15実測図



第57図 SK15陶器出土状態実測図



第58図 SK15出土陶器実測図

81cmの墓壙である。西隅を木の根で攪乱されるが、本来長方形を呈するものと考えられる。壙壁は角度を持って掘り込まれ、壙底は、長さ106cm、幅84cmを測り平坦である。遺物の出土は認められなかったが木棺を埋納した墓壙と考えられる。

### SK17 (第60図)

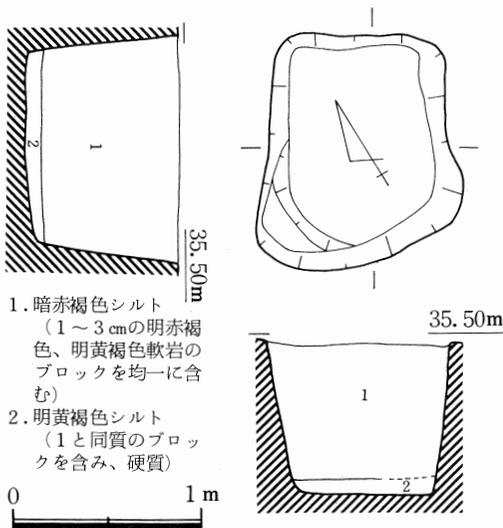
C地区中央部北東寄りに位置する墓壙である。土壙墓SK104、106調査中に断面観察によって検出されたため墓壙の東半はすでに掘削されて全体の形状を知ることができないが、残存部の状況から長さ110cm程度の隅丸長方形の墓壙が想定できる。壙底の規模は長さ88cm、幅66cmの隅丸長方形と推定され、平坦である。深さは検出面から41cmを測る。

## 3. 土坑状遺構

平面形態、構造などから、土壙墓、中世墓と考えられない土坑状の遺構を今回土坑として一括した。C地区においてはSK18、19と2基検出されているが、いずれも70~80cm径の不整円形のプランを呈し、土坑底部は明確な面を持たず、先細りとなる。出土遺物もなく、土坑の性格、時期とも不明である。

## 4. 溝状遺構

C地区からはSD01、02と2基の溝状遺構が検出されている。SD01は、C地区北東土壙群中から主稜線に直交して検出された狭小な溝状遺構であるが、土壙墓との切り合いも明確ではなく、性



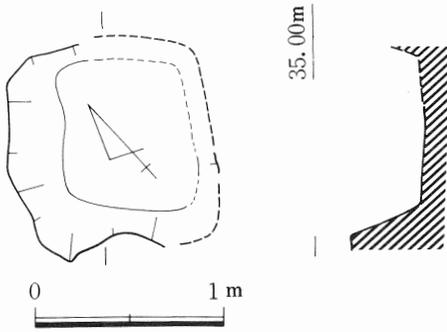
1. 暗赤褐色シルト  
(1~3cmの明赤褐色、明黄褐色軟岩のブロックを均一に含む)
2. 明黄褐色シルト  
(1と同質のブロックを含み、硬質)

第59図 SK16実測図

格、時期とも不明である。

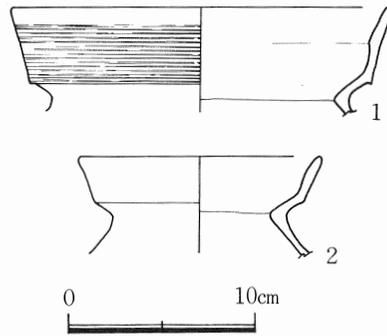
**SD02 (第62図)**

C地区中央部から主稜線に直交して検出された幅100~150cm、深さ10cm程の溝状遺構である。約8m検出しており北西部は完結するが南東部は斜面に消える。堆積土は2層からなり、遺物は少量の土器片が上層から出土している。土器は甕で構成され、他の器種は見られない。第61図1は、口縁外面にくし描き平行沈線をめぐらす甕口縁部である。2も甕口縁部であるが、剥落が激しく調整は不明である。このSD02は、C地区の土墳墓(群)に伴う区画溝と考えられ、出土遺物から弥生時代後期後半前後の掘削になるものと思われる。

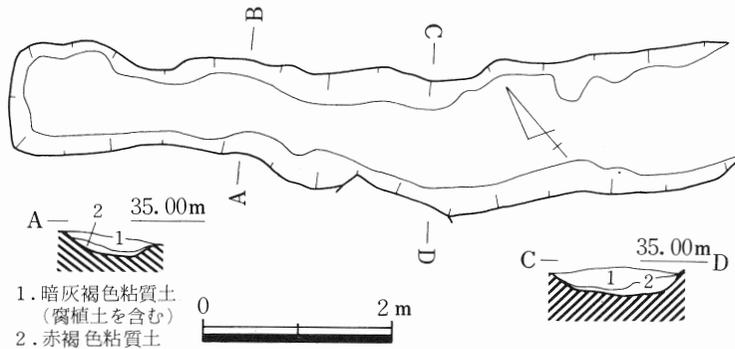


第60図 SK17実測図

ある。2も甕口縁部であるが、剥落が激しく調整は不明である。このSD02は、C地区の土墳墓(群)に伴う区画溝と考えられ、出土遺物から弥生時代後期後半前後の掘削になるものと思われる。



第61図 SD02出土土器実測図



第62図 SD02実測図

### 第3節 D地区の調査

C地区の最高所から湖山池に向かって延びる支脈をD地区とした。主稜から派生した尾根は、比較的広い稜線を持ちながら高度を下げ6号墳に至るが、ここから急傾斜となって湖山池岸に落ちる。発掘調査前には5号墳の存在が知られているだけであったが、発掘調査によって古墳2基、土壙墓7基、溝状遺構1基が検出された。

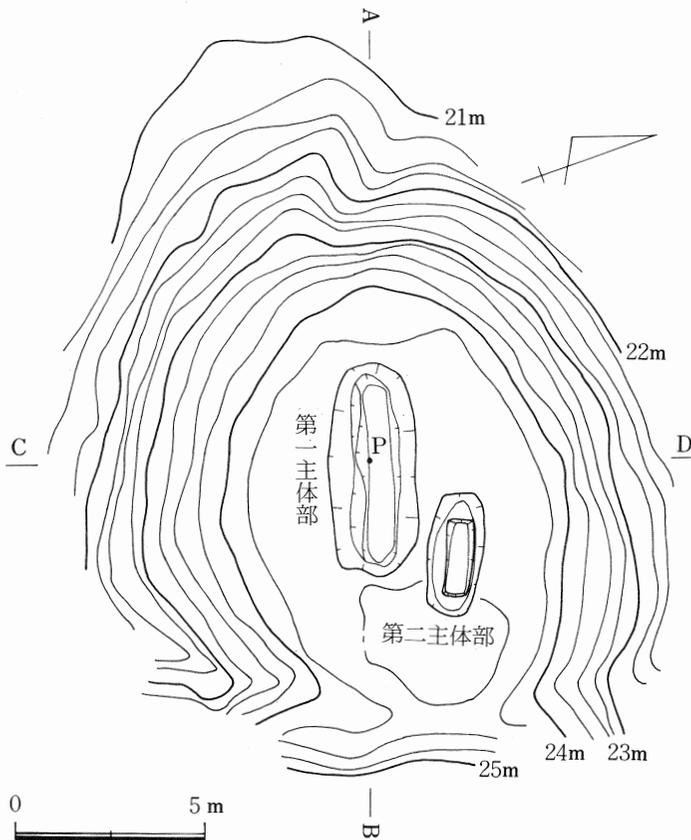
#### 1. 倉見5号墳

##### 位置と墳丘（第63～65図）

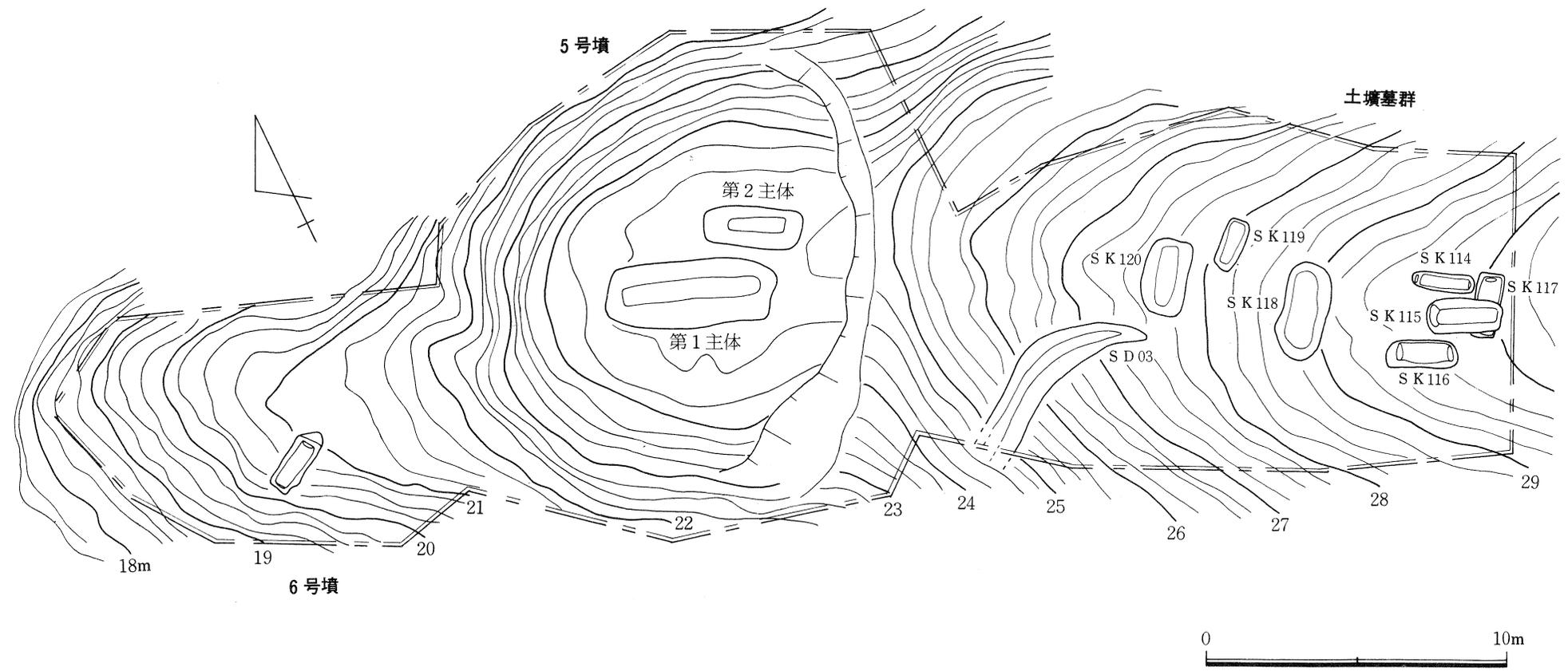
倉見5号墳は、主稜から北西に延びる支稜のほぼ先端部に位置し、調査前の墳頂部の標高は、およそ24.5mを測る。直下の湖山池岸との比高差は約22mである。調査前の墳丘は、尾根の先端部にややふくらんだ平坦部が認められ、調査前の踏査時にも一見して古墳であると確認される状態であった。『鳥取県遺跡地図』に倉見5号墳（径12m、高さ1m）として記載される古墳に該当する

ものと考えられる。

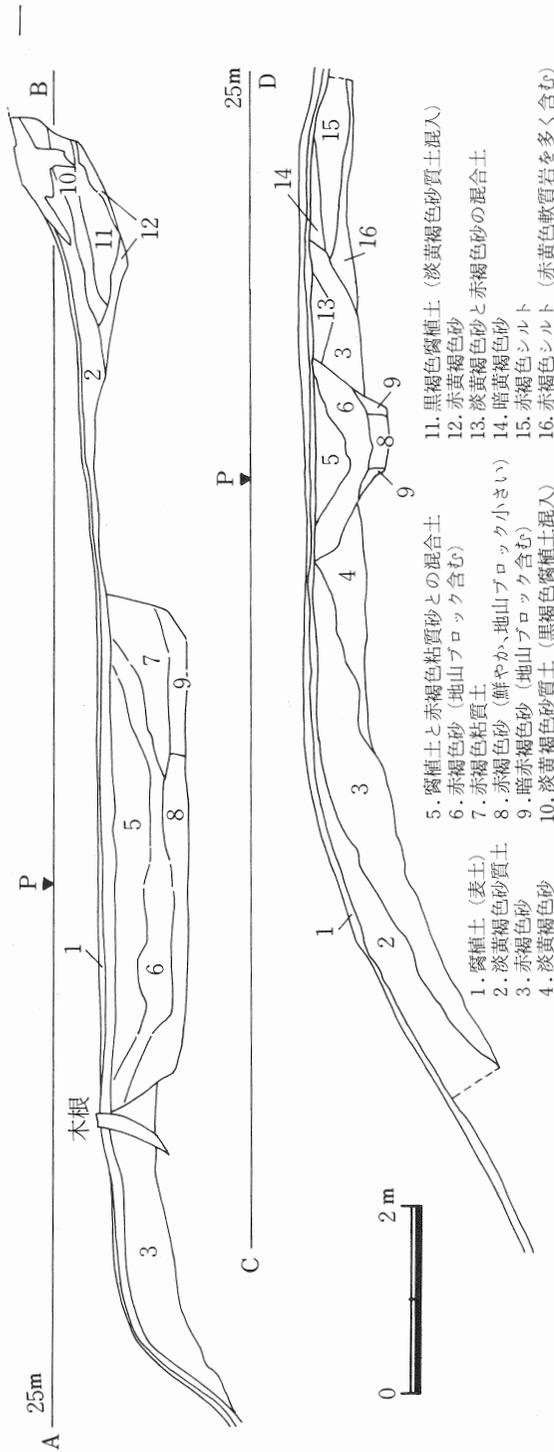
墳丘は、発掘調査によって地山の削り出し整形と盛土によって築造されていることが確認された。すなわち尾根上部に半円形の溝を掘ることによって墳丘東南部の整形を行ない、北西部には盛土を置くことによって墳丘を円形にととのえている。盛土は、墳丘の北西部で0.6mほどの厚さが認められる。溝は、断面U字形の溝で墳丘南東部を孤状に区画するが、両端は不明瞭となって斜面に消えてしまう。また、墳丘の北西部の裾部にはテラス状の平坦部を造り出して6号墳に続くが、北及び南側の墳丘斜面には墳丘基底部としての加工は認めら



第63図 5号墳調査後墳丘実測図



第64图 D地区遺構配置図



第65図 5号墳墳丘断面図

れず、尾根斜面に移行する。墳丘の規模は、標高22m付近がこの古墳の見かけ上の基底部と考えられることから、ほぼ径16m、高さ2.5mの円墳とすることができる。土層観察から淡黄褐色砂質土が墳丘の北西部分に厚く堆積していることが知られるが、この土は本来墳丘盛土であったと考えられ、築造時の墳丘はもう少し高かったものと思われる。

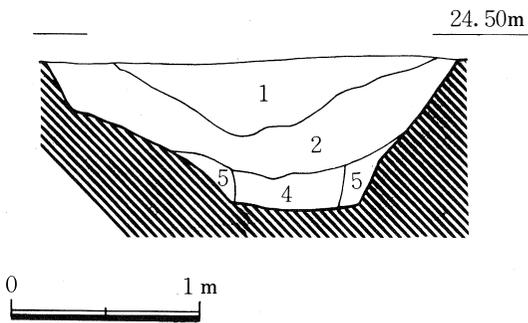
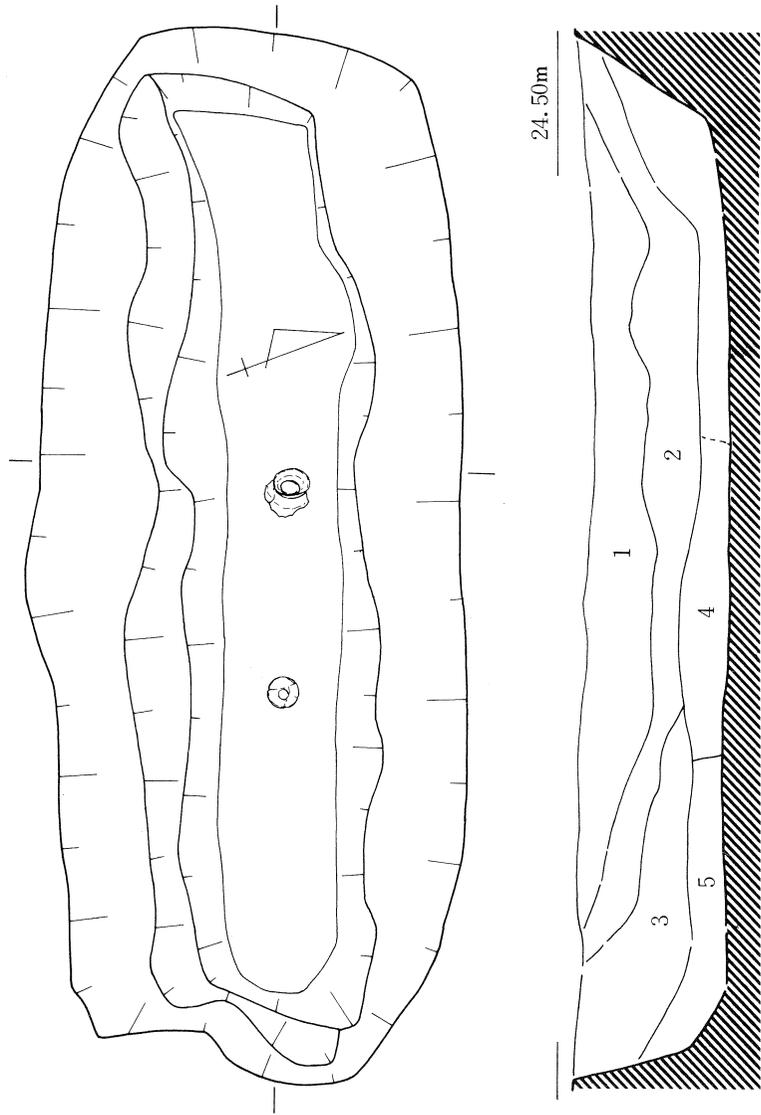
このほか、葺石、張石などの墳丘外部施設は認められなかった。

#### 埋葬施設

表土を剥いだ墳頂部は平坦で、長径11.5m、短径8mの楕円形を呈する。この平坦部から木棺を埋納したと考えられる墓壙2基を検出した。2基の墓壙は、ともに軸を北西から南東に向けて平行に配置されるが、規模、位置などから第1主体部が古墳築造当初の主体部と考えられる。

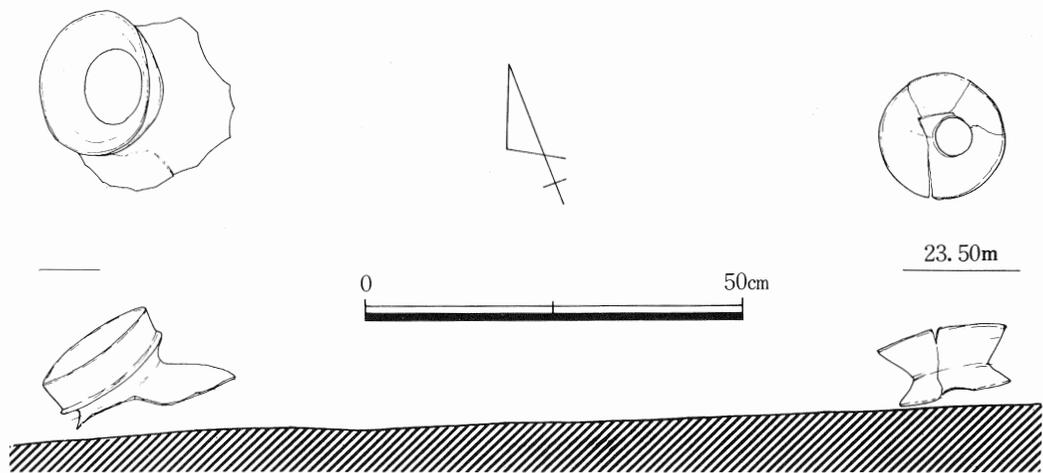
#### 第1主体部 (第66、67図)

5号墳のほぼ中心部から検出した埋葬施設である。表土下10cm程で腐植土の混入した赤褐色砂質土の落ち込みが認められ、墓壙の存在を知ることができた。南東部は直接地山を掘り込むが、北西部は、盛土上面から掘り込まれ、この墓壙が墳丘築造後に作られたことを知ることができる。軸を北西から南東にとり、尾根稜線と平行する墓壙の掘り方は、長楕円形を呈し、長径560cm、短径230cmを測る。周壁は、傾斜をもって壙底に至るが、中位で屈曲する。墓壙底部は、長さ460cm、幅60cmを測り平坦である。検出面からの深さは80cmほどである。この床面に直接木棺が据えられたものと思われるが、はっきりした木棺



- 1. 腐植土と赤褐色粘質砂との混合土
- 2. 赤褐色砂 (地山ブロック含む)
- 3. 赤褐色粘質土 (地山ブロック含む)
- 4. 赤褐色砂 (鮮やか、地山ブロック小さい)
- 5. 暗赤褐色砂 (地山ブロック含む)

第66図 5号墳第1主体部実測図

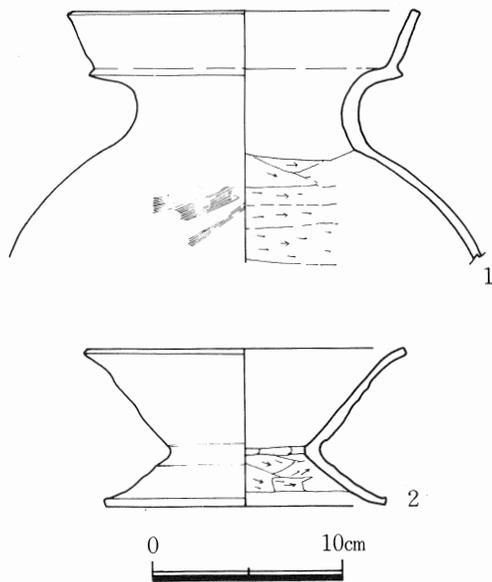


第67図 5号墳第1主体部土器出土状態実測図

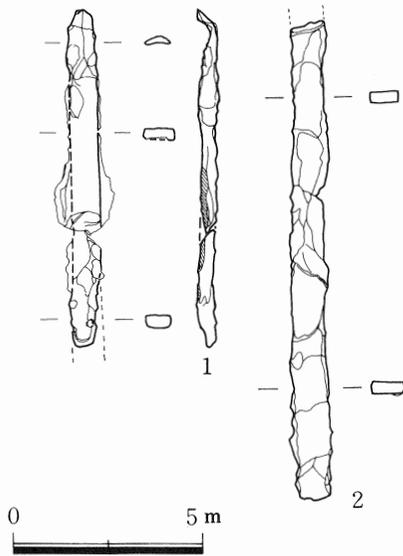
の構造、規模は不明である。しかしながら土層の観察などから幅55cm前後の箱形木棺が埋納されていたと想定することができる。木棺の埋納にあたっての砂や粘土を使用した特別の施設は検出されなかった。

この第1主体部からは、土師器壺、器台、鉈が出土している。土器は、ともに底面から出土しており、転用枕と考えられるものである。

頸部から肩部以下を斜めに打ち欠いた壺は、北西小口から2m程の墓壙底中央で出土した。口縁部を上に向けているが、北西側へ傾いた状態である。器台は、壺から1.1mの距離をおき南東小口からは1.5mの位置で出土している。器台も脚台部の一部を打ち欠いているが、受部を上にして出



第68図 5号墳第1主体部出土土器実測図



第69図 5号墳第1主体部出土鉄器実測図

土している。やはり、北西側へ若干の傾きが認められる。この2点の土器を枕として利用したと考えるならば、少なくとも2体の埋葬が行なわれたことになる。土壙の土層観察からは、1度の埋葬としか考えられず、2体を同時に埋葬したものと推定される。土器枕の傾きで一概に頭位を想定することは危険ではあるが、後に述べる第2主体の頭位とも考えあわせ、南東部に頭位がくるものと考えておきたい。

#### 出土遺物（第68、69図）

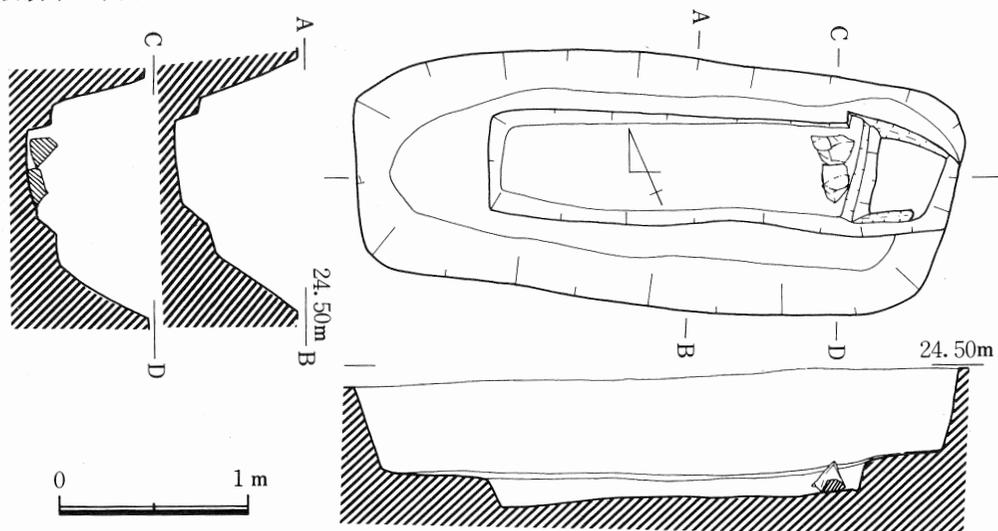
壺（第68図1）は、頸部から肩部にかけて斜めに打ち欠くが、口縁部は完存する。口縁部は頸部から大きく外反して稜を持ったのち、斜め上方に立ち上る複合口縁である。頸部内面はナデ調整をし、肩部以下を横へら削りする。口縁部は内外面とも横ナデで仕上げ、肩部外面にはハケ目が見られる。粗い砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。口径19.4cmを測る。

器台（第68図2）は、脚台部のごく一部を弧状に打ち欠くが、ほぼ完形の鼓形器台である。低くハの字形に開く脚台部と大きく外反する受部を持つが、くびれ部には稜を持たない。脚台部内面をへら削りする他は横ナデ調整によって仕上げる。淡赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。受部径17.7cm、くびれ部径8.1cm、器高8.6cmを測る。

鉈（第69図）は、原位置で検出することができなかった。また、接合することができなかったため、図では、分けて示してあるが、本来は同一個体と考えられる。1は、先端部であるが、刃部が折れ曲っている。刃部の断面は半月状を呈し、刃部から茎基部へは、スムーズに移行する。断面は長方形を呈する。一部図の斜線で示した部分に布目が残る。2は、1の茎基部と思われ、残存長12.9cmを測る。断面は長方形である。

#### 第2主体部（第70図）

墳頂部の東側に位置する長さ325cm、幅135cmの隅丸長方形を呈する2段に掘り込まれた墓壙であ



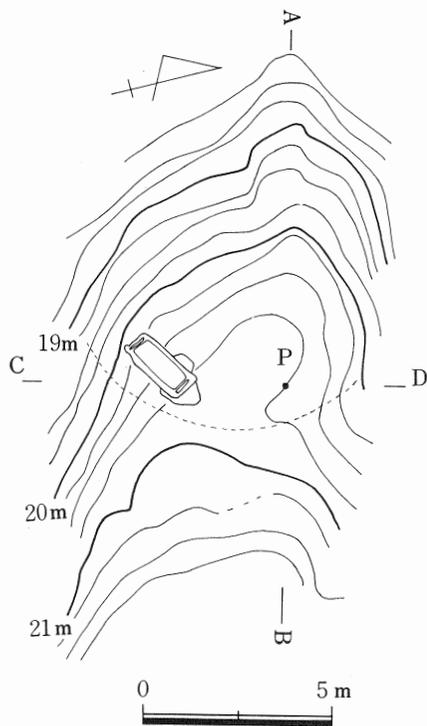
第70図 5号墳第2主体部実測図

る。2段目の墓壙は長方形を呈し、上縁で長さ205cm、幅60cm、底部で長さ180cm、幅45cmを測る。深さは検出面から65cmを測り、2段目の墓壙は15cm程の深さを持つ。壙底は北及び西側に傾斜し、それぞれ5cm、10cmの高低差を測ることができる。東小口部から角礫2個で組んだ石枕が検出された。人頭大の角礫の平らな面を利用して浅いV字形を作る。また、石枕を検出した小口部には、壙底と墓壙上段のテラス部に浅い溝を認めることができる。後者は、壙壁に向かってややすぼまる。この溝を棺材固定のためのものだと考えるならば、この第2主体部には組み合せ式の木棺が納められていたものと考えられる。なお、埋葬頭位は石枕の存在から東小口部にあったものと考えられる。第2主体部からの遺物の出土は確認されなかった。

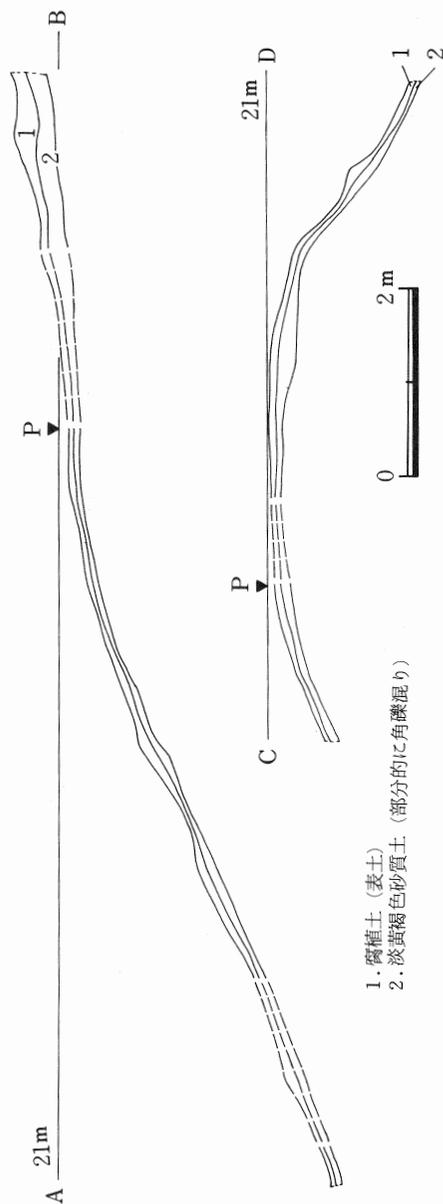
## 2. 倉見6号墳

### 位置と墳丘 (第71、72図)

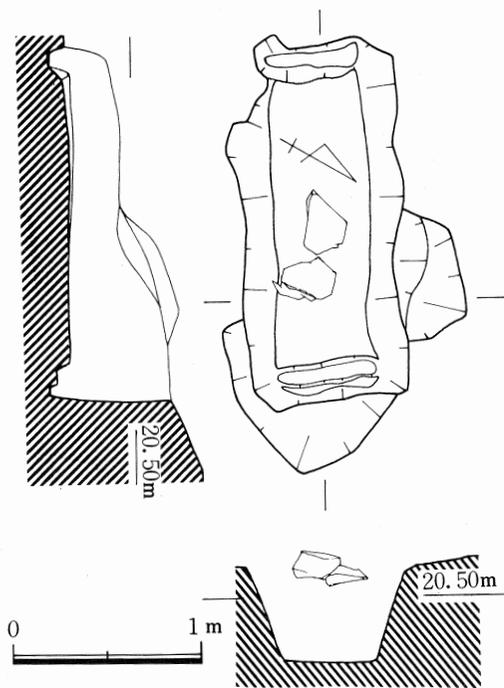
支稜の最先端部に位置し、尾根はこの古墳から傾斜を増して湖山池岸に落ちる。調査前の墳丘は、狭い舌状のテラスが認められただけであった。墳丘の遺存状態は極めて悪く、明確な墳丘を検出することができなかったが、北側斜面上に地山を掘削した周溝



第71図 6号墳調査後墳丘実測図



第72図 6号墳墳丘断面図



第73図 6号墳主体部実測図

の一部を検出している。墳丘は、5号墳同様、地山の削り出しと盛土によって築かれていたものと想定できるが、表土を剥ぐと地山が現われ、盛土は検出することができなかった。一応、径10m前後の円墳であったと推定しておきたい。

#### 埋葬施設（第73図）

想定される墳丘の南東端から検出された組み合わせ式木棺を納めたと考えられる主体部である。北側壁と東側小口部の上面でやや不整を呈するが、長方形に掘り込まれる。墳丘の流失にともなって南西部分の壙壁が失なわれ、正確な規模を測ることが出来ないが、長さ2m、幅0.8m程度の規模と考えられる。残存する壙壁は、角度をもって壙底に至り深さ55cmを測る。壙底の両小口部には、小口板を固定した深さ10cm程の溝が認められるが、東小口部は2段に掘り込まれる。これらのことから

本主体部に埋納された組み合わせ式木棺は、長さ170cm、幅45cm程度の規模を持つものと考えられる。本主体部からは、上面で標石とも考えられる角礫が出土しただけで、他の遺物は出土していない。

### 3. 土 壙 墓

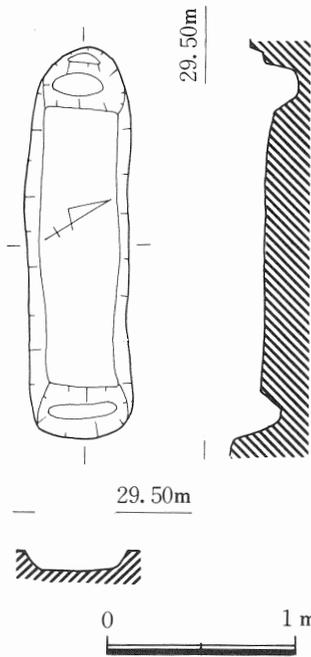
D地区からは、7基の土壙墓が検出された。いずれも地区の最高所から5号墳に至る稜線上から検出されたものである。D地区もC地区同様表土を剥ぐと地山が現われ、土壙墓は、この地山に穿たれる。D地区の土壙墓は、構造や主軸のとり方からSK114～117の4基とSK118～120の3基の2群にグループ分けすることができる。

C地区の土壙墓群と同様に、D地区も土壙内外からの遺物の出土は少なく、唯一SK119から弥生時代後期後半の所産になると考えられる甕2点が出土したのみで、他の土壙からの遺物の出土はみられなかった。また、これらの土壙を区画する溝などは検出されていない。

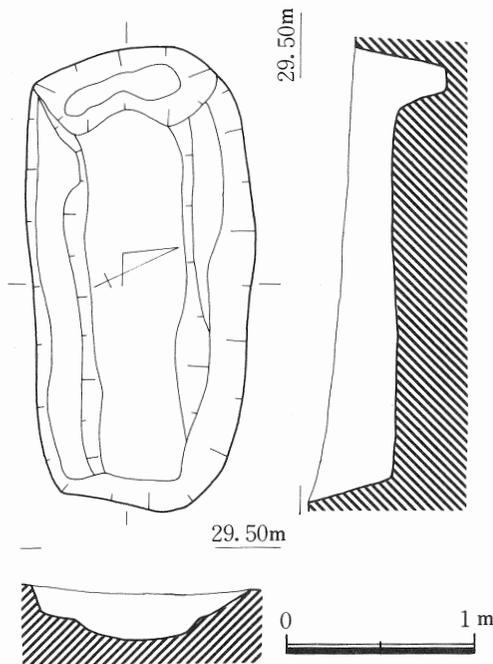
D地区の土壙墓群の営まれた時期であるが、SK119の出土遺物から考えるならば、弥生時代後期後半の前後と推定される。

#### SK114（第74図）

D地区の東南端から検出された木棺墓である。SK115に隣接する。尾根の稜線に平行して、長軸を北西から南東にとる長楕円形の木棺墓である。墓壙の両小口は、一段深く掘り込まれており、組み合わせ式の木棺がおさめられていたことを知ることができる。底面は長方形を呈し平坦であるが



第74図 SK114実測図



第75図 SK115実測図

南東端がやや高く反対に北西端はやや低くなる。墓墳の規模は掘り方上面で長径210cm、短径55cm、底面の長さ150cm、幅43cmである。検出面から墓墳底までの深さは18cmを測り、両小口の深さは、ともに墓墳底から12cmを測る。想定される木棺は組み合せ式で長さ170cm、幅40cm程度である。

#### SK115 (第75図)

D地区の南東端に位置し、SK114、SK116に隣接する。また、SK117と切って作られている。隅丸長方形を呈し、長さ244cm、幅116cmを測る。2段に掘り込まれ、墳底はゆるく湾曲し舟底形の断面を呈する。北西小口部には、深さ25cmのやや屈曲した小口穴が検出されている。検出面から墳底までの深さは南東小口部で45cmを測る。この土墳も組み合せ式木棺が納められていたものと考えられる。

#### SK116 (第76図)

SK115の南西に隣接する長さ232cm、幅90cm、深さ23cmの土墳である。平面形態はややくずれた隅丸長方形を呈する。底面

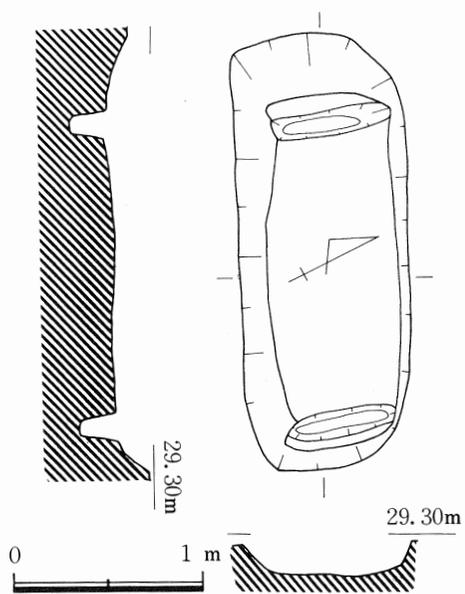
の規模は、長さ192cm、幅70cmを測るが、両小口部には、深さ20cmの小口穴が見られる。埋納された木棺は、組み合せ式で長さ160cm、幅60cm程度のものであったと考えられる。

#### SK117 (第77図)

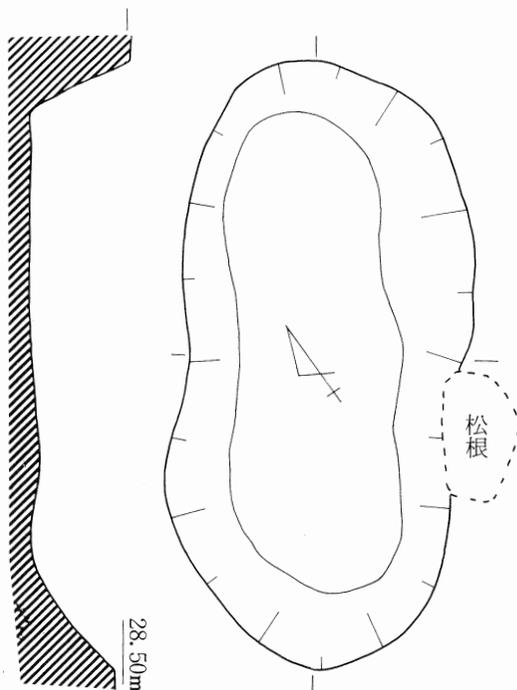
SK115に切られ、土墳の南西半を失なう。主軸を北東から南西にとり、SK114~116とは直交する。長方形を呈し、長さ211cm、幅84cm、深さ23cmを測る。残存する墳底は平坦で、長さ193cm、幅68cmを測る。北東小口部には、深さ8cm程の小口穴が見られるが、長さは35cmと、墳底幅の約半分である。本土墳にも組み合せ式の木棺が埋納されていたものと考えられる。

#### SK118 (第78図)

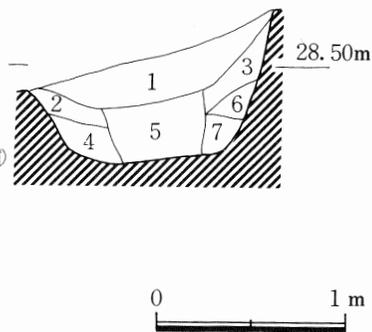
D地区の標高29m付近から検出された土墳である。主軸を北東~南西にとり、尾根稜線と直交する。平面形態は長楕円形を呈し、長径324cm、短



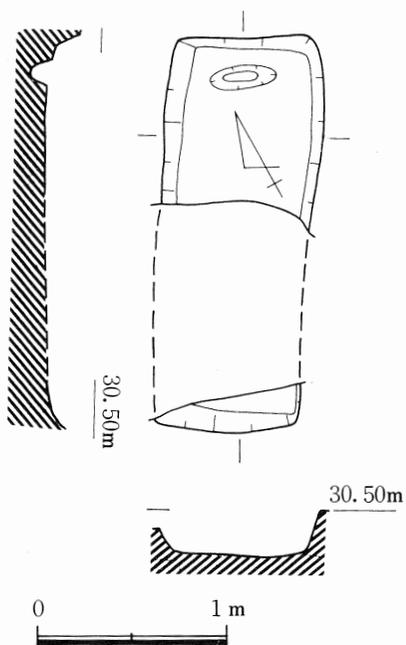
第76図 SK116実測図



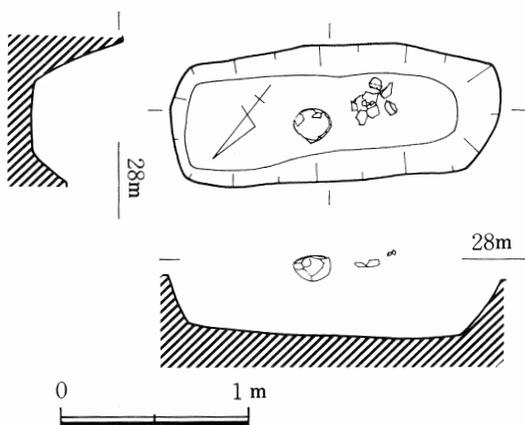
1. 淡褐色シルト (灰白色礫混り)
2. 灰褐色シルト
3. 淡褐色シルト
4. 淡褐色シルト (灰白色礫混り) 1より明るく軟質
5. 黄褐色シルト (灰白色礫混り)
6. 灰褐色シルト (灰白色礫混り)
7. 淡褐色シルト (灰白色礫混り) 1、4より硬質



第78図 SK118実測図

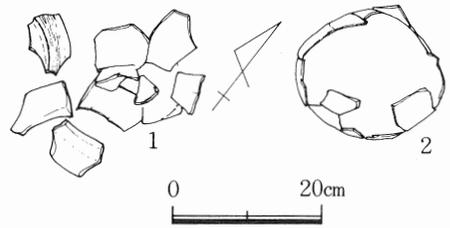


第77図 SK117実測図



第79図 SK119実測図

径 150cm、深さは尾根上部から 70cmを測ることができる。底面も楕円形を呈し、おおむね平坦であるが、南西に向かって傾斜する。横断面の観察によれば、幅50cm程の木棺痕と考えられる土層が認められる。このことから本土壙には、長さは確認できないが、幅50cm程度の箱形木棺が埋納されていたものと考えられる。

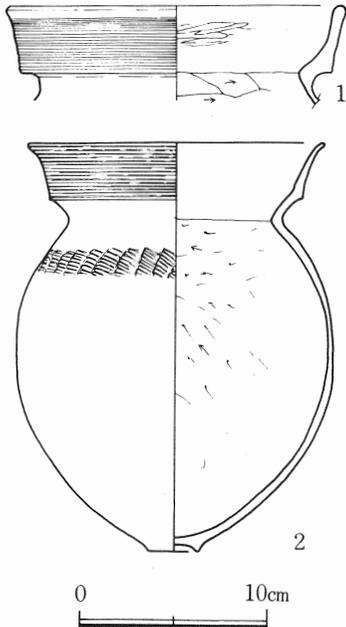


第80図 SK119遺物出土状態実測図

**SK119** (第79、80図)

SK118 から北西に約 2 m 離れ、標高 28 m ライン上に位置する。平面形は、やや隅が丸くなる長方形を呈し、主軸を北東から南西にとり尾根稜線に直交する。規模は、長さ 175 cm、幅 72 cm、深さ 49 cm を測る。壙底は、北東から南西に約 7 cm の高低差をもって傾斜するが、平坦に作られており、長さ 143 cm、幅 40 cm を測ることができる。本土壙も SK118 同様に箱形の木棺が納められていたことが想定される。

土壙上面から供献されたと考えられる甕 2 個体が出土している(第81図)。1 は、かなりの破片数があったが接合できず口縁部だけの実測となった。複合口縁を呈し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部外面にはくし描き平行沈線をめぐらし、内面は横へら磨きする。頸部以下は横へら削りを施す。2 は土壙のほぼ中央部から、立った状態で出土している。最大胴径を中位に置く体部を持ち、口縁部は外反する複合口縁を呈し、端部で更に外反する。高台状を呈する小さな底部を持つ。口縁外面

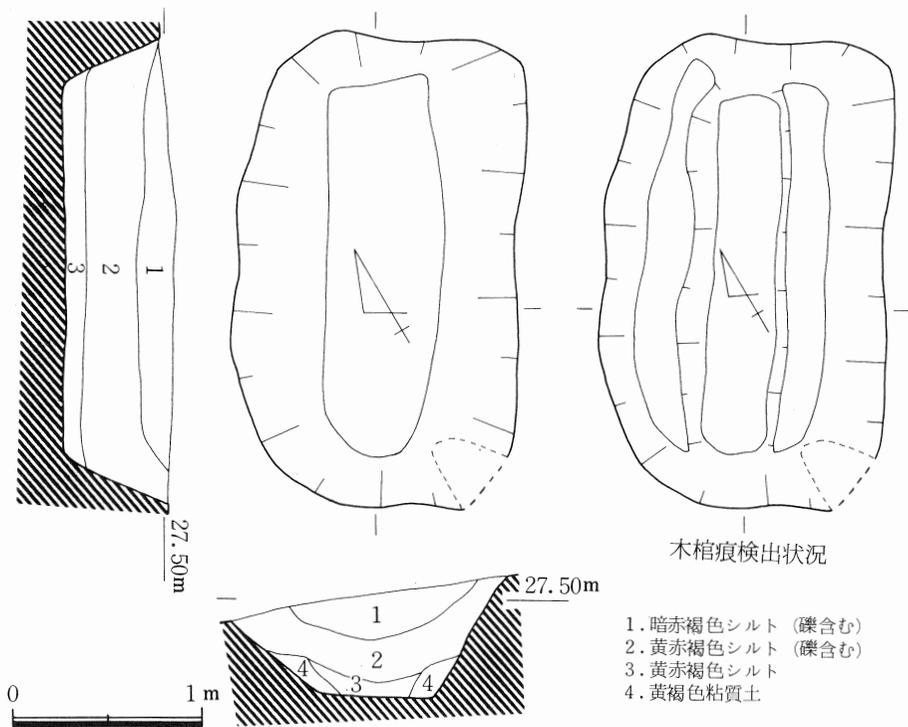


第81図 SK119出土土器実測図

をくし描き平行沈線がめぐり、肩部には刺突文をめぐらす。口縁部内面は剥落のため不明であるが、口頸部を横ナデ調整する。体部の調整は、内面上半をへら削り、下半を下位からのタテへら削りしたのちナデを施す。外面は、ハケ目調整のちナデを施す。全体としてていねいな作りである。胎土は 2 ~ 3 mm の石英等の砂粒を多く含み淡褐色を呈する。なお、底部は加熱により赤変するとともに底部内外面には煤状の炭化物が附着する。

**SK120** (第82図)

D 地区土壙墓群の北西端に位置する隅丸長方形を呈する土壙である。規模は長さ 251 cm、幅 150 cm、深さ 65 cm を測る。主軸は、北東から南西にとり尾根に直交する。壙底は長さ 199 cm、幅 61 cm を測り平坦である。この壙底に箱形の木棺が置かれたことが断面観察などから推定することができる。木棺の規模は長さ 190 cm、幅 35 cm 程度のものであったと思われる。

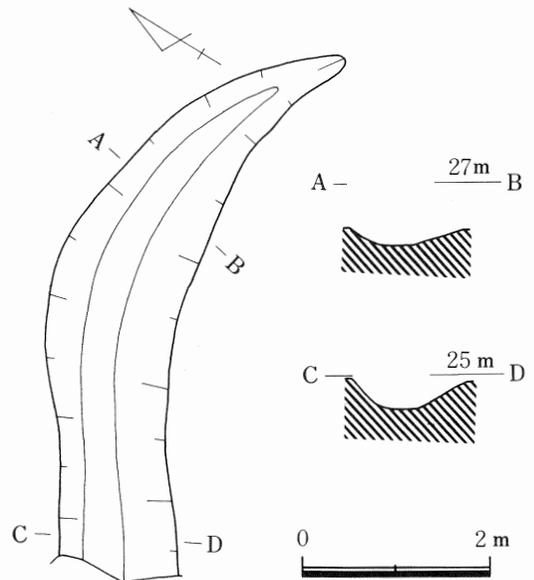


第82図 SK120実測図

#### 4. 溝状遺構

D地区中央部の南西斜面で検出した溝(第83図)は、谷側から尾根斜面を斜行して登り、先端部は稜線と平行となって消える浅い溝状遺構である。断面で見る底部は平坦である。谷側の調査区域外は未調査であるが、全長7m弱、最大幅1.4m、深さ0.35mを測る。この溝からの遺物の出土はなかった。

この溝状遺構の性格、時期ともに不明ではあるが、今回の調査で検出した弥生時代～中世の土壙墓群への墓道としての機能についても考慮する必要があるだろう。



第83図 SD03実測図

## 第Ⅳ章 ま と め

発掘調査の結果、本報告にかかる西桂見遺跡西半部は、5基の古墳と21基の土壙墓、17基の中世墓を中心に構成される遺跡であることが判明した。ここで、今回の発掘調査が提起した若干の問題に触れてまとめたい。

### 第1節 倉見古墳群の調査について

今回調査した倉見古墳群の5基の古墳は、湖山池東岸に突き出した丘陵上に立地する。2～4号墳の3基は、ほぼ標高30～35mの主稜線上に築造され、5、6号墳は、標高20～25mの支稜突端に位置する。5基の古墳は、ともに円(形)墳と考えられるが、すでに調査の経過等で述べたように工事で削平等によって良好な遺存状態を保つ墳丘は、5号墳1基のみであった。

まず、墳丘についてまとめておきたい。本文中に図示することができなかったが、3、4号墳にはそれぞれの古墳を画する溝状遺構が検出されている。溝状遺構は、直線的に掘削され、両端はハの字状に開き墳丘を全周するものではない。他にテラス状の加工、列石等の施設をもって墳丘を画した痕跡も認められず、このため現状では墳丘基底線は明確ではない。しかしながら3、4号墳は、溝状遺構の形状からも墳丘を円形に築造しようとした意志は認められる。4号墳では旧地形下位に当たる北西部において50cm程度の盛土が認められており、地山の削り出しと盛土によって墳丘が築かれたと考えられる。3号墳は、削平によるものか盛土は確認されていないが、主稜線頂部に位置するという3号墳の地形的な特徴から考えれば、盛土を使わず地山の削り出しによって墳丘を整えたとすることの方が妥当であろう。

5号墳の墳丘は、基本的に4号墳の築成方法と同様であるが、細部でより丁寧な整形を行なう。尾根上部での溝状遺構によるカットは、深くかつ広く掘削し、墳丘を円形に削り出す。また、尾根下方に当たる北西部分は、盛土と削り出しによって墳形を整えるとともにテラス状に加工し墳裾とする。これらのことから5号墳は、3、4号墳に比較して墳丘を円形に築造する明らかな意志を見とることができる。

埋葬施設は、2号墳を除く各古墳から検出され、5号墳からは2基検出されている。5基の埋葬施設とも木棺を埋納したと考えられる土壙墓である。6号墳主体部は、小口穴を持つことから組み合せ式の木棺と考えられ、石枕を検出した5号墳第2主体部も箱形の組み合せ式木棺であると推察される。3号墳及び5号墳第1主体の墓壙は、ともに中位でやや段を持って掘り込まれた比較的大きい掘り方を持つ。4号墳主体部の墓壙も壙底の形状から同様の掘り方であったと考えられる。3、4号墳及び5号墳第1主体部の壙底長は、それぞれ3.6m、4.9m、4.6mを測り、壙底はおおむね平坦である。棺は、この墓壙底に埋置されたものと考えられ、土層の断面からは2m前後の箱形の木

棺と考えられる。本古墳群で検出された3.6~4.9mもの長い墳底を測り木棺を納めた墓壙は、現在のところ鳥取県東部では桂見2号墳第1主体部<sup>(1)</sup>(5.5m)が知られているだけである。東隣の但馬では豊岡市立石106号墳<sup>(2)</sup>(4.2m)、豊岡市北浦18号墳<sup>(3)</sup>(5.14m)、和田山町城ノ山古墳<sup>(4)</sup>(6.43m)などが知られており、ともに古墳時代前半期の古墳である。本古墳群では確認し得なかったが、但馬例では仕切り板によって複数の室を作った長大な木棺を想定している<sup>(5)</sup>。なお、豊岡の2例はともに土師器転用枕を伴っており興味深い。

本古墳群の棺内施設として枕が検出されている。いわゆる土師器転用枕<sup>(6)</sup>(以下「転用枕」)と角礫を利用した石枕で、いずれも造りつけのものではない。「転用枕」は3、4号墳主体部及び5号墳第1主体部から検出されたが、5号墳例は器台、壺と2個体検出されている。石枕は5号墳第2主体部のみである。計3主体4例の本古墳群「転用枕」を器種別に分けるならば、器台3、壺1となる。器台はいずれも器受部を上にして、壺もまた口縁部を上に出土している。これまで枕として利用された壺甕類は、すべて打ち欠いた胴部によって被葬者の頭部を受けたと考えられる状態で出土しており、5号墳第1主体部の検出状態は異例に属する。壺の打ち欠きは無論であるが、器台についての打ち欠きの有無を見ると3号墳例は、器受部、台脚部の双方を、4号墳例は保存状態が悪くはっきりしないが器受部を打ち欠いていたものと思われる。5号墳出土器台は、台脚部の一部を打ち欠く。

「転用枕」については、米子市青木遺跡の報告のなかで初めてまとめられて以後、瀬戸谷皓氏<sup>(7)</sup>の一連の研究<sup>(8)</sup>があり、詳細に分析されている。氏は29古墳32例をあげて、4世紀後半代から5世紀にかけて鳥取県東中部を中心として周辺地域に見られる在地性の強い葬法であり、箱式石棺とともに用いられることが多く、また、使用器種は器台が多いが時期の下降にしたがって高杯、壺、甕を加えてゆくとし「一山陰の色彩を色濃く持った在地的な特異な葬法である<sup>(9)</sup>」とされた。氏の研究によって「転用枕」については論じつくされた観もあるが、本古墳検出例を含めて若干気のついた点を述べておきたい。

これまで鳥取市域で知られる「転用枕」は、5古墳7例<sup>(7)</sup>であり、埋葬施設との関連で見るとすべて箱式石棺であった。本古墳群の「転用枕」が木棺での初見となったわけである。これまでの鳥取市域での「転用枕」出土古墳は、古郡家1号墳3号棺例<sup>(10)</sup>を除いてすべて土木工事などによる不時発見による検出例であって、発掘調査によるものでないことに注意しておきたい<sup>(11)</sup>。近年、鳥取市域で検出された「転用枕」を持つ埋葬主体は、本古墳群を除いても約6基<sup>(12)</sup>あり、このうち堅穴石室内に組まれた箱式石棺からの1例<sup>(13)</sup>を除いて他はすべて木棺直葬と考えられる埋葬施設からの検出である。分布域を東に広げた京都府久美浜町権現山遺跡<sup>(14)</sup>の4例も木棺墓であり、今後、木棺墓からの検出も増加するものと思われる。

本古墳群5号墳例は、同一墳丘上の2基の埋葬主体部に「転用枕」、石枕を使いわけ、なおかつ「転用枕」検出主体部は、器台、壺と異った器種を使用する。似たような例は、鳥取市白越山古墳<sup>(15)</sup>、

岡山県鏡野町竹田5号墳<sup>(16)</sup>などに認められ、枕の種類や使用器種について複雑な様相を示しているといえよう。

古墳からの遺物の出土は、大きく分けて墳丘からの出土と墓壙内からの出土に分けることができる。墳丘から遺物が出土した古墳は、3、4号墳の2基である。主に墳頂部から出土しており、区画溝、墳丘斜面からは極くわずかの細片が見られたにすぎず、墳頂部からの転落と考えられる。4号墳墳頂の遺物は、ほぼ主体部直上の位置から人頭大の角礫とともに出土した。壺、高杯、低脚杯、器台で構成される土師器と砥石があり、特に意図的に破砕されたという状況ではないが、これらの上に角礫が乗る。土師器の器種構成を見ると甕が見当たらないことが注意される。これらの遺物は、古墳上（前）でとり行なわれた葬送儀礼に伴う遺物と考えられ、儀礼終了後一括供献されたと考えられる。このような墳墓上からの供献遺物の出土は、弥生時代以降広く認められるところである。鳥取県内でも古墳時代前期の例として米子市日原6号墳<sup>(17)</sup>などが顕著な例として知られている。

さて、棺内からの遺物には、枕として利用された土師器と副葬された鉄器類があり、玉類は出土していない。枕として利用された土師器についてはすでに触れたので鉄器類について簡単に補足しておきたい。鉄器は、「転用枕」と同様に3、4号墳と5号墳第1主体部から出土している。3号墳は鉄剣1、4号墳は鉄銚1、刀子2、5号墳は鉈1といずれも量的には少なく前半期の小古墳の特徴を示している。それぞれの出土状態等についてはすでに述べたが、4号墳出土の鉄銚は、かなり特殊な出土状態であり今一度触れておくことにしたい。鉄銚は、頭位の棺外と考えられる位置から木棺長辺に直交するように検出された。このような位置、状態で副葬するためには柄を取り去るか、切断するしかないと考えられる。鉄銚袋部の観察からは、副葬時に一部でも柄の木質部が存在したか否かについての判断は難しくどちらともいえない。県内での鉄銚の出土例は、管見によれば、鳥取市桂木11号墳<sup>(18)</sup>（赤坂古墳）羽合町長瀬3号墳<sup>(19)</sup>（袋部のみ）、羽合町<sup>そな</sup>坪3号墳<sup>(20)</sup>で知られているのみで、本古墳群4号墳が4例目となる。また、周辺部では松江市金崎1号墳<sup>(21)</sup>、松江市長砂4号墳<sup>(22)</sup>、安木市毘売塚古墳<sup>(23)</sup>、豊岡市七ツ塚7号墳<sup>(24)</sup>、豊岡市見手山古墳などで知られているが、出土の稀な遺物といえる。見手山古墳例は、身の断面が三角形となり、古墳も6世紀中葉の築造とされている。他の古墳は、おおむね4世紀終末から5世紀にかけての築造と考えられている古墳である。倉見4号墳例はこの中でも古い例に入るものと思われる。

ここで本古墳群の変遷と時期について簡単に記しておきたい。本古墳群からの出土土器については前述したとおり、枕として使用された土器及び墳上からの葬送儀礼に使用されたと考えられる供献土器がある。これらの須恵器出現前のいわゆる古式土師器の編年について鳥取県東部では立ち遅れており今だ確定的な案が提出されていないのが現状である。ここでは、秋里遺跡<sup>(25)</sup>の編年を暫定的に利用することで考えておきたい。4号墳頂出土のややまとまった土器は、先の試案に従えば、若干新しい要素を含みつつもⅡ期の範疇に入るものと考えられる。3号墳からの出土土器は、器台だ

けであり微妙であるが、器壁が薄くなることや、調整技法からやや古い要素を持つ。5号墳の出土土器も枕に使用された器台、壺だけであるが、特に器台は、台脚部が低くかつ器形全体が矮小化することからⅢ期とすることができよう。なお、鳥取県内の他地域との関係は、秋里遺跡Ⅱ'が長瀬高浜遺跡Ⅱ期<sup>(26)</sup>、青木遺跡Ⅶ期新段階<sup>(27)</sup>に並行するものと考えられる。これらをまとめると3号墳→4号墳→5号墳の変遷が考えられる。3号墳と4号墳の時期差は4号墳と5号墳程差はないと思われる。2号墳、6号墳については出土遺物がなく、3～5号墳との時間的な関係を判断する資料はない。しかしながら6号墳は、その立地から5号墳より後出と見ることもできよう。これまでの古墳時代の年代観に従えば、おおむね4世紀後半から5世紀初頭にかけてさほど時間を置かず連続して築造されたと考えられよう。

鳥取市域での古墳の調査は、1960年の古郡家1号墳<sup>(28)</sup>の調査以来、いくつかの応急的な調査が実施されたものの組織的な発掘調査は行なわれていない。本市教育委員会においても本報告にかかる倉見古墳群の調査が初めての本格的な調査となった。湖山池周辺の古墳の分布についても、大正13年発刊の『鳥取県史跡勝地調査報告—第二冊一』のための調査以降あまり進展が見られなかった。古墳分布のおおよそが判明したのは1970年代に入ってからであり、県教委主催の県内分布調査<sup>(29)</sup>を契機として多くの古墳が確認されている。この時期に布勢1号墳<sup>(30)</sup>、桝間1号墳などの前方後円墳が発見されている。その後も在野研究者の努力によって古海36号墳（前方後方墳）の発見など、次第に千代川左岸、とりわけ湖山池周辺の古墳分布の様相が明らかになってきている。

千代川左岸の政治的首長墓の系譜は、現在のところ若干の間隙や重複が考えられるものの、西桂見四隅突出型方形墓<sup>(31)</sup>—桝間1号墳—大熊段1号墳—布勢1号墳<sup>(32)</sup>—三浦1号墳<sup>(33)</sup>（琵琶塚古墳）と考えられている。西桂見四隅突出型方形墓を除くこれらの前方後円墳は、おおむね良好に保存され、発掘調査が行なわれていないため、内部主体や副葬品はほとんど知られていない。今後、調査が進むなかで若干の変動の可能性がないわけではない。本古墳群は、墳形、規模からしても明らかにこれら前方後円墳の系譜とは様相を異にするものであり、墳丘や土師器転用枕に見られる地域性を残した古墳といえよう。

湖山池周辺での古墳（時代）研究は始まったばかりであり、本古墳群調査を契機として提起された問題も多種多様である。とりわけ、本古墳群に代表される前期小古墳の評価は、大型前方後円墳との関係性の中で明らかにされなければならないと考える。今後期待したい。

## 第2節 土壙墓群について

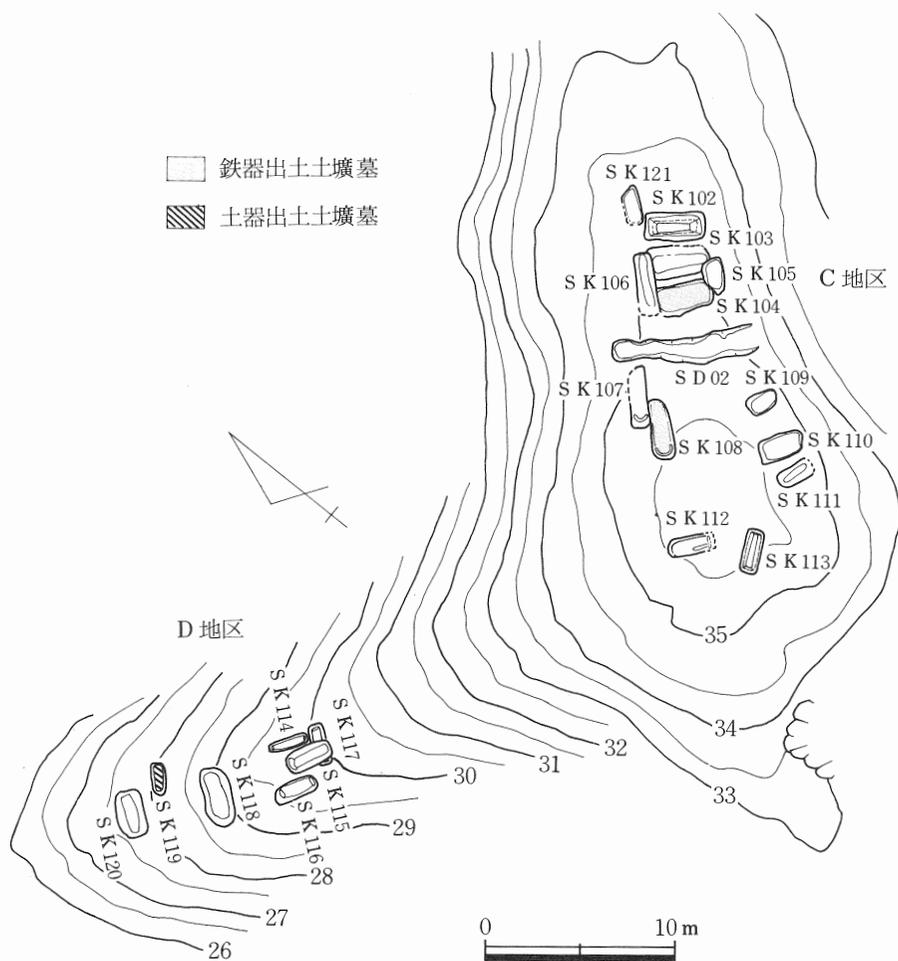
弥生時代～古墳時代に営まれたと考えられる土壙墓は、21基が確認されている。3号墳裾から検出された、須恵器杯を棺内に納めるSK 101を除き、他の土壙墓は弥生時代後期後半を前後する時期に営まれたものと考えられる。

このSK 101を除く20基の土壙墓群は、C地区の標高35m前後の主稜上と、ここから派生するD

地区の支稜上に立地し、大きく2群に分かれて存在する。両群の間にあたる支稜上部にも存在の可能性が考えられるが、当初のトレンチによる調査ではなんら遺構の存在を確認することができなかった。この土壙墓群の立地する稜線上は、比較的広くなだらかで古墳が占地するに絶好の高所であるにもかかわらず、古墳とみなしうる高まりも認められず、調査除外していた地域であった。

20基の土壙墓は、大きくC地区D地区の2群に分けられるが、その中でさらに小群を形成することが認められる。

C地区は、これら土壙墓群と有機的な関係を有すると考えられる溝状遺構SD02によって更に2群に分けられる。すなわち、北東部のSK102~106及びSK121の6基で構成される一群と南西部のSK107~113の7基で構成される一群である。仮に前者をC1群、後者をC2群としておきたい。C1群の6基は密集するが、中央の長さ3m以上の比較的大きな墓壙を持ち、主軸を稜線に直交させる3基と反対に小さな墓壙を持ち主軸を尾根に平行させる3基からなる。この6基の土壙墓



第84図 西桂見遺跡C、D地区土壙墓群配置図

表 6 西桂見遺跡B・C・D地区土壌墓一覧表

名称	規模 (cm)		掘り方平面 形態	推定頭位	出土遺物	備 考	旧 称
	長軸×短軸×深さ 下段は底面 ( )は推定値	木棺の 推定値 長さ×幅					
SK101	122×-×37 107×-	80×35	長 方 形	南	須恵器坏身		BSK07
SK102	318×155×77 292×139	200×60	〃	北 西		屍床を造り出し、四 周に小口、側板痕	C01主体
SK103	(320)×151×38 (310)×137	-	隅丸長方形	北西?			C02主体
SK104	(330)×153×34 -×119	190×110	長 方 形	北 西	刀子	片側に小口穴	C03主体
SK105	198×119×36 176×76	105×-	楕 円 形	不 明			C04主体
SK106	(280)×96×38 (270)×69	265×40	長 方 形	南西?			C05主体
SK107	324×89×36 319×75	290×50	隅丸長方形	南 西		片側に半円形の 小口穴	C06主体
SK108	322×113×43 304×82	250×50	〃	南 西	刀子	半円形の 小口穴とや や湾曲した 小口穴	C07主体
SK109	158×106×32 139×97×	-	〃	不 明			C26主体
SK110	234×133×43 195×111	-	長 方 形	〃			C08主体
SK111	(230)×107×68 178×71	-	〃 ?	〃			C09主体
SK112	(270)×97×27 (330)×79	200×50	隅丸長方形	北 東		小口穴、側板溝 それぞれ片 側に残る	C11主体
SK113	241×92×40 209×76	195×43	長 方 形	北 西		屍床を造り出し、 四周に小口、 側板痕	C10主体
SK114	210×55×18 150×43	170×40	隅丸長方形	不 明		両端に小口穴	C15主体
SK115	244×116×45 197×50	210×50	〃	北 西		片側に小口穴	C12主体
SK116	232×90×23 192×70	160×60	〃	不 明		両端に小口穴	C13主体
SK117	211×84×23 193×68	-	長 方 形	〃		片側に小口穴	C14主体
SK118	324×150×70 316×108	-×50	長楕円形	〃			C16主体
SK119	175×72×49 143×40	140×40	隅丸長方形	北東?			C17主体
SK120	251×150×65 199×61	190×35	〃	不 明	甕2		C18主体
SK121	206×89×22 196×72	-	〃 ?	〃			C20主体

のなかで遺物を出土した遺構はSK104のみで比較的大きな刀子が出土している。6基のうち、4基に掘り方の切り合いが認められ、土層の観察からは、SK103→SK105→SK104→SK106の時間的な序列が与えられる。特異な墓壙を持つSK102がこの序列のどこに入るか不明であるが、いずれにせよ、この6基の土壌墓が墓域を共有し、中央の3基の土壌墓を中心して一定のまとまりを持つ小群であることは間違いないものと考えられる。この場合、切り合い関係で見たとおり、中心

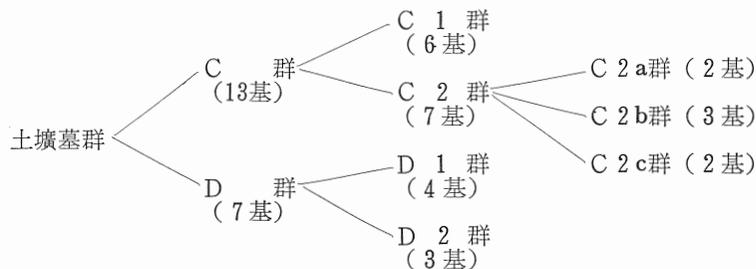
部のやや優位にある3基の土壙墓が連続して作られるのではないことに注意しておきたい。このことは、墓域内における占拠が、時間的な優位性だけで決定されたものではないことになる。しかしながら、墓壙の大小イコール被葬者の優劣ではない訳であり、今後の検討課題といえよう。

C2群の7基は、C1群と異なり密集せず、墓壙の構造や主軸の方位などから更に2～3基の小群に分かれる。SK107、108(a)、SK109～111(b)、SK112、113(c)の3つのグループである。aのグループは、主軸を南西～北東に向け墓壙も湾曲した小口穴を穿つことで共通する。bは、3基からなり、主軸を北西～南東の方向にとり、墓壙の構造から箱形の木棺を納めていたものと推定される。SK112、113は主軸方位が異なるため、やや躊躇する面もあるが、ともに箱形の組み合わせ木棺を埋納したと考えられる痕跡を墓壙に持つ。このC2群の土壙墓群のうち遺物を持つ土壙墓はSK108だけであり、また、切り合いもないため、各土壙墓間、グループ間の時間的な差異について触れることができない。墓壙（木棺）からの編年作業の可能性は残されており、今後の課題となると思われる。ここでは、大きな時間的な隔たりはないものと考えておきたい。このC2群の中心部は大きく空白部となっており非常に奇異な感じを受ける。この部分からは、越前焼の大甕を棺とした中世墓が検出されているが、発掘調査時の精査にもかかわらず、当該期の土壙墓は検出することができなかった。流失や削平の可能性も考えられるが、当初から存在しなかったものと考えられる。

D地区の7基の土壙墓についてもSK114～117の4基の一群とSK118～120の一群との2群に分かつことが可能である。SK114～117の一群（D1群）の4基は、すべて小口穴を持つ土壙墓で、密集して営まれる。4基の土壙墓からは、遺物が出土していない。切り合いを持つ土壙があり、SK117をこの小群で最大の規模を持つSK115が切る。この2基の前後関係は明らかであるが、他の土壙墓との関係については不明である。

SK118～120の3基の小群（D2群）は、いずれも主軸を南西～北東にとり、尾根稜線に直交する。墓壙には特別な木棺埋納痕を残さないが、断面観察から箱形の木棺を埋納していたものと考えられる。最も小さいSK119の土壙上面から、この土壙墓に供献された甕2点が出土している。この甕は、弥生時代後期後半の所産と考えられる。

以上述べてきた群構成をまとめると次のようになる。



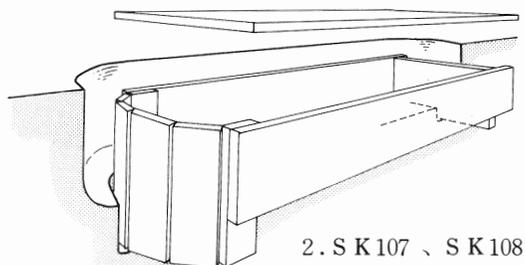
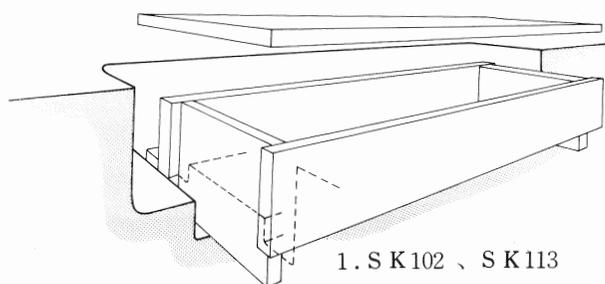
今回検出された17基の土壙墓の構造は、多種多様であるが、大きく分けるならば、小口穴、側板溝などの木棺材固定のための施設を持つものとそうでないものに分類することができる。しか

し、いずれの土壌墓も木棺を埋納していたであろうことはすでに本文中でも述べてきたとおりである。このなかで、SK102、113に見られるレリーフ状の屍床を回む組み合せ式木棺の例やSK107、108の湾曲した小口穴を持つ組み合せ式木棺の検出例は少ないものと思われる。

SK102は、墓壇底に、地山を丁寧に削り出した屍床を造り出し、両小口部には小口穴を掘り込む。木棺はこの屍床を囲むようにして組まれるが、棺材に合わせて、当初掘られた屍床の削り直しや小口穴の深さなどの調整を行なったものと思われる。

平面的に湾曲した小口穴を持つ土壌墓は3基(SK107、108、115)認められるが、ここではSK108について考えてみたい。土壌の幅などから頭位と考えられる小口部には、深く湾曲した小口穴が見られ、対置する足元側の小口部には直線的な小さな小口穴を持つ。このU字形に湾曲した小口穴に入る小口板は、1枚板を考えるならば、かなり大きな(直径0.8m前後)輪切りの丸木を外面に残してくり抜くなどの方法によって作製されたものしか考えられず、複数の棺材を考えざるを得ない。この場合、丸太、竹等の素材も考えられるが、ここでは板材5枚を桶状に並べた小口部を想定した(第85図2)。なお、側板は、側板溝が存在せず、埋め戻し時の倒壊も考えられることから、湾曲した小口板部の外側に組まれたものと思われる。

本土壌墓群に見られる墓壇(木棺)形態の差異について多くのバラエティーが認められることについてはすでに述べた。本土壌墓群が先に検討したように短期間に形成されたものとするならば、この差異を時間的な要因のみに帰することはできず、他のたとえば被葬者の階層、性別、出自など



第85図 木棺想定図

の要因をも考慮する必要がある。弥生時代の木棺遺存例は、山陰地域では知られていないが、大阪湾岸の田能遺跡<sup>(34)</sup>、瓜生堂遺跡<sup>(35)</sup>等々では低地の方形周溝墓等から、木棺そのものの検出が増加しており、各種の木棺形式が知られるようになっている。しかしながら、本遺跡の土壌墓から想定した2種類の木棺は知られていない。SK102の掘り方は、箱式石棺の掘り方との類似性を指摘することができるが、今後の類例の検出が期待される。

これらの土壌墓群及び土壌墓群に伴うと考えられる溝状遺構から出土した遺物は極くわずかである。溝からの遺物の出土状態を見ると本来溝底に置かれたもの

でなく、転落ないし流れ込んだ遺物と考えられる。このことから、本来は、墓壙上に供献されていた土器類があったものと考えられるが、土砂の流失や中世墓造営時の削平などによって失なわれたものと思われる。遺物は、墓壙内から出土した鉄器と墓壙上面及び溝状遺構から出土した弥生式土器がある。土器はすべて口縁部外面にくし描き平行沈線を施す甕形土器で他の器種は見られない。第61図2のSD02から出土した甕は図ではくし描き平行線が入っていないが、これは剥落が激しいためで、口縁部内面のカーブや器厚、胎土から他の甕と同様に、外面にくし描き平行沈線を施す一群の土器と考えられる。鳥取県東部での弥生土器の編年作業は、一定の資料の蓄積はあるものの、1978年の大柵遺跡発掘調査成果からの後期を中心とする試み<sup>(36)</sup>以後進展が見られず、本土壙墓群出土土器の位置付けについてもやや流動的な面もあるが、弥生時代後期後半（終末期）の幅の中で考えておきたい。類似の一括土器を出土した遺跡として大柵遺跡<sup>(37)</sup>（第1次、SK015）、古海遺跡<sup>(38)</sup>（SK06）などの千代川左岸の遺跡をあげることができる。なお、青木遺跡の編年案<sup>(39)</sup>に従えばⅢ期新段階の範疇に入るものであろう。

以上、20基で構成される西桂見遺跡の土壙墓群について長々と注記的に述べてきたわけであるが、遺物の出土量が極めて少なく、各土壙墓間はもとより各小群間の関係についても明確な時期、性格を明らかにして提示することができなかつた。以下、これまでに述べきれなかつたいくつかの点を補足し、本土壙墓群の意義について簡単に記して本節のしめくくりとしたい。

本墳墓群は、わずかな土器の出土ながら弥生時代後期後半（終末期）を前後する時期（古墳時代初頭を含む）に形成されたものと考えられる。本墳墓群の小群構成についてはすでに述べたとおりであるが、これら小群を区画する遺構としては、溝SD02が検出されただけであり、他に溝、盛土、テラス状の削り出し、列石、貼石といった墓域の区画を意図するような施設は見出し得なかつた。覆土の流失、中世期の削平の可能性も考えられるが、これら施設の有無にかかわらず、本土壙墓群は、その構成から明らかに墓域を設定する意志が存在していたものと思われる。C2群の空白地については、豊岡市立石墳墓群に同様の例があり調査者によって指摘もされている<sup>(40)</sup>。C1群の土壙墓について、その切り合いから築造順について記したが、一定の墓域内での墓壙の築造は中央部から最初に行なわれなければならないとは考えられず、墓域内での占地については他の規制が働いていたものと考えられる。C1群の空白地については現在のところ、中央部に葬られるべき人物による墓域の設定が行なわれ、次々と周辺部の埋葬が行なわれたが、本来中心部に葬られるべき人物の共同体内での質的な変換・転化によって墓域の放棄がなされたものと想定しておきたい。いずれにせよ、墓域内での墓壙の築造順位の正確な把握の中で解明されていかなければならない問題であるといえる。

本土壙墓群の築造された時期の墳墓と集落の立地的な関係性については、日本海沿岸地域に限れば石川県金沢市七ツ塚墳墓群<sup>(41)</sup>、京都府大山墳墓群<sup>(42)</sup>で確認されているように、集落の後背丘陵上に築造されていることが多いようである。湖山池周辺では本墳墓群の対岸に位置する湖山第2（三浦団

地)<sup>(48)</sup> 遺跡からはほぼ同時期の竪穴住居址が検出されている。しかし、本土壙墓群の被葬者の住居地とするにはやや離れているきらいもあり、現在の西桂見（倉見）部落周辺などの本丘陵縁辺に築造集団の集落址を考えたい。

さて、これまで調査の概要と本節で述べてきたように、世帯共同体を構成する血縁的な家族を被葬者とする家族墓的な様相を呈する本土壙墓群であるが、湖山池周辺の当該期の遺跡についても概観しておきたい。湖山池周辺の弥生時代後期～古墳時代前期に営まれたと考えられる遺跡は、東から、古海遺跡<sup>(43)</sup>、岩吉遺跡<sup>(44)</sup>、大桝遺跡<sup>(45)</sup>、布勢（グラウンド）第2遺跡<sup>(46)</sup>、帆城遺跡<sup>(47)</sup>、湖山第2（三浦団地）遺跡<sup>(48)</sup>、松原・谷田遺跡<sup>(49)</sup>が知られており、環湖山池ないし千代川左岸における一定の政治（祭祀）的な意味合いを持つ共同体として組織されていたものと考えられる。この共同体の象徴すなわち主体性の内外への具体的な表現として、高住銅鐸、西桂見四隅突出型方形墓が存在したものと考えられる。本土壙墓群と同時期に営まれた墳墓として、同じ丘陵に立地する一辺約64m、高さ5mを測る最大級の四隅突出型方形墓と、本遺跡から東へ500m離れた東桂見（三谷）部落の背後の丘陵頂部から検出された土壙墓群が知られている。四隅突出型方形墓は、弥生時代墳墓としては最大級の墳丘を持つことと共に、首長権継承儀礼に使用されたと考えられる大形特殊土器の存在から、少なくとも湖山池をめぐる農業共同体の首長の墳墓と考えられる。また東桂見から発見された桂見墳墓群<sup>(50)</sup>中の土壙墓群は、一部石列による墓域の区画がなされ、中心主体と考えられる土壙墓中からは、水銀朱の使用とともにガラス勾玉、碧玉製管玉などの玉類の出土が認められた。この桂見墳墓群中の土壙墓群の詳細は、報告書に譲りたいが、本墳墓群に較べて一層階層分化の進んだ段階を示すとともに、有力な世帯共同体ないしは小地域の農業共同体首長の集団墓と考えられる。弥生時代後期後半に築造されたこれら三者三様の墳墓間相互の関連性については今後の問題としておきたい。

近年、日本海沿岸地域においても古墳発生の鍵を握る弥生時代後期の墳墓の様相が次第に明らかとなってきている。ここで具体的に検討することは省略するが、墳丘（墓域）を方形とすることで各地域とも基本的には一致するものの、墳丘（墓域）の区画に各地域の独自性を見とることができる。北陸、丹後、但馬においては、地山の削り出しを基本とするいわゆる方形台状墓であり、出雲、伯耆、因幡及び中国山地は、四隅突出型方形墓に典型的な列石、貼石をもって区画す墳墓である。畿内地域で優勢な方形周溝墓は、今のところ山陰では確実に弥生時代に遡る検出例が知られていない<sup>(51)</sup>。また、四隅突出型方形墓は、中国山地で発生し、出雲、伯耆を中心とする山陰中央部地域で独自の発展をとげたことが最近の調査・研究で次第に明らかとなってきている<sup>(52)</sup>。このように周辺諸地域の動向の中であって、潟湖である湖山池岸に突如として出現した日本最大の四隅突出型方形墓の築造集団が具体的にどのような政治的、経済的基盤を持ち得たのか、周辺での集落遺跡の系統的な調査が進んでいない現在、明らかにすることができない。しかしながら日本海沿岸の東西両地域の接点に位置する因幡での動向は前方後円墳出現前夜の各地域間の交流を探る上で貴重な存在といえる。また、全長92mの前方後円墳である桝間1号墳に代表される大和連合政権下での千代川

左岸の政治的首長墓の系譜を考える上でも同様なことがいえよう。

ともあれ、やや図式的なきらいはあるものの、本土壙墓群の被葬者は、四隅突出型方形墓に象徴される首長の権力の一端を担って消長した世帯共同体構成員であったと考えておきたい。

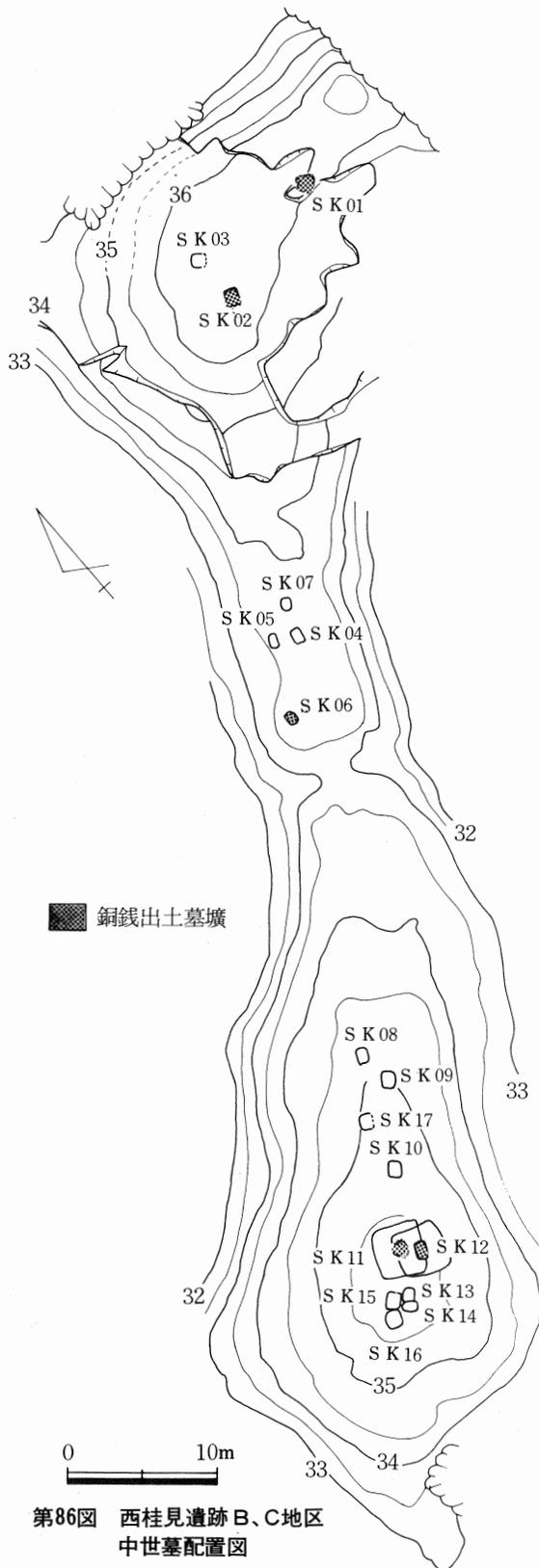
### 第3節 中世墓群について

西桂見遺跡から発掘調査によって検出された中世墓は、先に報告した東地区の8基<sup>(53)</sup>と本報告の17基の合計25基である。本遺跡の東半部の2分の1以上が過去の土砂採取によって削り取られており、本報告にかかる西半の調査においても斜面部の調査が十分になされたとはいえず、西桂見遺跡全体としての総数は当然のことながら増加するものと思われる。ここでは、本報告書に載せた17基について簡単にとりまとめと気のついた点について記しておきたい。今回中世墓とした遺構は、人骨、冥土銭、棺、釘などの遺物の出土によって明らかに埋葬遺構として用いられたものの他、遺物の出土が確認されなくとも、墓壙の形態、規模が遺物の出土によって墓として知られる遺構と極めて似ており、中世墓壙とする蓋然性の高いものを含んでいることを最初にことわっておきたい。

今回報告した中世墓は、すべて主稜線上に立地する。中世墓の立地する丘陵は、標高35m前後、比高差は約30～32mである。眼下に湖山池が広がり、北には砂丘地を越えて日本海を眺むことができる。調査の発端が古墳の調査であったため、斜面部の調査が十分に行ない得なかったことを考慮しても、当初から稜線上の高所に意識的に営なまれたものとするに十分な眺望といえる。17基の中世墓は、この稜線上に比較的散らばり分布するが、4基前後で小群を形成し、一定のまとまりを持っている。

17基の中世墓について、埋葬方法によって分類するならば、いわゆる土葬墓と火葬墓<sup>(54)</sup>に分けられる。炭化物、焼土等の存在によって明らかに火葬墓とすることの出来る墓壙は、SK10、SK12の2基のみであり、他は土葬墓と考えられるが、SK01、SK15についてはどのような埋葬であったか調査によって明らかにすることができなかった。

次に墓壙の平面形態を見ると、長方形（隅丸長方形を含む）を呈する墓壙が10基、他は楕円形ないし円形を呈する。まず、長方形の墓壙について見てみたい。墓壙の平面的な規模は、土葬墓、火葬墓を問わず大きな変化は認められない。墓壙の長さの最大最小は、それぞれ125cmと102cmであり、幅は98cmと65cmである。各墓壙の平均値をとると長さ114cm、幅85cmとなる。このようにして墓壙底面の規模を求めると長さ99cm、幅68cmの平均値を求めることができ、この時期のこの地域での方形墓壙の一般的な規模と考えられる。この墓壙の規模は、本遺跡東半部検出墓壙の釘の出土位置、方向から考察された木棺<sup>(55)</sup>（長さ約90cm、幅約55cm）を十分に納めうる規模である。土砂の流失、遺構の検出時の状況等によって墓壙掘削時の深さは明らかにすることができなかったが、最大の深さを持つものはSK16の81cmであり、土葬の場合にはこれ以上の深さがあったものと考えられる。火葬墓の場合は、火を付け燃焼させるという行為の性格上浅く掘られていたものと思われ、検出され



第86図 西桂見遺跡B、C地区  
中世墓配置図

た2基の火葬墓も、SK10の28cm、SK12の21cmと浅い。

楕円形あるいは円形を呈する墓壙は、7基検出されている。このうち不整形円形をとるSK01及び墓壙内に甕棺をおさめるSK12を除くと、他はすべて楕円形となる。この楕円形の墓壙の規模は、総じて長方形墓壙よりやや小さくなりまた、火葬に付された墓壙は認められない。

中世墓関係の出土遺物には、人骨、銅銭、鉄釘、陶磁器、土師質皿、五輪塔（火輪）などがある。ここで、これら遺物と墓壙の形態について若干考えてみたい。木棺の組み合わせに使用されたと考えられる鉄釘は、数量はともかく4基の墓壙（SK02、04、10、12）から出土しており、これらの墓壙には木棺が使用されていたことは間違いないものと考えられる。この4基の墓壙は、すべて長方形の平面形態をとり、土葬墓、火葬墓それぞれ2基ずつとなる。また、楕円形の墓壙からの釘の出土は、前回報告分も含めて西桂見遺跡の中世墓からは知られていない。かなり大雑把で飛躍する点もあるが、長方形の墓壙には木棺が利用され、楕円形の平面形態をとる墓壙は、直葬ないし、桶に類する棺が利用されたものとも考えられる。この場合、長方形墓壙10基に対し釘の出土した墓壙が4基であり釘の出土していない墓壙をどのように考えるか問題となるが、鉄釘の腐朽によるものか木、竹等の釘の使用、柄などの木組による木棺の存在を考えておきたい。いずれにせよ、木棺使用の有無の如何にかかわらず屈葬（座棺）という当時の埋葬方法のもとで墓壙、棺の規模について一定の規格性があつたことを窺うことができるであろう。

次に冥土銭、いわゆる三途の川の渡し賃といわれる銅銭との関係について見てみたい。銅銭の出土した墓塚は、SK01（6枚）、SK02（12枚）、SK06（6枚）、SK11（18枚）、SK12（9枚）の5基である。いずれも6枚を基本として3の倍数となる。この銅銭と平面形態との明確な関連は認められないが、周溝を持つ墓塚にそれぞれ18枚、9枚と他より若干多く副葬しており、銅銭の数量と被葬者の性格についていくらかの関連性は認めることができるものと思われる。

他の遺物のうち土師質皿は、墓前（上）に供献されたと考えられ、表土中からの出土が多い。一点墓塚内（SK09）から出土しているが、一部口縁部を欠き、出土状態からも棺の埋納時の混入した可能性が強いように思われる。

今回報告した17基の中世墓群には、当地域において検出例の確認されていなかった甕棺<sup>(56)</sup>を納めた

表7 西桂見遺跡B・C地区 中世墓一覧表

番号	規模 長軸×短軸×深さ 下段は底面の規模 ( )は推定値(cm)	平面形態	出土遺物	備考	旧称
SK01	115×95×10 85×70	不整形円形	銅銭6	土壌内に角礫	BSK01
SK02	116×82×25 110×75	長方形	人骨、銅銭12、鉄釘6		BSK02
SK03	- ×95×13 - ×55	隅丸長方形			BSK03
SK04	102×65×50 95×58	長方形	鉄釘（約17本）		BSK04
SK05	100×67×25 70×30	楕円形			BSK05
SK06	85×71×30 65×48	〃	銅銭6		BSK06
SK07	85×70×55 65×45	〃			BSK08
SK08	107×77×79 84×66	隅丸長方形		土壌中位で若干ふくらむ	CSK21
SK09	(120)×89×56 (100)×64	〃	土師質皿1		CSK22
SK10	125×89×28 107×67	〃	鉄釘(約11本) 骨片、土師質皿1	火葬墓	CSK24
SK11	118×100×108 76×64	円形	銅銭18枚、越前焼大甕1	甕棺、周溝をもつ	CSK27
SK12	110×73×21 98×61	長方形	銅銭9枚(融着)、鉄釘2、骨片、炭化木材 周溝から土師質皿1、五輪塔(火輪)	火葬墓、周溝をもつ	CSK28
SK13	(110)×79×9 (82)×60	楕円形			CSK29
SK14	107×(66)×18 89×49	〃			CSK30
SK15	113×98×37 96×81	長方形	備前焼大甕1	礫及び大甕片で 土器床を作る	CSK31
SK16	124×95×81 106×84	〃			CSK32
SK17	- × - ×41 (88)×66	隅丸長方形			CSK23

墓壙(SK11)、土器床とも呼ぶべき施設を持つ墓壙(SK15)が検出されている。また、2基(SK11、12)の墓壙には、一辺3m程の方形の周溝を持つ他地域はともかく、山陰地域では類例のない中世墓が検出された。

周溝を持つ2基の中世墓の主体部は、それぞれ甕棺を納めた墓壙と先に検討した火葬された長方形墓壙である。周溝は、他地域に見られる土壇状の遺構同様に墓域を画すために掘削され、巡らされたものと考えられる。この2基の墓壙はともに棺内遺物として銅銭が検出され、外部施設としての周溝の掘削、最高所の占地と相俟って特異な存在とすることができよう。

SK15の備前焼大甕を使用した土器床も類例のない遺構である。本文で述べたとおり、墓としての機能を持つものなのか十分な検討を行っていないが、土壇の形状、また、敷き並べられた土器片が、土壇壁の部分で立っており、本来はいわば土器櫃とでもいう状態を呈していたものとも考えられることから墓として取り上げた。この甕片を復元したところ、若干の欠損部はあるもののほぼ完形に復し得たところから、1個体分の甕片によってこの施設が作られていたことが明らかとなっている。

さて、これまで「中世」墓と記してきた17基の墓壙の営まれた時期について考えてみたい。17基の墓壙のうち年代を推定することのできる遺物を出土した墓壙は少ない。銅銭を出土した墓壙は、5基あるが、銭名を読み取ることの出来る墓壙は4基である。また、墓壙内から土器類を出土した墓壙は3基である。銅銭は、北宋銭を中心に唐の開元通宝、明の永楽通宝で構成される。永楽通宝の初鑄年は1408年であり、永楽通宝を出土する墓壙(SK06、SK11)の上限は15世紀初頭とすることができる。一方、土器類を見るとSK11、15出土の越前、備前の大甕はともに15世紀代の<sup>(57)</sup>所産になるものと思われ、墓壙の掘削された年代も近いものと考えられる。しかし、これら一定の年代推定のなされる墓壙は、いわば特殊な墓壙で、他の多くの墓壙からは年代推定の手がかりとなる遺物が出土していない。しかしながら、この17基の墓壙が群をなし、次に述べる主軸方位の斉一性からも17基の墓壙が15世紀代を中心とする時期に営まれたものと考えたい。また、編年作業が進んでいないが、表土中の土師質皿や五輪塔の年代観とも大きな齟齬をきたさないものと思われる。

17基の墓壙の方位について見ると1基の例外を認めなければならないが、墓壙の形態にかかわらず、長軸をおおむね北東から南西方向に取り、地形的に見るならば主稜線にほぼ平行することが知られる。前回報告した遺跡東半部の墓壙もほぼこのような傾向を示す。良好な人骨の出土がないため、このことによって被葬者の頭位や、方位観は明らかにすることはできないが、いずれにせよ当時の宗教観なり埋葬習俗を示すものと思われる。

以上かなり冗長に記してきたが、今回報告する17基の墓壙は、表7のとおり形態、葬法、出土遺物などに多くのバラエティーを認めることができる。このバラエティー、すなわち個々の墓壙の差異について、時間、階層、性、年齢、死因等々いろいろの要因を考えることができる。しかしながら現在のところ、十分に明らかにすることができない。今後、医学的な研究を含めた自然科学は無

論のこと、文献、民俗学との連携のなかで調査を進めていかなければならないと痛感する次第である。

最後に文献類に記された周辺の中世墓と今回の調査の意義について簡単に記して終りたい。

15～16世紀の湖山池東南岸地域は、因幡の中心地として本遺跡の北東約1 Kmの天神山城には守護所が置かれ、城下町をも形成していたとされる。天神山城は、江戸時代の初め（1688年）に著された小泉友賢の『因幡民談記』によれば、1466年守護大名山名勝豊によって築城され、岩美の二上山城から守護所が移されたとされる。この山名勝豊の築城については異説も多いが、ほぼ15世紀半ば前後には築城、守護所の移転があったものと思われ、その後久松山に移るまでの100余年の間、因幡支配の拠点として天神山城が存在した。本中世墓群の被葬者達もこの天神山城となんらかの関係性を有していたものと思われる。

17世紀後半の江戸時代に入ってから、天神山城及び周辺部を描いた『大幅絵図』『稲葉民談記』所載の「布施城図」などの絵図類が現在残っており、当時の様子をおおむね知ることができる。後者の絵図には、天神山城下の西方の丘陵に地名とともに「葬地」と記した場所も見つけることができる。「弦サシ屋舗」「テヌケカハナ」などの地名がそうであるが、「テヌケカハナ」には「葬地」と記されている。絵図はデフォルメされているが、所載の地名の一つ「ツルサシヤシキ」は字名として現在でも残っており、三谷（東桂見）部落の谷をはさんだ東方の丘陵にあたる。現在の布勢総合運動公園の西を区切る尾根がそれである。「テヌケカハナ」の名を現在みることはできないが、鼻は平野部に突き出した丘陵を指すものと考えられ、『大幅絵図』には三谷村の背後の丘陵に記されている。この「テヌケカハナ」の葬地は、桂見墳墓群の中世墓群を指すものと思われる。少なくとも天神山城の廃棄から100年ほど下った江戸時代にあっても、当時営まれた墓地が「葬地」として認識されていたことを知ることができる。

鳥取県内での中世墓の調査は、古墳等の調査中に偶発的に発見され、調査されることが多く、当初から目的意識的に調査された例は少ない。また、調査件数そのものも少ないと思われる。しかし近年の開発に伴う発掘調査の増加のなかで、いくつかのまとまった調査も行なわれるようになり、資料的な蓄積も除々にではあるが進んできている。鳥取市域においては、本報告におさめたB地区の7基の中世墓が初見であるが、その後、本遺跡東半部（A地区）での<sup>(58)</sup>8基、本遺跡C地区の10基、<sup>(59)</sup>三浦遺跡の3基、<sup>(60)</sup>桂見墳墓群の22基と湖山池周辺での調査事例が増えつつある。この中で、本報告で取り上げた浅い長方形墓壇内で火葬し、埋葬する中世墓の存在がいくつかの地域で知られるようになってきた。米子市陰田遺跡、<sup>(60)</sup>松江市中竹矢遺跡などであるが、現在のところ山陰的な中世墓とすることができるようである。<sup>(61)</sup>

今回の発掘調査も契機は古墳の調査であり、中世墓そのものを目的としたものではなかったが、幸いにも17基の中世墓を検出することができ、当時の葬送习俗の一端を知ることになった。また、今回触れ得なかったが、棺等に利用された越前、備前の大甕は、15世紀段階における商品流通の実

態を如実に示す貴重な資料である。ともあれ、文献史料の少ない因幡の中世史にあって、当時の文化や経済を理解する一つの手がかりとなると思われる。

本報告の最後にあたり、本墳墓群の調査、報告にあたり有形、無形にたずさわってくれた多くの人々に謝辞を述べたい。埋蔵文化財にご理解をいただいた宝和産業の北脇、岡田両氏、調査を担当していただいた小谷先生と今も埋蔵文化財の保護にたずさわる河根、前田両氏、今は、教師として頑張る鳥大歴研の諸君、吹き上げる粉雪の中作業をしてくれたあばさん、あつつあん達、4号墳崩壊当日夜明け前から現場にかけつけてくれた友人達、編者の怠慢とはいえ、短期間での報告書作成に協力してくれた鳥取市教委・遺跡調査団の皆さん、ありがとう。そして最後に現代に生きる我々の身勝手とはいえ、思いもかけぬ移植ゴテの洗礼を受けた本墳墓群の被葬者達に、合掌。

(註)

- (1) 1983年鳥取市遺跡調査団調査、報告書近刊
- (2) 瀬戸谷皓他「立石古墳群発掘調査報告」『兵庫県埋蔵文化財集報第4集』兵庫県文化財協会 1979年
- (3) 瀬戸谷皓『北浦古墳群』豊岡市教育委員会 1980年
- (4) 樫本誠一他『城ノ山・池田古墳』和田山町教育委員会 1972年
- (5) 註(3)文献
- (6) 註(3)文献による用語規定に従う。
- (7) 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 1976年
- (8) 註(3)文献及び瀬戸谷皓「再び土師器転用枕について」『よみがえる古代の但馬』但馬文教府・但馬文化財協会 1981年
- (9) 註(8)文献による。
- (10) 古郡家1号墳調査団「美和古墳群(1)~(2)」『ひすい』No.78~100佐々木古代学研究室 1960~1962年
- (11) 工事関係者は、石棺、人骨等の出土によって古墳と認識することが多く、木棺墓等特別な施設を持たない古墳は、知らぬうちに破壊されたものと思われる。この時期の因幡での埋蔵文化財の状況について在野の研究者である若林久雄氏は、花色恵儀谷古墳の資料紹介(「孟蘭盆に消えた古墳」『日本海文化を考える会・会報』No.2-1983年)の中で鬼哭啾啾という言葉で現し「1970年代にあってなお、因幡地方では、墓壊し(埋蔵文化財破壊)が日常平然と行なわれていました」と記している。
- (12) 1983年及び1984年の鳥取市教育委員会による生山古墳群の調査(『鳥取新都市埋蔵文化財調査現地説明会資料』No.1、2 1984年)及び1984年の鳥取県教育委員会の徳尾地内での調査(県教委亀井照人、田中弘道両氏御教示)。生山古墳群調査では、高杯3個体を組み合せた長瀬高浜1号墳側と同様の土師器転用枕も検出されている。
- (13) 鳥取市生山29号墳。1984年鳥取市教育委員会調査。(『鳥取新都市埋蔵文化財調査現地説明会資料』No.2 1984年)
- (14) 久保哲正「権現山遺跡第2次発掘調査速報」『京都考古』第30号 京都考古刊行会 1983年

- (15) 註(3)文献による。
- (16) 鏡野町教育委員会『竹田墳墓群』 1984年
- (17) 米子市教育委員会『日原6号墳発掘調査報告』 1978年
- (18) 治部田史朗「古墳分布から見た因幡地方の古代社会」『郷土と博物館』第24巻第2号 鳥取県立博物館  
1979年
- (19) 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1981年
- (20) 山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ』 1978年
- (21) 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群』 1978年
- (22) 山本清『山陰古墳文化の研究』山本清先生退官記念論集刊行会 1971年
- (23) 瀬戸谷皓『七ツ塚古墳群』但馬考古学研究会 1978年
- (24) 豊岡市教育委員会『但馬・妙楽寺遺跡群』 1975年
- (25) 平川誠「日本海文化を考える会発表資料」 1981年
- (26) 註(19)文献に同じ。
- (27) 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1978年
- (28) 註(10)文献に同じ。
- (29) 『改訂・鳥取県遺跡地図』として公開されている。
- (30) 鳥取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書第11集』 1979年
- (31) ㊸鳥取市教育委員会『西桂見遺跡』 1981年、㊹若林久雄他『古代学研究会発表資料』 1981年
- (32) 註(30)文献に同じ。
- (33) 鳥取県教育文化財団『三浦遺跡一鳥取大学構内における考古学遺跡の調査Ⅱ一』 1982年
- (34) 尼崎市教育委員会『田能遺跡発掘調査報告書』 1982年
- (35) (財)大阪文化財センター『瓜生堂』 1980年
- (36) 鳥取市教育委員会『大桒遺跡・Ⅰ』 1978年
- (37) 註(36)文献に同じ。
- (38) 鳥取市教育委員会『古海遺跡発掘調査概報』 1981年
- (39) 註(27)文献に同じ。
- (40) 北浦古墳群発掘調査団「但馬・北浦だより」『考古学研究』29巻4号 1983年
- (41) 石川県教育委員会『金沢市七ツ塚墳墓群』 1974年
- (42) 丹後町教育委員会『丹後大山墳墓群』 1983年
- (43) 註(38)文献に同じ。
- (44) 岩吉遺跡発掘調査団『岩吉遺跡』 1976年
- (45) 註(36)文献及び鳥取市教育委員会『鳥取市文化財報告書13』 1983年
- (46) 鳥取県教育文化財団『布勢遺跡発掘調査報告書』 1981年
- (47) 鳥取市教育委員会『帆城遺跡・天神山遺跡調査報告』 1982年
- (48) 鳥取県教育文化財団『湖山第2遺跡発掘調査報告書』 1980年
- (49) 鳥取市松原谷田遺跡発掘調査団『谷田遺跡発掘調査概報』 1975年、鳥取市教育委員会「松原谷田遺跡  
Ⅱ」『鳥取市文化財報告書Ⅲ』 1976年

- (50) 1983年鳥取市教育委員会調査、報告書近刊。
- (51) 北条町教育委員会『土下古墳群発掘調査報告書第1集』 1983年
- (52) 近藤義郎「四隅突出型弥生墳丘墓二題」『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会 1984年ほか。
- (53) 註(31)@文献に同じ。
- (54) ここでは、他の場所で火葬して埋葬した墓を含まず、同一場所において火葬、埋葬が連続して行なわれた墓とする。
- (55) 註(31)@文献に同じ。
- (56) 校正中に次の文献によって気高郡鹿野町に1例あることを知った。関西大学考古学研究室『寺内廃寺発掘調査報告書Ⅱ』 1979年
- (57) 座右宝刊行会『世界陶磁全集3—日本中世—』小学館 1977年ほかによる。
- (58) 註(31)@文献に同じ。
- (59) 註(33)文献に同じ。
- (60) 米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団『いんだ』第13号 1982年
- (61) 島根県教育委員会文化課矢田分室『るーとナイン』第17号 1981年
- (62) 松江市教育委員会『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 1983年

---

鳥取市文化財報告書 16

西 桂 見 遺 跡 Ⅱ

1984年12月15日 印刷

1984年12月20日 発行

編集・発行 鳥取市教育委員会  
倉見古墳群発掘調査団  
鳥取市尚徳町116番地  
電話 22-8111番

印刷所 株式会社 矢谷印刷所  
鳥取市幸町96番地  
電話 23-7551番

---